

與謝野鐵幹作

水木

短歌新詩  
美文小說

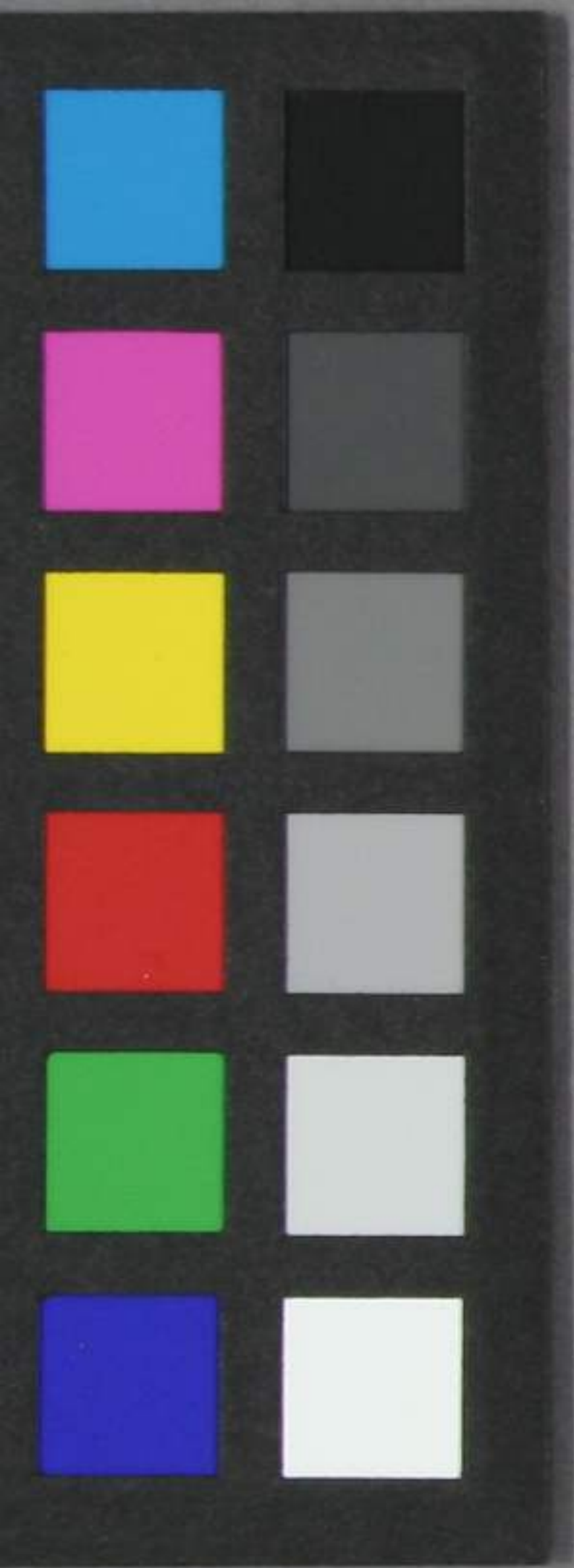


70

65

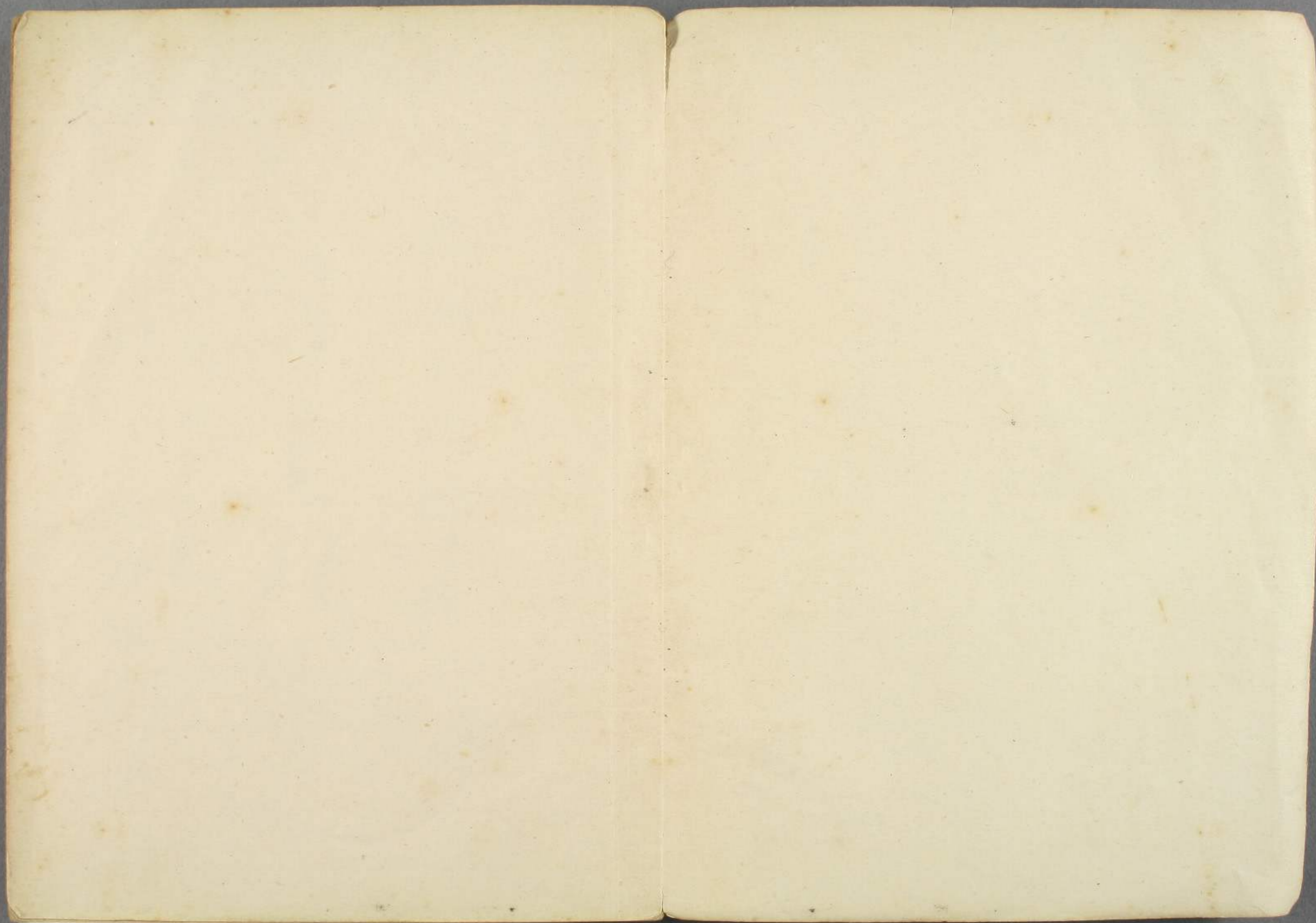
60

55









與謝野鐵幹作

之毛札木

美文小說  
短歌 新體詩



藤島武二筆

天 平 之 面 影

(藤島武二筆)



AMRZILV-F

天の平の面影  
(藤島武二筆)

80

85

90

95

100

拜啓

『明星』の精神は戀愛と光榮なるべく看視いたし候。戀愛と光榮を具体的にすれば青年と相成り候。天下の青年が其魅する所となる、蓋し不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已事と存じ候。

小生は『新詩社』社中の諸先生が、時の英雄なさに乗じ、幕地に進んで此心門の鍵を奪はれ候眼と手とに驚くものに候。

戀愛も光榮も今は『ミリオチヤ』の物と相成り候。戀に上下の隔なしとは先天的の原則に候へども、今は戀愛も黄金の前には随分頭を屈する様に相成り候。此後は美人系は『ミリオチヤ』の家にのみ傳はり可申候。かゝる時、戀の自由、獨立を道破せられ候も面白かるべく候。小生なども成るならば出雲の神さまの代理をして、思はるゝ女を思ふ男にそはせ、戀を解する女性を、



情を知る男の伴侶とさせてやり度く存じ候。たとへ理窟は山の如くに多く候とも、詐偽と無情と矯飾は人心を十重、二十重に縛り候とも、戀愛と光榮とを要求する心だけは枉げられもせず、殺されもせぬものに候。微火も活火なれば林を焼くべし、それを煽動なされ候事狡猾手段、感服仕り候。

小生は日本人の小膽なる戀にあきれ申し候。昔は志賀寺の坊主が京極の御息所にはれたる事も御座候。どうせ戀をするなら高嶺の花を折るほどの大膽あらまほしく候。三河武士は主人と美人を争ひ甘く成功したる者も御座候。路花巷柳を折るは馬鹿でも出来申し候。淫婦を誘ふは道樂者にもなり候。眞個の貴女の手を得るは唯眞個の紳士たる態面を失はず、眞個の「マンリチヌ」を發揮するに在るべく候。戀も此位大膽なれば神聖に相成り申し候。

し候。

いづぞやは所思を披陳し御教示を可仰と存じ候處、幸便有之候に付き寸楮を呈し候。早々頓首。

信濃毎日新聞社にて

山路彌吉



目次終

無眼禿奴	(短詩)	.....	一三六
里頭蛾	(短詩)	.....	一三九
扇中記	(美文)	.....	一四八
掌中記	(美文)	.....	一五五
埋木	(美文)	.....	二〇一
蝶ものがたり	(小説)	.....	二二五
わかなげき	(長詩)	.....	二五〇
木かげ	(長詩)	.....	二五一
鳥か	(長詩)	.....	二五二
悪源太	(長詩)	.....	二五三
兎源太	(長詩)	.....	二五四
枕上花瓶賦	(長詩)	.....	二五七



うもれ木



與謝野鐵幹作

小刺客

(一)

その頃僕ころ僕は朝鮮てうせんで、京城けいじやうの高等小學かうとうせうがくの學課がくと、同じ學校おなの別科べつこで有あつた韓語科かんごことを卒業そつげふしましたが、親達おやたちが領事りやうじ様の御勸すめを聞いて、是これから東京とうきやうの中學ちゆうがくへ入れる積つもり、將來ゆくは高等商業かうとうしやうげふへ入學がくさせると云いふので、當分たうぶんは英語えいごを習ならふ爲ために、公使館こうしきわんの二等書

記官、法學士で有る秋本司馬太先生の處に通つて居ました。司馬太先生、今は露國公使館の一等書記官に成つてお在ですが、この先生は生れつき、一風變つたお方、御酒が嫌ひ、實際が嫌ひ、居留地に流行の玉突などは見向も成さらず、だから頓とお友達が無。公使館では、東京の外務省から來る暗號電報の翻譯から、倫敦からのルーター電報の翻譯が、表向のお役で、英語と佛蘭西語はお上手だけれども、實際がお嫌ひだから、朝鮮の外務省の往復や、各國公使館との交渉は、一切一等書記官と外交官補とに任せて、その實先生は公使様の黒幕で、何事も大切な外交の出來事には、皆この先生が公使の片腕だと、父などは平素話して居ました。色の白い、眉の濃い、髭の善い恰好な、眼と眼との間が少し狭いやうで、苦味走つた顔に、自から人を懾

れさせて、屈服さする御威光が備つて居ます。大學を卒業なつてから七年、三十五にお成りと聞きました。が、未だ奥様が御國にも御有り成さらないのは眞實の事、下女を遣はずに、朝晩三度の賄は、公使館から運ばせて、御嗜好な物と云つたら、御本を御讀み成さるのと、馬と、庭に草花を種ゑる事の三つでせう。何時も御馬の武夜叉と名の附いたのに騎つて、龍山あたり、西小門の外、其處彼處二三里の處へ御乗り成されて、氣が詰まると馬に限ると云つて被入る。御歸には、田舎家には珍しい牡丹の株だ、買つて來たなんて一言有仰つて、然う他人のやうに御笑顔も成さらず、黙つて馬丁に指圖して、窓の所へ植ゑて被入る御様子、あの二言目には笑つて見せる小學校の校長などに比べると、却て十倍も二十倍も御嬉し相に見える。僕も尋常

科の時分から、植物の採集は大の好き、勿論先生の御好きは御覽に成る計りで有らうけれど、僕と先生とは、第一この植木から氣が合つて、日曜などには南山へ上つたり、漢江に沿ふて下つたりして、色々の植物を掘て来て持参するので、先生の官舎の、丘の様に成つた廣い御庭には、東京などで見られぬ自然生の菖蒲の花が咲けば、朱實の果までが成る。一つ池が欲しかつたけれど、先生は頓着が無い、位置も何も構はずに、唯だ空いた處へ植ゑて、水や明太魚の乾糟を遣つて、花は花、草は草、思ひ思ひに大きく成るのを喜んで被入つて、一本でも枯れると、直ぐに引抜て御棄なさる。是が一つ先生にも、神経質な所が御有り成さると申すより外、先生は誠に大度な方で、そして親切で、僕がスintonの萬國史を幾遍質問しても、煩さいと云ふ氣色

も爲すに教へて下さる。最も、先生に可愛がられて居るのは、僕と、先生の書齋の澤山の金縁の御本と、武夜叉と、庭の植木と、是だけで、外の者は、馬丁の六も餘り御氣に入りでは無いかして、内の旦那の様な主人を持つて居ては、廣島の奴に仕送りも出さないなんて、蔭口に厭な事ばかりを聞かせる。が僕には、三歳の時に父や母と京城へ渡つて、西洋雜貨店を出して、京城で大きく成つて、本國の事は讀本や新聞や、學校の教師から聞く丈の僕には、この先生程の威嚴の有る、學者で、男子らしい、親切な、豪傑人は無いと信じて居ました。

## (二)

すると、僕の其時分の考で、僕の先生の爲に、誠に残念な事が起りました。或日僕が、先生の御退館に成る午後の三時過に、

例日の英語の稽古に、先生の官舎へ行きますと、玄關に朝鮮靴が一足脱いで有つて、大きな聲で奥座敷の御話聲が外まで聞える。珍らしい事だ、朝鮮人の客だな、其にしても彼の笑話は朝鮮人では無い、日本語だ、勿論先生の聲も平生よりは高いが、大人しやかで有るのに、一人の客の聲は濁聲で、大相御酒に酔張つて居るらしい、斯んな御客の有るのは珍らしい事だと思ひながら玄關は明いて有るので、馴れた廊下を通つて、先生御免と坐つて、襖子越に御挨拶を爲た。玄關から御遠慮して歸るので有つたけれど、一昨日日本からの白河丸の便で、神戸肉の鐘詰が着いたのを、先生に御上げ申せと、父から委托が有るので、其事を申し上げると、先生は、山口かど有仰つて、襖子を内から御開け成されて、はいれ、構はないとの事。また御辭儀をし

て、鬨の外に坐つて、頭を上げしな内を見ると、珍らしい事だ、先生の御宅には見た事の無い、井角の印の有る廣蓋に、色々の料理が陳んで、麥酒の罍が一打、もう半打以上口が切つて有つて、轉倒んで居るのも一二本ある。僕が田口と云ふ小學校の數學の教師の所へ行つた頃には、朝晩こんな不體裁な御酒事の場處を見せ付けられたけれど、先生の御宅には初めてだと思ふと、何とも知らず眼を横へ逸したが、遽かに胸元が悪い様に成つて、此處に居るのが羞しい氣持に成つて、直ぐ御暇を爲やうとまで思ひました、其に御客と云ふのは、年頃は二十四五、髭の無い、綺麗な男振では有るが、非常に酔つて居て、話の呂列が廻らぬ様に成つて居る、先生は御飲に成らぬから、最初注いだ儘らしい硝杯を前にして、太卷の葉巻を手にして御在でなければ、御客

は僕の顔を一寸見て、左の手で硝杯を持つて、右の手の手酌で満  
 満と注いで、仰視いて、ぐッと一息に干した兩の頬は、宛で庭  
 の熟した朱實のやう。馬の毛の冠に、纓緒には青玉を飾り、雪  
 の様な支那綸子の朝鮮服は、確かに此國の貴人の服装だけれど、  
 御話は日本語、内冠から透いて見える髪は散髪、どう爲ても日  
 本の方に違ひ無い。厭な酒飲の御友達なんか、さぞ先生も御煩  
 いのだらうと思ふと、先生は僕を無理に内へ坐らせて、此御客  
 に御挨拶を成さい、朝鮮人では無い、昨日威鏡道から御歸りだ  
 が、朝鮮街の契洞の、趙義淵の邸跡に逗留して御出での、吉木  
 さんと云つて、詩や文の上手な僕の友達だ。斯う有仰るので、  
 御客に改めて御辭儀を爲た。すると、吉木云ふ酔張ひの方は、  
 うむ、詩や文の上手な、但し女房は無い、子は無い、金は無い、

そして最も行儀の悪い友達だと、僕を睨む様に見て、幾歳だ、  
 十四、美少年だ、酒を飲むか、飲まない奴は天下の事を議する  
 に足らんや、秋本には失敬だが、美少年酒を飲むかと、大きな  
 口を開いて、は、は、は、と妙な高笑ひを爲て、僕に左の手の硝杯  
 を差附けた。僕は羞かしかつたの歟、腹が立つたの歟、御返事  
 も爲すに突と立つて何も云はず、先生に御挨拶も爲すに、襖子  
 だけはびしやッと締めて、無中に逃げ出して、今は公園に成つ  
 て居る、南山に沿ふた高臺で、京城中を一陣で瞰下す、倭城  
 臺の廣場まで來ましたが、残念で、残念で成らぬ。何故あの先  
 生に、あんな酒飲の御友達が、田舎から邪魔しに歸つて來たら  
 う、屹度僕は明日から、先生の處へ行つても、英語は習へない、  
 困つたなあ、困つたなあ。僕は北漢山から王城の大きな瓦屋根

の上へ掛けて、妹の頭巾の色の様な、丁度鳩羽色と教はつた色の様な薄靄が靡いて、其に秋の入り日が美しくう反照して居るのを眺めて、思はず泣き出しました。

## (三)

其晩は何事も思はずに寝ましたが、朝に成ると、今日の稽古が氣に成つて、彼の様な失禮な歸り方を爲たから、先生は屹度怒つて被入るに違ひない、平生お優しい方丈けに、恩知らず、行儀知らず、憎い奴と、大相怒つて被入るに違ひない。如何して御詫を云はうか、如何しても先生の御宅へは上れない、悪い事を爲たな、だつて最う仕方が無い、先生一人なら善かつたけれど、御客の前だつたからな、御客が無かつたら、あんな事は起らないのだけれど、嗚呼怖いな、先生は如何今頃考へて御出で

か知ら、如何しても行かれない、父様に詫つて貰はうか。父様にも、其様失禮を爲た事は云へない。父様は肥前の士族、さむらひの御氣象が激しいから、母様でさへ彼の様に御叱り成さる。僕は學校の試験前には、随分心配も爲たけれど、此様に胸を痛めて苦しんだ事は、今日が初めて、其に生れて嘘と云ふ事は云は無かつた僕が、今日は初めて罪を犯しました。午後に成つて、父が店から僕の居間へ来て、正一、もう秋本さんへ上る時間だぞと申しますから、今日は休むのです。何故。何故て先生の御用で、一週間ほど。然うか、休んで呉れと有仰るだらうよ、大分事が起つて面倒だから。父様、事では何が起りました。御前達の知らない事だ、露西亞と朝鮮とに内處の約束が出来るのだ。父は斯う云つて彼方へ行つて了つたので、僕はほつと息を



附いた。嗚呼、わるい事を爲た、諛をつくなんて男子の耻だと思ふと、人誰か、僕を捕縛に來は爲まいか、是が知れば爲まいか、何とも云へぬ、怖ろしい羞しい、悲しい氣に成つて、四邊を氣遣つて、我知らず見廻すのです。能く友達を伴れて、朝鮮街の方へ運動に出る僕だけれど、店頭へ出るのも厭に成つて、店頭を御通り成さる先生に逢ひは爲まいか、先生から使が來は爲まいかと、斯んな事ばかり、思ひ惱んで、幾ら披げて見ても、書物は目に入りません。二三日經つて、四日目の朝に成ると、果して馬丁の六が來た。先生からの口上で、日の暮に是非僕に來て欲しい、夕飯を濟まさずに来て欲しいと云ふので、店に居た母は、畏まりました、屹度さう申付けますと云ふて御返し成された。仕方が無い、如何しても上らなければ成らぬ。僕は漸と

の事で、斯う考へた、木村長門守だ。木村長門守だ。今から思ふと譬喩は大變間違つて居ましたけれど。何十萬と云ふ東軍の陣屋へ、一騎で使者に行つたぢや無い歟、あの度胸が豪い、男子は彼の度胸が無くては成らぬ。長門守のは家康と云ふ悪賢い大敵の前だけたど、僕のは反對で、優しい優しい先生の前へ上るのだ。怖いには怖い、昔から豪傑と云はれる人は、皆、天子様の前や、師匠の前、主人の前、親の前、友達の前、兄弟の前で、過失が有れば、思ひ切つて、正直に御詫を爲て、赦して頂いて、其から後は行爲を慎んだり、一層奮發したり爲て居る。然うだ、御詫を思ひ切つて爲たら、先生も赦して下さう。何も悪う御座りましたと、そして、御叱りを大人なしう聽きませう、長門守の度胸で上らう。僕は斯う決心して、午後五時を

待つて、公使館の側の官舎へ参りましたが、高い動悸が打つて、耳も鳴る様で、如何して立關を開けたか、御免と云ふたか、云はないか、無中で御座敷へ通ると、感冒でも引いたのか、二三日顔を見せない様ぢや無いか、と例日より御詞が多いやう。をして、例日より御優しいやう。そして、例日の御聲には違いないのだらうけれど、今日は何やら僕の腹の中へ浸み入るやうな御聲。共處へ六が、早がすが點けますと云つて、空氣洋燈を先生と兩人の中に釣つたので、一層まぶしくて、僕は益々頭が下ります。

## (四)

手を附いて御詫を爲やうと思ふ内に、六が火の熾つた大きな朝鮮の鐵火鉢を持って出て、山口の若さん、先生ん處で御馳走は初

めていがかしよ、此頃は珍しいんだ、毎晩面白い御客様が有つて、毎晩これですが、先生の御宅には見なれぬ、支那出來の、朝鮮の善い邸では偶に見る、贅澤な代物の、銀の煮鍋を火の上に掛けた。次に運んだのは、何處かの料理屋の借物で有らう、朱塗の華美な廣蓋に、豚の肉の皿と、芹の皿、豆腐の皿。俺が遣ると、先生は箸を御取に成つて、丁度先生の御話に聞いた、東京で下宿して被入つた時の様に、御手づから遊ばすのを見ると、僕が來なかつた三日の間に、毎晩今六が云ふたのは其で、彼の朝鮮服の吉木と云ふ酒飲の御友達が來て、先生に斯様面倒な事の癖を御附け申したので有らう。厭な御友達だと思ふと、吉木と云ふ人の顔から、彼日の此座敷の模様が目浮んで、あ、彼日の御詫を爲やうと、喉までは出たが、如何も申し苦い。凝爾

と疊を見詰めて居ると、君、何を考へて居るんだ、さあ箸を取れど、杉箸を割つて下さるんで、御辭儀をして受けた。六の給仕で御飯を頂いて了ふたが、初めに機會を失ふたので、御詫は如何しても出来相に無い、其に先生の御様子を見ると、頓ど其怒つて被入る態度も無い、例日の様に、否例日より御優しうて、何かと御話しを御仕懸に成る。彼日の僕の失禮した事は、何とも御氣に御掛け成さら無いのか、眞實に先生は豪い方だ、他人とは違つて居ると、今晚は又しみじみと感心した。六造、そこらは捨て、置いて明日の朝方附ける、今夜は出て行つて可いぞと有仰ると、難有うがす、ぢや公使館で湯を貰つて來るだど云つて、彼方此方の戸締を爲て、臺所を出ると、佳い月だなあと空を仰いで、直ぐに、米が拾錢すりや何とかと、厭な節の

唄を小聲に唸つて行つて了ふ。少時すると、先生は、山口君、今夜は少し御話がある。火鉢へ近う寄るが善い、と改まつた御詞、僕は體中の毛孔が一時に豎つて、慄然としました。あ、矢ッ張先生は其事を御叱り成さるなど、思はず下げた頭を密と上げて、先生の御顔を覗ふと、僕を見て莞爾微笑んで被入る先生は、一向さうでも無い御様子。僕は如何して善いか、彼丈決心した木村長門守の度胸も、先生の前では何の役にも立ちません。先生は傍の葉巻を御吸附に成つて、一服徐かに御吹き成されて、君、君はチャンドルクを知つて居るかね。はい、何時かの御話で存じて居ります。未だ年の行かない娘の子だつたね。はい、十六でした、死にましたのは二十歳。君、チャンドルクは何故に名高いと思ふ。それは先生、佛蘭西が英吉利軍に攻められて

誠に危かつた時に、自分は佛蘭西を救ふ爲の天使だと信じて、佛蘭西國の爲に働いて、火刑にまで成りました。先生の突然の質問に、斯う御答すると、先生は僕の顔を、僕の眼を、凝爾と御覽に成つて、では君に問ふが、此朝鮮が今、佛蘭西の彼時の様に、露西亞と云ふ様な外國の軍隊に攻められて、危険な事に成つて、御互日本人も此國から追拂はれる様な事に成つたと爲て、そして、君を假にデヤングルクだと爲たなら、君、君は其時は如何する、日本のため、朝鮮のために、デヤングルクの様に働かうと思ふかね。何と愉快な先生の御質問ぢや有りませんか。僕は彼日の失禮も、御詫を爲る事も、一切何も斯も忘れて了つて、両手を膝の上に置いて、決然御答を爲しました。はい、勿論です、先生、私は加之に男子ですもの。斯う申上ると、先生

は突如跳上るやうに、御體を前に御乗出に成つて、右の手で僕の右の手を緊かり御握り成さつて、山口君、立派な答辯ですと、併し平生よりも低い低い御聲。左の御手の葉卷の尖の、五分計り灰に成つたのが、僕の膝の上へ落ち掛つたのを、慌て、御拂ひに成つて、其決心は君、男子たる者が二度と變へは爲まいね、實は僕から、否公使様と僕とから、非常な依頼が君に有る。斯う有仰つて、少時黙つて僕を御覽に成つた時の先生の御姿は、もう御優しいと云ふよりは、唯だ崇高うて、其御眼元なり、御顔附なりが、英佛海峡の劇戦に、創傷を取けながら軍艦に立つて、味方を指圖して居るナルソン將軍の繪の様に思ひました。

## (五)

世間は廣いけれど、今時僕の年頃の少年で、先生の此晩の様な

御話を聴いて、此晩の様な太切な御役目を受けた者は、恐らく一人も有りませぬ。大人に成ると有る事でせうけれど、未だ十四の僕が、斯様大事に出合ふたのは、其は屹度、外に二人と無いに違ひ無い。先生は僕を何の位見込んで下さつて、斯様名譽な事を御授け成されたので有らう歟。後から考へると、随分大膽な怖ろしい事なただけれど、僕は先生の御詞に感心して、唯だ嬉しうて、涙を揮つて御引受を爲た。京城、仁川、釜山、元山、木浦、鎮南浦、朝鮮だけの日本の小學校でも、千人からの男の生徒が有る、日本の本國の事を云ふなら、何百萬と云ふ小學の生徒や、何萬と云ふ中學の生徒が有るけれど、僕の様な命令を、公使様と先生とから受けた少年は、屹度僕一人だと思ふと、嬉しうて、嬉しうて、涙が出るのです。此晩の御話は僕

は今でも、最う三年に成るけれど、初めから終末まで、先生の御詞の一句も餘さずに、順序を附けて覚えて居ます、此に其を書て置いて、サツと年月が経つた後で、多勢の朋輩に見せたいんだけれど、僕は此晩、先生に堅く禁じられました。山口君、これは外交の機密と云つて、天子様と、公使様と、そして君と僕と丈が知つて居る事だ、父様にも母様にも、御友達にも、何んな人にも、何んな怖ろしい人の前で拷問を受けても、今夜の話は決して喋舌つては成らん。斯う先生が有仰つたのですもの、僕は残念だけれど、大日本帝國の外交の機密です、詳しう書く事は出来ません。次の晩、御約束を爲て置きましたから、六時頃に上ると、六造は何處かへ御使に行つて留守です。先生は朝鮮語の御出来に成らぬ癖に、なせ朝鮮の事を能く御存じだらう。

最う細かい朝鮮街の地圖が出来て居て、洋墨で赤や青の筋が引いて有る。火箸を御持に成つて、此處の街が廟洞だ、此處が桂洞だ、此邸が李齊純と云ふ親王だ、是から一町計り南へ寄つて、此通を左へ曲れば、是が今の目的の邸だ。斯う有仰つて、其から、今一枚の繪圖を御出しに成つたが、其には外務大臣の閱景黙の邸中が詳しく書いて有つて、正門、二の門、奥庭の穴門、裏門、座敷の間取まで、丁寧な教へて下さつて、遁路は是だ、遁げしなに遁げ遅れて、邪魔する者が有れば、構はない、其奴等にも投げろ、後の爲に必ず朝鮮靴は脱いて置くのだ、足袋の儘が遁げ能くも有るから。斯んな事を聽かせて下さつて、先生は又、次の間の戸棚の錠を開けて、がさこそと反故で、有らう、音を爲せて、取出して御出に成つたのが、昨夜の御話の其品、

火鉢の側は危険いと云ふので、壁に浴ふた緑の鶯絨の長椅子の上へ、腰を御掛に成つて、此品だと低い低い御聲で、両手に載せて、御見せ下さつた時、僕は寒慄が爲て、思はず眼を塞いだのは、周圍六寸も有る、鐵葉で圓う包んだ爆烈彈。處へ裏口の戸が開いて、六が歸つて來たので、先生は直ぐ、元の戸棚へ御仕舞に成つた。はあ只今でがす、契洞から、御使の品を持って歸りました、大相彼處の先生に御酒よばれましてねど、六が大きな風呂敷包を出した。すると、可し、其處へ置けど有仰つて、先生の御話は遽かに、山口、南漢山の紅葉は佳からう、天長節には前の日から、泊り掛で行かうなんて有仰る。大分に夜が更けたので、六は御許しを受けて、馬小屋の側の自分の部屋に寝に行つたが、先生は炭を火鉢に御加ぎに成つて、日本から新し

う着いたツツフルを出して、罐の牛乳を入れて、咖啡を御拵へ成されながら、君、其布呂敷包を開けて見給へと有仰るので、はいと立つて、六が持て歸つた儘のを解くと、ああ敏捷いこと、僕が其御役目の日に着る小さな朝鮮の冠、朝鮮の服、それに小さな朝鮮の足袋、朝鮮の靴までが揃つて居る。未だ外に圓い帽子入の青い洋紙箱が一つ。其も開けるんだと有仰るから、密つと両手で蓋を取ると、中には、其は美しい薄紅梅色の羽の鸚鵡が一羽、可愛い可愛い眼附を爲て、眞白な綿の中に、肅然と身を縮めて居ます。

## (六)

其次の日の次の晩は、先生が公使館で徹夜を成さるから、御留守番に上ると云つて、父にも母にも斷つて、先生の御宅に泊り

ました。早くから寐て置けと仰有つたので、先生の御寢臺、三人も寐られる廣い御寢臺に横に成つて、何枚もある白の毛布を被ぎは被いだけれど、如何も眼が冴えて寐られません。先生は宵に一寸御歸りに成つた計、朝から公使館へ詰めて、大事な御用が御有り成さると見える、漸つと夜半の一時が鳴つて御歸りに成つた。御歸り成さいと申上げると、未だ寐附か無かつたのか、其ぢや不良と有仰つて、御寢卷を召して、さあ寝るんだ、もう二時間と有仰りながら、寢臺に僕と並んで、同じ毛布を御被ぎに成つたが、はいと御返事したきり、僕も無言、先生も無言、眼は塞いだけれど、一昨日昨日二日かけて、外ながら調べて来た朝鮮街の道筋、外部大臣の邸の前通から表門、裏門から裏通などが、瞭然眼に浮んで、其から又、口の中で、何遍も、

彼云はう、斯う云はうと、先生から教はつた事や、自分で考へた事を、朝鮮語で復習して見る様に成つて、如何しても寐附かれない。僕計りかと思ふと、然うで無い、先生も度々寐返りを成さつて、頓と御躰聲が爲ません、何か矢つ張考へて被入るらしい。其中に三時が鳴つたので、僕は密つと起きたが、先生も直ぐ御跳起に成つて、僕に顔を洗ふ世話やら、朝鮮服に着替へる世話を爲て下さる。宵から火が埋けて有つたのか、鐵瓶の湯か沸いて居るので、茶漬を食つて行けど有仰るけれど、僕は腹の工合が頂け相にも無い。では是をど有仰るから、罐の牛乳を融いて硝盃に二つ頂いた。午前四時四十分、まだ薄暗い中を、僕は先生の御宅から出た。先生は玄關まで送つて下さつて、萬一遣り損ねたからつて、精を落すな、遁げるのを巧妙に遁げる

んだぞと有仰る。僕は領いたま、朝鮮靴を穿いて、紫の緒を足に附けた鸚鵡を抱いて、公使館の前の道を右へ取つて、裏道を急いだ。泥岨の居留地を離れて、十五六町も有る東大門の近所で、夜の明けるのを待つ積り。路の霜は雪の様に眞白で、歩く度に砂原を踏む様な音が爲る。朝鮮人は一体に朝寢坊だけれど、馬方とか、輿夫とか、豆腐屋とか、安飯屋とか、下賤の生活の家は、最う家内が起きて居て、竈の煙が彼方此方から揚つて居る。僕は氣が勇んで居るので、急ぎ足で東大門まで来たが、五時に開く門は今開いた所らしい。田舎から鐘路の朝市へ出る薪賣が、大きな牛に、松葉や松の樹の薪を、山の様に附けて、五人、七人、十人、隊を作して、皆が長い管の煙管を啣へて、笑ひ話を爲合つてるのも有れば、居睡ながら歩いてるのも有り、



若い男などは、アラランの謠を美しい聲で唄つて入つて来るのも有る。門の左の、丈が貳丈も有る大戸に倚れて、此混雑を見て居る内に、次第に夜が明けて、種々の田舎者が、ぞろぞろと引も切らず入つて來出した。大きな鼈甲の縁の眼鏡を掛けて、驢馬に銀の金具の鞍を附けて乗つて居るのは、田舎の金持で有らう。馬に一文錢の串を澤山積んで、十頭も二十頭も曳いて來るのは、田舎の役所から度支へ納める税の金と見える。四五人連の坊主は、圓い竹の笠に鼠色の法衣、水晶や菩提樹の珠數を頸から胸に掛けて、白い布呂敷包を脊負つて、松の木を四角に削つた杖を附いて來る。褪めた草色の被衣で顔を隠して、目計り出して、片手に被衣の襟、片手に矢張桃色の小さな被衣を着た、七歳位の女の兒の手を引いて、一人の三十恰好の下人に荷を

負はせて供に爲て居るのは、京城の親類でも頼つて見物に上つた、田舎の士族の嫁さんで有らう。時間が経つまで、斯様人通を見て居ると、前から突然に鳥賣と大きな聲。向ふを見ると、朝鮮の巡查が、門内の右の交番から僕を見附て喚んで居る。今考へると何でも無い事を、僕は甚く愕いて、唯と朝鮮語の返事は爲たが、一散に鸚鵡を抱へて、雑沓の中に紛れて、何處を如何逃げたか、何でも右へ左へ、右へ左へと驅けた。廣い辻の右側の、大きな邸の門の前まで來たので、善からうと立ち止まる。と、又後ろからどやどやど靴の音。驅け出さうと爲たが叶は無、両方の袂を捉まへて、口々に鳥賣鳥賣。振返ると、淡紅色、紫、白、紅梅、縹、さまざまの服を着飾つて、房々ど爲た綺麗な髪を分けて、其を後ろで束ねて、下げて、顔には白粉をして、

脂臘まで點した、五歳から七歳八歳までの男の兒が十五六人。僕は何時の間にか、桂洞の貴人街まで来て居る。

## (七)

僕は漸つと動悸が静まつたので、坊ちやんがた、此鳥は善い鳥でせう、至寶の鳥です、ですから閔大臣の御邸で買つて頂かうと思ひます、大臣の御邸は何處か教へて頂戴と云ふと、此辻を左へ曲るんだ、教へて遣らうと、僕の前後を取巻いて、案内して呉れる。僕は能く知り切つた道だけれど、難有う、難有うと云ふて附いて来た。其邸の門に来ると、大戸が左右に開いて居るので、兒供達はすんすん先に立つて入つて、おい、おい、下人は居らんか、鳥賣だ、鳥賣だと叫ぶと、二の門の土塀に沿ふた左の方の下人部屋から、應、應と幾人も返事して、年寄の、

白髪の有る、大きな眼鏡を掛けて、冠も着ない略服の上に、紫の日本甲斐絹の袴纏を着た下人が、黄色い長い煙管を手を爲て出た。續いて冠を着て、白い服に茶色の綸子の袴を穿いて、鼠色の上衣を羽織つた氣取屋の若い下人が、表紙の碧い朝鮮の小説本を持ちながら出た。門と二の門との十坪計りの庭は、右の隅に脊の高い柿の樹が二本あつて、馬を始終繋ぐので有らう、幹は綱の痕や齒の痕だらけで損じて居るが、柿の實は眞赤に重い程なつて居る。僕は下人に挨拶をして、珍らしい鳥です、御買ひ下さいと云ふと、若い下人が、何と云ふ鳥だ。鸚鵡です、不思議な名鳥です、年寄の下人は、さも名鳥だと云ふ顔附で、感心して、何處で捕つた貴様、怪しからん、斯ふ云ふ靈鳥を捕つては命が縮まる、畏れ多いが、故の王妃殿下様は、御夜食の膳

に鶴を召し上つて、彼様な非道な最後を成された、如何も怪しからん。若い下人は、何を老爺が知つた事か、馬鹿など云ふ様な笑ひ方を爲て、幾何で賣るんだと問ふた。僕は、此處が先生から教はつた處だと、心の中で思ふて、貴い靈鳥の直段は、貴君方には話されません、御邸の大臣の様な方で無くちや、平民が直段などを聴くと罰が當る。斯う僕が云ふと、若い下人は黙つて下を向いて舌を出したが、年寄には甚く氣に入つたと見え、尤もちや、奥へ申上げて見やうと、二の門を悠然と啣へ煙管で入つて行く。僕の立つて居る庭の内は、段々に殖ゑて、近所の貴族の男の兒で一ぱい。中には通掛りの、肩章の紅い、黒い帽の尖つた侍衛兵も、三人五人交つて居る。教育の行届かない、開けぬ國は仕方が無い、何でも物見高いので、寄つて集つ

て、わい、わい騒ぐ。けれども僕には、今日に限つて、其騒ぎが耳に入らない。何故か自分の體は中宇に浮いて居て、頭は板の様な堅い物で押へられて居る氣持。多勢の兒供や兵隊や、若い下人が、鸚鵡の事を色々聞いたが、何と答へたのか、覺えても居ない。三歳から朝鮮の兒供と遊んだ僕の朝鮮語は、勿論疑念を惹く譯は無かつたらうけれど、袴の中の右の隱袋には破烈彈が二個、兒供等が押合ふた中で、能く間違が無かつた事、今思ふても腋の下に汗が出る。ふツと氣が附くと、下人部屋の障子が開いて、中から又四人の下人が首を出して此方を眺める、朝鮮將棋の勝負でも附いたので有らう。丁度その部屋の舊い形の鳩の時計が、ほう、ほう、ほうと朝の十時を報した。

年寄の下人に伴れられて、二の門を入ると、繪圖で見た通りに、直ぐ右へ曲つて幅二間の道が、左は馬小屋、驢馬小屋、飼料の藁小屋、右は眞鍮の錠の下りて有る倉庫が三つ。衝當りは、二十疊敷計りの高い板間の外房が、壁に長く出来て居る。其處には四五十人の客が、鶴が下りた様に白い冠に白い服、ぎっしり跌坐を搔いて、煙草の煙は雲の様に高い檐を這つて居る。朝鮮人は獨立の氣象が無いので、一人が大臣にでも成ると、何百人と云ふ親類や友達や子分が、田舎から上つて、役人に爲て呉れ、役人に爲て呉れと、附き纏ふ様に頼む。大概な大臣は、食客に食ひ潰される計でも、大相な御錢が要る。だから大臣に成ると、悪い事を爲て賄賂を取つて、食客を養ふて、食客を七十八人置いて居る、百人置いて居ると云ふのを、自慢に爲て居る。此處

に一ぱいに成つて居る客も、其食客で有らう。其間へ上らうとする左に、一間程の煉瓦の塀が有つて、穴門が出来て居る。此處の戸は、繪圖で見えて氣遣つて居ただけれど、此秋の暴風で壊れたのか、代りに竹の簾が掛つて有る。簾を上げて入ると、廣い庭の築山は、一面に紅白の菊の花が咲いて、下には菱形の細い池、此國には珍しい堀抜の井から、水は滾々と湧いて、碧い平たい石の上を瀧の様に池に落ちる。僕は咽喉が渴いて居た計で無い、先生から教はつて居たので、氣を落ち附ける爲に、井に倚つて、片手で水を掬ふて飲んだ。三掬ひ飲んで、ふと前を見るとき、鸚鵡を抱いて立つた僕の朝鮮姿が、晴れた日の光で、底の澄んだ池の上へ、眞白う、菊の花と重なり合つて映つて、鸚鵡の羽の薄紅梅色と、二筋の房の紫とが、僕の左の胸の處で、

一際目立つて美しくしい。此方へ来いと下人が呼ぶので、振向いて右の方を見上げたが、僕は生れて以來、斯んな羞かしい思ひを爲た事は無い。高い御殿の上に、何と云はうか、紅やら、緑やら、鬱金やら、紫やら、眩ゆい様な上衣を着て、長い又色々の裳を引きすつて、二十歳から十四五の女計りが十五六人、おらりと立つて、袖で皆顔を半分隠して、僕を見下した。男子と云つたら、七段も有る石段の下に、白髪の下人が横向に、唯だ一人謹んで踞まつて居る計。僕は赧然顔が燃える様に成つたが、下人が上れと云ふので、石段を上つて、椽に腰を掛けて、無言で椽を見たまゝ、辭儀を爲た。朝鮮では、女が外の男子に顔を見せると云ふ事は爲ない事だけれど、下人が如何云ふたのか、斯んな窮屈な處へ僕を入れたのは、能く能く鸚鵡が見たいと見え

る、何か貴方が貴方が譲り合つて居たが、漸つとして、二十四五の、鬚の有る、青い玉の象眼の銀の簪を挿した女が出て、お前、御邸の御姫様が、お前を此處へ御入れ遊ばしたと云つては行けませんよ、宜しいか、此御鳥は何處から捕つて來たの、お前、俄羅斯かい、美國(米國)かい、え、大國(支那)ですと、御姫様妙ちや御坐いませんか、阿呆な大國にも、斯んな名鳥が棲んで居りまする相な、美しくしいのね、お前何を食べさすの、そして之は雄鳥なの。女は無間斷に喋舌つて、雄鳥なのと云ひさして、僕の俯向いて居る顔を覗く様に見たが、他女と顔を見合せて、何か密々と笑ふた。僕は唯はいはいと返事を爲る計り、此様に女共を相手では、先生に習つて來た應答も、何の用にも立た無い。何女が御姫様が、密つと顔を上げて見ると、多勢の

背後うしろに成なつて、一人ひとり眞白まっしろな上衣うはぎに、眞白まっしろな裳もを着つけて、髪かみの黒くろい、色いろの玉たまの様やうに白しろい、十四五しごの細面ほのおもて。何かなに右みぎの方ほうの十八はち計けいりの女をんなと囁ささいて居ゐて、其目そのめと僕ぼくの目めと不圖ふと見合みあつたので、慌あわて、顔かほを左ひだりの女をんなの背中せなかへ隠かくして了しまふ。僕ぼくも直すぐに俯向うつむいたが、二十四にじゅうの女をんなが立たつて行いつて、何かなに御姫様おひめさまに申上まうしげて、又また出て來きて、お前まへ、お前は果報者くわはうもの、いや此鸚鵡このあうぶは果報者くわはうもの、御姫様おひめさまが御買上おひあけに成なる。

(九)

御買上遊おひあけあそばす事ことに成なれば、直段ねだんを申上まうしげい、幾金いくらだど、下人げにんが石段いしだんの下したから云いふので、直段ねだんは大臣だいじんに御目おめに掛かけた上うへで極きめて頂いたきませう。僕ぼくは先生せんせいに教をはつた通りとほに斯かう云いふた。すると、大臣だいじん様さまは昨夜ゆうべから、俄羅斯おろしやの公使館こうしきんに御泊おとまりて御留守お留守だ、御姫様おひめさま

の御前ごぜんで申上まうしげたが善よからうと聞きいた時とき、僕ぼくはがッつかり爲した。留守留守か、留守留守か、あ、折角せうかく此處こゝまで入はいりながら、残念ざんねんだな、残念ざんねんだな、一体たい如何いかにしたら善よからう、詰つまらないな、まあ待まちてる丈だけ待まちつて見みやうや、其それより仕方しかたが無いな。斯かう思案しあんして、何時いつ御歸おかへりに成なりますと問返ごひかへすと、遅おそくも十二じふに時じ、最もう程ほども無なからうとの事こと。やれやれ、先まづ其それなら善よいわど安心あんしんして、では堅意かたい地ちな様やうですが、何卒なにとぞ御歸おかへりまで待まちたせて頂いたきませう。二十四にじゅう五ごの女をんなが口くちを出だして、待まちつが善よい、待まちつが善よい、如何いかにしても御買上おひあけなさるんだものお前まへ、そしてお前まへ、然さう極きつて見みると、鸚鵡あふむは御邸おのしやの物同ものどう様やうぢや、私わたしが貫ぬひませう、御姫様おひめさまお側そばへ持もつて参まりませうね。御姫様おひめさまは御領おんりやうきに成なつたと見みえて、女をんなは僕ぼくから鸚鵡あふむを取とらうと爲する。大臣だいじんの顔かほを見みる迄までは、渡わたしては成ならぬと思おもふたけ

れど、又機嫌を損じて逐ひ出されても詰ら無いし、宜しいと云ふて、手に巻いて居た緒を解いて、鳥の頭を二つ三つ撫でて、さあ御姫様の御側へ御出と渡した。女が両手に抱いて持て行くど、御姫様は、私が抱いても如何も爲んかえ。致しませんども、温順し御鳥ですもの、此羽の色綺麗な事は如何で御坐います、そして此位の鳥には名が附いて居さうなもので御坐ますね、ねえお前、何と云ふ名なの。僕はうっかり聞き違へをして、先生と御相談を爲て拵へた名を云ふた。はい、劉宋明と申します。劉宋明、可笑しいな、其はお前の名でせう、鳥の名はさ。僕は慌て、あ、然うでしたかと云ふたが、鳥の名は未だ御相談を爲すに來た。俄に考へる間も無いので、はい、鳥の名ですか、チャンドルクと申しますと云つて了ふた。チャンドルク、妙な

名です事、チャンドルクさん、さあ御姫様に御抱かれ。御姫様の織い美くしい御手に抱かれたかと思ふと、誰人が教へて置いたので有らう、ホーサーヘッコナー(お飾したなあ)と高音の朝鮮語で一聲。呀と皆が鳥の方を向くと、鳥は御姫様の御襟へ首を入れ相にして、又ひと聲ふた聲、ホーサーヘッコナー。とつと御殿を揺つて、年寄の下人までが笑ふた、僕も思はず笑ふた。丁度其時直ぐ、半町も無い表通で、石を煙硝で割る様な大きな音が一つ、地響きを爲て、わつと魂消る多勢の人聲、續いて、大事起矣と叫喚いて、此處の表門に人浪が崩れて入る。何だと外房の先刻の連中が總立に成つた様子。大臣が御殺されに成つたど、多勢の中の一人の大聲。やあと年寄の下人が尻餅を搗いたのを、見向も爲ず、僕は一散に馳け出した。雑沓の中を、

身軽い少年の足で表通りに出ると、最う巡查や兵隊や、近所の者が林の様に立塞がつて、閔外部大臣の死骸は、輿の儘其處に碎けて居る相な。僕より先に、誰人が斯んな事を爲たらう、問ひ質す氣も附か無い、唯だ早う先生に申上げ様と、居留地の方に走つた。先生が、人目を惹くから、歸りにも裏道を迂回つて來いと有仰つたのを思出して、石標橋を渡つて、左へ折れて右の穢い支那人の住んで居る小路に入ると、後ろから息急き驅けて來て、朝鮮語で、美少年、待て待てと呼ぶ人が有る。振返ると、先生の御宅で逢ふた、朝鮮服の、厭な酒飲の吉木と云ふ御客。今日は御酒を飲んで居ない、眞白い美しい顔を、黒い粗末な寒冷紗の冠の下から見せて、服装は田舎者の様な、白い麻の朝鮮服に、半紙で緒を卷いた田舎の草鞋。額の汗を手巾で

拭き拭き、早口の朝鮮語で、君、御苦勞、御苦勞、併し險呑だつた、君、併し愉快だと、譯の分らん事を云ふて、妙な笑ひ方を爲て、直ぐ僕を驅け抜けて、先に何處かへ曲つて了ふた。疾い足の、妙な笑ひ方の、生意氣な、酒飲の、僕は先生の御友達だけれど、彼人計りは、今でも厭な人だと思ひます。歸り着いて見ると、先生は御留守。僕は衣服を着替へて、御待して居ると、日の暮に公使館から御歸りに成つた。最う外部大臣が爆裂弾で遣られた事は御存じで、非常に喜んで被入る。併し先生、僕は残念ですと申上げると、眼に涙を御浮べに成つて、いや能く働いて下さつた、手柄は君が手を下したも一つだ、何より怪我が無かつて頂上、是で先づ朝鮮に露西亞の砲臺も出來ず、露西亞の兵隊も來ず、松田灣にも露西亞の旗が樹たずに濟んだ。



斯う有仰るから、一体誰人が彼様ことを爲たのでせうと御問ひ  
 すると、犯人は一人の朝鮮人だと云ふ事だが、未だ捕縛ら無い  
 ので、外の事は一切分ら無いと有仰る。其から五日目の其年の  
 十一月三日の天長節は、居留地が初まつて、日清戦争が和睦に  
 成つた年以來、二度目の賑ひで、僕は小學校の祝賀會で、舊卒  
 業生總代として、朝鮮語の祝文を讀みました。

(明治三十五年三月十五日稿了)



黄金ひぐるま

(都にちかき里すみの姫の歌へる)

ひともと盛りの黄金向日葵  
 詩歌の聖なる君に贈る  
 王の賜びにし綬の紫  
 垂れて結びて挿しませ

摘みしを何處と君きこさば  
 口籠り羞らひ何と云はむ  
 あくがれごちこの朝を  
 すべり出でつれ水色とばり

ありわけづくよ霧かをる  
 ひろき露野は武藏野か  
 あらじ我等が夢ならで  
 往くこと難き帝の境

光明はまばゆしあらかや  
 曉の御神が執りて飛びます  
 黄金の燭の長柄そここにと  
 拜るかみ抱けばさても此花

籠るは如何に大いなる  
 懸想の驕りか名の榮か

詩歌の富かこの三つの  
 幸の像と仰ぐ花や

機根つたなき少女われも  
 御使に立つるにし許りて  
 君が房髪これに飾れど  
 清き朝あけ賜ふや我帝

白絹させてあなかしこ  
 跣足ながらに持てまゐる  
 歌の香あまき君が御口  
 先づやはらかに觸れ給へ

如何にふさはめ綬の紫  
添へて挿してかきたれて  
王が眞晝のうたげの宮  
心ゆく詩を高らかに君

若うして

(うらわかきひこりすみの詩人の歌へる)

ゆく春を愁ど多き  
人若うしてえも堪へめや

もとより孤兒の

身は賤しきに慣れぬ

さは世を觀するに  
我や皆僻みたる

慰むやと入るに

花守が朝の庭

驕樂あまり饒かに

孤獨の我ぞ適はね

牡丹こそ爵ある殿に

芍薬は長者が庭に

藤花のむらさきは

舞姫がかざしどころ

うづだかき花ぐるま  
都へは持て参る)

頬紅き爺が鉄刀やめて

語るは忠實なれ、其は我に

組める胸の手とき披き

歡び、躍り、聲高に

大空抱いて笑はしめず

默禮さびしう詞無う

わが影ふみて森に去る

年うへの畫師が君

病と聽いて二十日經たり

訪はざる詫びに板戸推せば

山吹ちるよ崩れ井

誰が酔狂の蛇目古傘

二つに裂けて風に鳴る

「籠居のさても瘦せやう

薬は取らずてや

此世こぞりて老ゆるも

友よ健やかなれ

若き者は己れみづから

信ずるに藝の朽ちじをし

賢しと笑みて我を見る  
畫師の瞳の世にも優し

『心へだてぬ君にこそ

故郷びとの文は見せめ

われに一人の姪が哀れぞ

なまなかに容姿よくて

世の道のはだし也

親がなさけの惑ひより

少女の花の盛めでて

縁の彩絲えらび闌くるに

愴惶し春は人を待たね

可憐と叔母が泣くは不理か

衰ひがたの寄る邊無う

また二十五の春も暮るる』

文がら聖者の卷の如く

兩人に引いては人を泣くよ

感じては句も成るやと

森深く辭して去るに

瀑は小さきも荆棘が崖  
 我と流れて我道作れ  
 詩人は貧し何の力ぞ  
 地に落ちて我領もたぬ  
 慵うと無心の小石投げて  
 果は自然を咀ひて歸る

ゆく春を愁ぞ多き  
 人若うしてえも堪へめや

磯づたひ

(和泉國高師の濱をさまよひて作る)

馬ぐるま百並めて召すも  
 王の門には行かじよ  
 などさは心いさみて  
 この海近くは來寄る

若うして癩せぬれど  
 固より楚人の寂寥ならず  
 ふどころの長き詩は  
 戀ぞ、蘭の香なくてやは

茅渚の浦回の眞珠  
 わが世に君を得たり

雙手もろてあけて誇らむや  
猛者もろさは此處こゝに此處こゝに

近ちかきは淡路島あはぢしま

遠とほきは阿波の灘あはのなだ

灘なだの神、島の神

あら乗のり來くるよ宵よひの潮しほ

磯いそぶり高く又また高く

讚さんずるやわが戀こひ

神かみわざのととろと

祝歌ほろたぞ松を搖ゆする

松かけを砂子いさご白う

汀なぎさぞ圓まるく遠とほき

これやがて天あめにつづく

臂ひぢとりてこそ歩みぬる

### 武藏野

井桁いげた苔こけに朽くちて

竹たけに沿そふ井古いごりぬ

湯ゆの水汲くむと

ゆふべ老婆おばあの手助てすけけ

松の葉はくべ杉の葉はくべ

かざす手額てがわに煙けぶり避さけて

姉様かぶり艶なるや  
なれぬ里居の君二十

青芒しどろに

威丈高や向日葵

桔梗紫ねびて

葉鶏頭の緋ぞ驕る

相對す小椽の露

涼しきは武藏野の月

あなさて蟋蟀心あるか

啼け啼け夜すがら

鉢の蚊火いつか消えて

君われ句に倦みぬ

貧しいかな紙の帳に

笑止や梅の墨畫

七尺ながき解き髪

くぐるに觸れてささと鳴るか

衣のこぼれを神も嫉め

浅水色の亂れ藻染

朝 戸

あら無禮ど何者  
我庵揺すりて我門よぎる



青斑の虎毛の馬七つ  
 黄金の寶車、銀の輓  
 紫鸞の天蓋、眞玉の函  
 載するは天秘の誰が詩なれば  
 五百の天童跣足さよう  
 紅衣まばゆく樂を執る

昨夜江東人を送る會  
 主人野服して衆に混る  
 左の手に燒鷄の脚しやぶり  
 大きなる杯酒の熱き辭ます  
 筆を取つては七尺の金屏

警句さながら龍と飛ぶ  
 この國人を低うす  
 往け往け我友  
 笑ふか名は何頬白の貴公子  
 わが爲め更に墨すれ

美女十人舁ぎ載せて  
 酔ひしが危し二里の車  
 家君例のと眉も顰めず  
 優手に重さを抱き入れて  
 里の霜夜の小枕  
 木がらし鼾聲と何れ高き

あなやと目覺めて朝戸推せば  
神人の夢跡も無う  
昨夜の入興の我痴耗けて  
隣の牛の愚に似たり

鶯の籠を窓に移

して作る

丁子の香に蒸して  
連翹の影のぼる  
日あたりの南窓  
小障子ぞ鄙びたる

わび住みの狭うして  
馬車おもはねど  
いたいけに美しくう  
誇るは妻ど若き

過ぎたるは猶ひとつ  
鳥籠の金蒔繪  
桃が嫉む京染の  
緋に燃ゆる房かざり

兩人にこれするて  
微笑の句も得よと

みなさけの我師が  
おくり物かたじけな

眉筆おきて朝の餌  
紙雛おきて晝の餌  
優手に鳥も感ずるや  
鶯さへづり馴れつるよ

あわ年頃を渴仰の  
世尊の經の巻とても  
かかる平和と歡喜に  
我胸みちて捧げしや

或は母が膝にして  
熟睡の稚兒の可憐きに  
臥褥へ夢を破らじと  
運ぶおもひに是や似る

徐かに窓に移し据ゑ  
朗らかなる音をまもる時  
苦吟の歌の小半紙に  
落ちにけるかな妻がさし櫛



## 眠るは誰が子

(われ、この五月佐渡に遊びてこの詩を作りぬ。相川の街に入らむとする前に半里が程の峠あり、人馬の往來たえず、ひろき國道ひらけたれども、坂なす山の木立にこもりて、巖石のたゞすまひ險しく、若葉のそよぎに藤つゝじの花さきまじりて、溪わたる晚鶯の聲しきりに、たま／＼名のるは子規、ま／＼幽邃の地や、この島びさの唄にも誇る中山峠とば是なり。われ、こゝ過ぐるほごに、世の末にま／＼ありがたきふたりの若うごを見たり。事すべて煩しからず、よるづおほごかなる此島のならひ、五月の初に、はや人々は午睡してあり。家なるは戸あけて、田なるは畔に。われこの峠の半になりぬるに、路の左のひくき谷にそひて、細長き田いくつも有り、そこに見つるよ、男は二十三、女は十八、わが過ぎしは午後の二時すぎ、ふたりは田打ちやめて、畔の低く陰あるかたに眠れり。より添ひて、男は道のかたに足のべ、左の手を枕に、顔はなかば斜に女を見たるさまに目つむりて、右の手はやはらかに女が肩を抱けり。女は横さまに足すこしかどめて、右の手をまくらに、額を男の胸にもたせ、左の手は己が膝のきぬをおさへぬ。うまいしてあり。わが車のきしりにも覺めずとおぼし。あゝ何たる神々しきわが子らぞや。かゝるは平和なるこの島の人のさまなるべし。われは思はず轅さどめさせて、さながら自然なるこの一幅の愛の圖に感嘆せざるを得ざりき。)

あなめぐし二人の若兒  
徐かに眠るは誰が子ら

行手わか葉の岨路

藤ばな巖になびいて

鶯わたる山あひ

谷地田の畔に今

(田がへし草ぎり倦んじては  
晝睡の時ぞ君いでや  
われら抱くに何れにか  
甘き夢守る翅降らぬ)

男子は眉こく頬冠に  
 洩れぬる額の雄々しかり  
 さは上杉に弓ひきし  
 いにしへの本間が子か  
 亡びては田にくだれ  
 勇者の血ぞ名残失せぬ  
 少女は遠流の帝の御供  
 右衛門佐が裔と生るや  
 山百合の頬は清う  
 眉黛も打つべきぞ  
 千苺の田にも換へぬ

夫は強右手を妻が肩に  
 妻は優額を夫が胸に  
 草まくらやはらかう  
 微風にいだき臥す

(戀ひ戀ひて添ひし仲  
 世は永久に我等がもの  
 斯くてあるに地の上  
 何怖れむ) と笑む可う  
 あなめぐし二人の若兒  
 徐かに眠るは誰が子ら

おもひ兒のおもはれ兒

世は長く偽善に墮ちて

もろもろの美きもの

うまし國佐渡が島

ここにや神の閉ぢし

虚禮ぞ繁華の市女は

出づるに同車をだにも耻づる

この子等見よと言はば

眸子そむけて賢ぶらむ

あなめぐし二人の若兒  
徐かに眠るは誰が子ら

これ寫さむに今の世

頼しからずよ百の博士

うづだかき君が書庫

適ひし文字もおはすや

この歡喜あたへずば

佛法もわざくれ

この平和得ずば

王者も貧しきよ

われ今日佐渡に遊びて  
日蓮が經に笑ます  
この美はしの愛の姿に  
涙せさあへず中山峠

あなめぐし二人の若兒  
徐かに眠るは誰が子ら

(谷地田、千菊、ともに佐渡の俗謡によれり。)



### 海王百詩の跋

われはいま、更に進み闘はむとす。  
更に進み闘はむとす。この語は曾て我等が祖國なりし陸上の用  
語にては、まさしく死なむとすと云ふに當りて、さは云へ大に  
意味は異れり、我王陛下の國にありては、人生の意義は健闘な  
り。この世界の健闘終れば、人は更に他界に進み闘ふあるのみ。  
死滅とは敵人の語なり。我等に征服さるゝ者の、みづからの結  
果を悲むとき、この語は明かに遺憾なし。  
健闘して勝ち勇める大人の全生命は、常に愉悅をもて満ちぬ。  
この生すでに然り、何ぞ彼の生を疑はむ。たゞ更に進み闘ふあ  
るのみ。

かゝる絶高絶美の眞意義を誨へられて、この眞意義を體讀力行し、始めて自己の不死を知り得たる我は、嗚呼さても幸福なりけるかな。

われは何者ぞ、われは我を誇る。かの高圓なる天空と、この廣大なる海洋との間に、劫初以來缺くる所となれる人間の歴史を初めて附與し、船艦は即ち城郭、島嶼は即ち寶庫、率ゐて起る所の八百の大人と共に、光榮ゐるその創世史の第一頁を染め給へる我海洋王陛下の宮室に在りて、嗚呼われは何者ぞ。われは我を誇る。われは開國以來、に五十七年、一日も陛下の机榻を離れざる名譽の老臣、爵は公爵、職は一活版職工長なり。一活版職工長、美麗なること、愉快なること、何ぞ戀人の名の其れの如くなるや。われは全頭みな白髪、更に銀を垂るゝこと

雙眉と鬚髯とに及べるこの八十歳の夏に至るまで、全くこの名を景慕し、この名に執着して生きたり。云ふまでも無し、この名ありてわがこの一生の健闘は、初めて能く全かりき、異彩ありき、誇るべかりき。

今はわれ、乞うて我王陛下の御許しを得つ。徐るにわがこの名の起原を憶ひ浮べむ。

牛莊に都して支那、朝鮮、滿州、殆ど亞細亞の大部を併せ領せる日本の、猶纔に南は台灣、北は千島を以てかざりとせる、東海粟散の一島國に過ぎざりし、明治三十八年の當時なりき。陸上にて謂ふ所の年紀十九世紀末よりして世界の宿題と成れる東亞の肅清は、日本之が主動者たるか、露西亞之が主動者たるか、之に由つて久しく醸せる兩國の火氣は、この前年の秋に至つて



頓に劇烈の度を加へ、この年七月終に發光點に達しぬ。露佛兩國の同盟艦隊は旅順・大連にありて、日本艦隊の朝鮮海を扼するものと、姑く相持し、未だ大なる衝突を見るに至らざるも、日本の同盟國なる英吉利艦隊は、敵の同盟國なる獨逸艦隊を臺灣沖に要して、甚しき敗衄を招けり。この敗衄は日本政府に於て力めて秘密にせむとする所なりき。腐敗せる上下兩院は政府の厚き賄に由つて一齊に沈黙し、民間の諸新聞雜誌は陸軍省の苛酷なる軍事檢閲局の壓迫に遭ひて一言も之に及ぶ能はず。然れども民衆多數の耳目は掩ふべからず、口耳の間に相傳へて早計にもこの戦争の前途を危虞する者すら少からず。こゝに政府反對黨にして、兼ねて非戰論者なる少數の人士は、逸早く之を以て政府攻撃の有力なる好資料とし、國民の激昂を惹かむが爲

めに「嗚呼無能なる同盟國」と題する一書を公にしたり。固より秘密出版なり。戒嚴令のもとに處置さるゝ當時の首都東京に於て、渠等政府反對黨の名士は多く憲兵の手に捕縛せられぬ。秘密出版を請負へる故を以て、東京印刷所の所長・役員もまた拘引せられ、その印刷器械は悉く封鎖せられたり。首都の人心は更に一段の動搖を加へて、諸種の流言浮説は街ごとに行はれぬ。われは忘れざるなり。八月二十日火曜日の東洋タイムス紙上に、おほかたの人は見おとしぬべき六號活字の廣告あり。

壯健にして十五歳以上三十歳以下の男子終身日本に歸らざる決心あらば世界無比の富者と成るべき事業を興へむ至急住所氏名を下名に郵送し當方よりの招喚を待つべし履歷書に及ばず

東京市芝區金杉濱町三十五番地

大 平 洋 館

われはこの廣告ある一葉の新聞紙を懐にして、一日一夜を思ひまどひぬ。廣告の奇妙なるにまどひしにあらで、一生をつくして日本に歸らざる心定めむとまどひしなり。水曜日の朝、冷えし飯に副へて膳に上すべき一きれの鹽鮭、例の如く參錢を投じて買ひに出でし歸るさ、ふと斯くは思ひつゞけたり。われは偶然にしてこゝに生れしなり。こゝに我を愛しはぐくむもの無し。こゝに働きて正しき報酬を得る能はず。更にこゝに厭ひ憎まれ、更にこゝに虐使せられて訴ふべき所を知らず。かくても我はそ

を堪へ忍びて、衆人の前に聲あげて快く自己の悲運を泣くをだに避けざるべからずとや。こは明かにいはれ無し。愚かなる孤忠なり。

許し給へ、我王陛下と老臣との交りはこの日を以て初まりたりき。われは決然として一葉の名刺を封じ、書留郵便に托しぬ。木曜日、金曜日、土曜日、四日を経ぬ。招喚は未だ來らず。日曜日、われは待ちあぐみて、この午後更に封書を郵送し、招喚せらるゝ日の速ならむことを促しつ。火曜日の夜に入りて、やうやう招喚状は來れり。異常の一大決心をなしたる人にとりて、この一週間の如何に長く待ち遠かりしよ。されどもこの一週間は又なく我ために貴重なる時間なりき。我王陛下の全く我を知り給ひ、我を誨ふるに足るとせられたるは、實にこの一週

間に於て、陛下の幕僚諸氏が竊に我を偵察し、以て陛下に報告せし結果によりければなり。そは後年陛下の親しく語り給ひし所なり。

われは半うれしく半をのゝく心地して披きぬ。

來れ、明二十七日午前正九時。服装は平素の勞働服の儘に限る。

八月二十六日

太平洋館

神田區連雀町二十一番地山口方同居

太田秀松殿

次の日午前正九時、われは紺青色に塗れる豎は矢形横は波紋状なる鐵柵に沿ひて、おなじ色に塗れる鐵板に白き二幅の帆影を

雁行せしめて描きし左右の大扉ある正門をくゞりぬ。太平洋館の金文字ある額を頭上にして入り、刺を受附に致せば、小僮はわれを引いて石造の洋館なる第三層の一室に椅子を與へぬ。室は二十疊を敷くべし。東西兩面の棚は見知らぬ鉢植にて満ちたり。緑こき常磐木なるあり。紅白紫碧さまざまの花を開くあり、金色の果をむすぶあり。又なかに奇しくわまさき香を放つもあまたまじりて、折から芝浦の海かせ涼しく吹き入るに、窓掛も卓も籐椅子も卓の上の書籍も、わが髪もわが袖も、白き服きたる小僮も、この室にあるもの皆かをりぬ。

『これらはいづこの花なるか。』われは室の入口に立てる小僮に問ひぬ。

『悉く遠き遠き多くの島に生ずる植物なりの先生の親しく採

集し來給へるものなりと云ふ。階下の温室には猶幾多の種類あり。

『先生とは誰ぞ。』

『君の會はむと求め給へる人なり。われは雇はれて半月のみ。

ふるきことを知らず。唯この家に入出入する人々は何れもこ

の家の主人の君を先生と呼びまつるを知るのみ。』

かく語るとき次の室なる扉のひらく音す。先生の出で給ふなり

とて、一禮して小僮は去りぬ。ここに先生と呼びまゐらせし當

時の我王陛下は、われと面して卓のあなたに倚り給ひき。

『われは當家の主人なり。』とて慇懃に會釋し給へるに、われ

も頭上げて謹みてむくいまつりぬ。さて打むかへば、わがこの

家の門くゞりて、胸にゑがきし主人の君と思ひたぐへては、そ

のかたちいたくも違ひいましけるかな。眞白き細面はつやゝかに血のけ満ちて、あかねさす曙の海に白百合ひたせるがごとく頬髭は未だ生ひ給はず、黒眼がちにして光あるまなざしは、その眉の濃く威嚴あるにむかへて、やさしきが中に智慧のちからうるほひ、少女が手に紅させしやうなる唇の堅くしまれるは、おのづからなる愛の溢れをしばし啣みてここに抑へ給ふやと覺ゆ。髪はまるく二分に苜り給へり。白くあらし薩摩上布に鳴海しぼりの兒兒帯して、にこやかに團扇づかひして語り給ふものごし、すべてわざとらしからず。まこと誰も噂申し合へるふるき言葉ながら、『凜々しく若きおん美しくしさ』とは、嗚呼これぞわが王陛下が未だ十八のおんうらわかきみすがたにておはしける。

われは心に驚きぬ。この美しくしき少年の君が、この家の主人の君とや、かの廣告のぬしなりとや。われは事の意外に驚かざるを得ざりしなり。

されど直ちに初まりし陛下との問答は、毫もわれをして疑ひ且つ危むの念を惹かしめざりき。しかのみならず、われは全く少年の君の語なるを忘れて、年たけし聰明なる大先生の命令の如くに傾聴し、感服せざるを得ざりき。否、否、かくの如く眞成に人をして傾聴せしめ得る大威嚴ある命令は、わがために我王陛下一人の能くし給ひし所なりしなり。その問答は次の如くなりき。

『われと語るには憚るを要せず、飾るを要せず、卑下するを要せず。勿論偽るを嫌ふ。』

特に今日はわれの間に答ふれば足れり。明らかに答へ給へ。但し答を強ふるにあらざるなり。

よしとや。』

『うけたまはりぬ。一に先生の仰の如くせむ。』

『さらば問はむ。君は如何なる人の子なるか。』

『父は神田區多町の小魚屋なり、母は銚子の生れとのみ。われはその間に生れたるひとり兒なり。』

『父母ともにすこやかに在りや。家も。』

『先生、われは不幸なる者なり、すべてのもの無し。』

『如何にして。』そは少しく細かに。』

『誓ひぬれば何事をか申さざらむ。父は土地から江戸兒のさがはげしく、若うして人と争ひ一眼を失ひぬ。老いては殊

に醜さを増したり。母は顔よかりき、父より若きこと十五。  
 先生、云ひ淀むものは憚るにわらず、事の腹立たしければなり。——尾張より來れる魚かつぎのわかき者は母をそ、のかしぬ。母は二十八の春六つに成れるわれと、初老の祝すませし父とを棄て、遠く奔りぬ。——先生、云ひ淀むものは憚るにわらず、事の悲しければなり。——怒れる父は酒亂と博うつわざに身を持ちくづして、疝癥のさがは愈々加り、ともすれば人と争ひぬ。更に家業をかへりみねば、いつしか家は債主のものになりて、われは薄き縁者の家に引取られて、その家の子守となりぬ。——先生、云ひ淀めるにわらず、憚るにわらず、許し給へ、こは涙の落ちちはべるなり。——柳原の土手に霜しろき朝、空しき屋臺

店のかげに、額の撲たれ創無花果の裂けしやうなる父の亡き骸を巡查と共に見しは、母が札幌に窒扶斯病みて死にし報知を聞きて、いまだ十日と立たぬ程のわが十五歳の冬なりき。』  
 かく咽び答へて更に問ひを待つとき、先生の問はしばしとだえぬ。われは袖に涙ぬぐひて先生を見上げしとき、こなた向きゐたまへる先生の星の如き眼には、あはや一滴二滴こぼる、美くしきものを見たり。  
 『泣き給ひしとか、かたじけなし。』われは覺えず感にせまりて云ひぬ。

『否。——何をか泣かむ。——否。——こは唯だ涙なり。』  
 君は何事を問ふぞ、唯わが問に答ふれば足れり。

よし。更に問はむ。君は今幾つにか成れる。さて今までの職は。また今の職は。」

「八歳の春より雇はれそめて、今二十三の夏まで、現に活版所の職工なり。」

「活版所の職工としては何事をか知れる。」

「解版、文撰より、さしかへ、植字、印刷、製本等のこと、悉くその普通なるものを習ひたり。」

「よし、大によし。」

「而して君の今雇はるゝ活版所は。」

「知り給はむ、半月以前に起りし『嗚呼無能なる同盟國』の秘密出版事件につきて遽かに高名となれる東京活版所は、わが現に雇はるゝ所なり。わが活版所は休業しぬ。われは

その落着を待ちて、今は無職なり。」

王は冷やかに嘲る如き語調にて、

「日本政府の爲すところは皆かくの如し。あらず、陸上の者の行動は皆かくの如く小心なり。」かく獨語しつゝ、更にもとの温和なる語氣にかへり給へり。

「君は委しく彼の廣告の文意を読みしや。『終身日本に歸らざる決心』に於て未練は無きや。今の家には。親戚には。友には。」

われは面をたゞして答へぬ。

「この一身と生命とを捧げて、今は先生のみこゝろのまゝなり。何を二言せむ。——今ある家は一箇月六疊のあたひ貳圓なる貸間なり。日本に於て今は親戚と云ふべきものなし、

友と云ふは皆わが前にわが技術をたへて、蔭口には『僻める酒亂人の息子』と我を罵るたぐひなり。共に何をか悔まむ。』

しよ、『大によし。君を生みたる父母は君を見すてぬ。君が親戚と朋友とは君を見すてぬ。君はこの日本を見すつるに於てげに悔ゆる所なかるべし。』

日本とのみにあらず、君、今は我等は、決然としてこの陸上を見すてむ。』

陸上の事は之を英皇帝にまかするもよし、露の皇帝に托するも可なり。君よ、思ふべし、我等が行かむとするは、世界の大陸を千倍して投ずるも、猶埋めがたき廣大なる領有

『海洋』なり

君よ、思ふべし。海洋には虚位を擁して人民を奴隷視する帝王なし。金錢の暴力を以て労働者・貧困者を虐遇する富豪なし。神の名・佛の名を唱へて人の葬儀に來り、無用の經卷寺塔を珍重がらしめて善財を奪ふ僧侶・宣教師なし。道徳・倫理・義務・慈善・權利等の文字を記載したる書籍を誦誦し、更に之が誦誦を強迫して他の人間を畸形にし不愉快

ならしめむとする教師・學者・先輩等なし。君よ、海洋は自然のまゝなり。未だ釋迦・基督の輩に惑はされず、未だ帝王・富者・學者のどもがらに汚されず。君よ、海洋には我等を束縛すべき何等の宗教・學問・習慣・戦争・制度をも持たざるなり。

もとより君よ、海洋と云はず、この宇宙には神佛・鬼神・惡



魔なるもの無し。宇宙を支配するものは我等なり、人なり、我等が健闘の心靈なり。我等は神佛なくして能く生き得。能く涙を流し得。若し神佛を要すとならば、我等は人のかたちに似せて神佛を作り、任意にそを弄ぶべきのみ。君よ、此の如き赤裸々なる人間の本性を發揮し得る所は海洋なり、海洋には身をそばめて憚り歩むべき小さき道なし。君よ思ふべし。我等が行いて領とすべきは海洋にあらざして何處ぞや。』

他の小僮は入りて、恭しく午餐の時なりと云ふ。われはなかば椅子をはなれむとしぬ。

『午後一時を期し、また重ねてまゐらむ。』  
少年の君は立ち給ひて、手をもてどゞめつゝ、

『否、心づかひし給ふな。君がために特に費さむとするこの一日なり。いざともに食堂へ。』

従ひまつりて階下の食堂に入りぬ。海かせこゝにも吹き満ちてゐながら幾十のしら帆みわたす東京灣は、さながらこの窓の水鉢とおぼゆ。口なれぬ珍珠に食はて、後も、語るものは猶ふたりなり。

『君は船を好むや、乗り得るや。』

『久しく瓦斯くさき工場にありしわれは船を知らず。されども先生、いま先生とむかひゐるわれは、今日より今より、

この世界に危むべきもの皆なくなりぬ。——否、されども先生、われは一事を危む。活版職工の技術以外に何事も知らざるわれは、海洋にして何の用をか爲さむ。』

先生は手を卓上にかさねて、われを正しく見つめ給ひぬ。さて一きは莊重なる口調なり。

『再び言ふなかれ。』

わが君を用ゐむとするはその活版技術なり。君はその技術をもて海洋に我と共にするを要す。

その技術は君が生命なり、武器なり。嗚呼貴し、何人かそを奪はむ。

君よ、陸上の人は自己の技術を重んぜず、また他人の技術を重んぜず。故に眞價ある技術の人に逢ふも、互に之に正當なる報酬を附することを爲さず。見よ、陸上に於て爵位と黄金とに飽く者は、労働者にあらず、發明家にあらず、献策者にあらず、詩人にあらず、兵士にあらず、農夫にあ

らず、漁民にあらず。却て無能なる内閣員、愚劣なる老將官、狡猾なる相場師、苛酷なる工場主、淫逸なる大僧正、癡悪なる高利貸、淺薄なる戯作者、浮華なる慈善家、慳貪なる大地主等の占斷する所なり。嗚呼これ何の理由ぞや。陸上に於て皆事の矛盾せるは此の如し。されば詩人はその詞藻の技術を棄て、商びとたらむことを思ひ、兵士はその銃劍の技術を棄てて農夫たらむことを願ふ。止むを得ざるなり、悲しきことの限なり。

君よ、再び危むなかれ。われは今日より今より、誓ひて君が技術を奪はじ、はた他人をして奪はしめじ。技術の拙く足らざるもの、技術を怠り軽んずるものは、ともにおのづから敗れ亡びむ。君は唯その技術を勵みきはめて健闘せよ、

われはその正當なる報酬として、安慰・愉悅・黄金・爵位を君に呈せむ。陸上の事は知らず、我等が領有「海洋」に於ての富貴とは如此きの意味なり。』

われは唯だ感にせまりて、さながら大洋の中なる人なき島に二人さしむかひて、この物語を聴きまつるが如くに思ひぬ。おんうらわかき我王陛下のみことばは猶多かりき。最後にのたまけるは、

『君が商量を煩すべき一事あり。普通千ページの書冊を印刷するに足るべき活字・印刷器・附属品一切を完備せむには、大略幾何の價格に上るべきや。そは海洋の上にして君および君が助手の用を爲すに供するものなり。君は近き五日が間にその見積書をわれに送らざるべからず。勿論活字鑄造

器をも要するならむ。

君はわれに問はむとする所のもの多かるべし。そはすべて此に答ふる能はず。待ち給へ、凡そ四十日の後を。

われらは海洋の何處に行くべきか。答ふる能はざることの最もなるものなり。四十日の後、たゞ共に陸上を見棄つべしと云ひ得るのみ。

君よ、何事も秘密なり。小膽なる陸上の者に聴かしむべからず。

かさねて又わが招喚の書を手にするにあらざれば、この家に來り訪ふこと勿れ。』

『なにごともうけたまはりぬ。』と厚く禮して、われはやうやうに辭し去らむとしぬ。

「しばし」と我を待たせて、次の室に退き給ひしが、手にして入り來給へるは江戸紫の伏紗づつみなり。

「これは君か四十日間の生活の料にまゐらす。その後の衣服調度は意とし給ふな、すべて我に用意あり。」

強ひ給ふに辭まむよし無く受けまつりぬ。さて別れの禮して立たむとする時、

「君よ、猶問ふべきを忘れたり。君が戀する少女の名は。」

驚きぬ、あわてぬ、ためらひぬ。われはこの思ひがけなき奇問に何とか答ふべき。うらわかき主人の君なる大先生は、高貴なる姫君とても必ずしも持ち給はぬ、けだかく、あたゝかく、あどけなく、美しくしき片ゑくばを、その左の頬に見せ給ひて、

「答へ給へ。戯れならず。よし君の愛せざるも、などか一人

の君を思ふ子の無かるべき。」

われは答へざるを得ざりき。聲いとわなゝきつゝ、

「侍りけり。」

「誰がまなむすめぞ。」

「わがごと親は無しと云ふ。——われと同じ所に雇はれて、解版と云ふいやしき職とるむすめなり。——十六。——山田みつ。——」

「よし、大によし。さらば今日は。」

われはさすがに面あかう染めて、背に汗してすべり出でぬ。

十月二十日、日本の陸軍は露佛の陸兵を亞細亞の一端に破れるが如し。戸毎に日英兩國の國旗を掲げ出し、歡びの聲は國民互に蘇生の思ありて都鄙をゆすりぬ。われは忘れざるなり。この日

をもてわれらは陸上の國に告別し、永き海洋の生活に入りぬ。  
 我王陛下の御製この『海王百詩』の第一篇より第七篇に於て、し  
 ばしば用ゐ給へる船の名にして、今われらが王立博物館に繋ぎ  
 飾られたる十九世紀式の風帆船『明星丸』は、われを初めて海洋  
 に送るために、この日の夜なかばかりに風はやき闇にまぎれて、  
 錨を日本駿河の清水港の沖十五海里に抜きしなり。  
 一原始の人種、一原始の家族、一原始の海洋國民としてこの船  
 に乗れる者は、我王陛下を加へて七百九人、艦長、水夫、戦士、  
 漁夫、工人、農夫、詩人、秘書官、農・工・理・醫、法の諸博士、  
 藥劑師、伶人、舞姫、およそ一能一藝に達して必要あるかざり  
 諸種の人々を集へざるは無し。そのよはひの最も低きものは十  
 五歳、最も高きものは三十五歳。男子の十分が二はわかき妻を

伴へり。

海なれぬわれは、七年前にこの世を去れる大藏大臣、その時は  
 新たに校を卒へし水木商業學士と第二層の一室を同じうして臥  
 しぬ。二人は船のゆるぎ日毎打つゝきて、目まひと嘔氣どに堪  
 へがたければ、厨夫が運ぶ食物も得とらで、十二三日が程をう  
 めき暮しぬ。船の動揺やみて、やうやう人ぞちつきぬる日の  
 朝、傳令の職もてる眞紅の羅紗服さし小童は來りて云へり。  
 『船は數週をこの島かげに留るべし。艦長の命なり、起床し  
 て朝の食終らば上甲板に整列せよ、時は午前九時迄に。』  
 艦長とは後年アラスカの海の漁獵に、誤ちて氷の下に埋もれ世  
 を去りて、われらが孫の讀本の中にその像の見ゆる、有名なる  
 大久保將軍なりき。我人も命の如く上甲板にそるひぬ。如何

にめざましかりしよ、灰色に塗りたるこの三桅五千噸の大艦は  
 紅地に金色のひぐるまの花繡ひたる大小の錦旗を、帆ばしらに  
 帆づなに翻翻と打なびかせ、當面の椰子・鳳梨・タマナ・ババヤ・  
 香蕉・濱桐・檳榔・檸檬等の諸樹鬱蒼たる二つの島の外に、何ひ  
 とつ目を遮る物なき森々たる紺青色のおほわだつみの上に悠然  
 として浮びぬ。雪の如く涼しき帆木綿敷きつめし上に並みゐる  
 七百九人は、何れもわれらが海洋國の始祖たる人々なり。この  
 日をわれらは今も祝ひて紀元節と云ふ。この日の儀式と我王陛  
 下が建國の詔勅に代へ給へる此の『海王百詩』の第壹篇第五節  
 『健闘』の章及び宮廷詩人海上萬里の君が、われら臣民を代表し  
 て祝辭に代へ、伶人舞姫をして奏せしめたる『聖愛歌』とは、皆  
 あまねく人の知る所なり。この日よりしてわれらが先生は、海

洋王第一世陛下と稱し奉りき。

この日宴たけなはにして、陛下は席をはなれ給ひ、わが名を呼  
 びて召さる。階をくだりて従ひまつれば、第二層の玉座ある室  
 に隣れる戸を推して入り給ふ。

『太田秀一の君、この室は君が戰場なり、君が一生の幸福は  
 この室に満ちたり。見よ。』

今日までも無く、窃かに事毎に驚けるわれは、更にまた此に一  
 つの驚きを重ねぬ。どころせく薄暗き十五疊ばかりの室に、わ  
 が曩の日まゐらせたる見積書に違はず、活版印刷の諸器械は整  
 然として、新しき鐵・鋼鐵・安質母尼のひかり打輝き、巧みにそ  
 の職の人の爲す如くに配置せられたり。

『かく爲せるは君が十餘日の船暈の間に、けなげにも君が助

手の君の爲せるわざなり。』と陛下はにこやかに笑み給ひて、かたへなる小僮にむかひ、

『汝、上甲板の宴にゆきて、この室の助手の君を夫人の君達の席にもどめて伴ひ來れ。』と命じ給ふ。やがて伴ひ來れるは水色絹の上衣に雪の如き白裳を左の手に褰げて、ふさやかなる束ねがみに、くれなるの薔薇のはな帽のひさしにこぼれてかざせるをとめの君、はなれて少しさしうつぶきて立ちたれど、羞ぢろひし耳より頬の、あなこは紛ふかたなきその人よ。われはあまりなる不思議のめぐりあひに、しばし物言ふすべをも忘れたりき。

『太田活版職工長、われは君が一生この室にともすべき助手の君を贈る。愛せよ、幸福なれ。』陛下はかくのたまひて

すなはちわれら二人を握手せしめ給ひけるなり。われら若き戀びとはその後をたゞ印刷職室にのみ出で入りぬ。印刷せしどころのものは一々にあげがたし。陛下が手書し給へる勅令、秘書官が認めたる公文書、博士連が作れる農藝・牧畜・漁獵・工業等の成績表、參謀部が作れる戦闘・捕獲等の記録、大藏大臣が作れる貿易輸出入の報告など、たぐひ多けれども、こは後には他の後進の職工に譲りたり。たゞ長き年月を飲かさず、われら二人のみづから字を拾ひ、字を植ゑ、印刷し、製本するの名譽を擔ひしは、我王陛下がその十八歳のおん夏より今七十五歳の秋まで、年に一篇、または二篇とかさねて、こゝに百篇を完成し給ひしこの御製三萬ペイヂの大冊『海王百詩』にぞありける。われは今、ことごとしく陛下の功業を數へまつらじ、

そは世界の人の驚き知る所なり、またこの世界の至寶なる御製百篇につくされて明かなれば、——さはいへ太平洋全部を領して、頸輪の珠を亂し散らせるが如き大小貳百の島嶼に據り、通海税を捧ぐるにあらざれば陸上諸國に屬する一隻の船艦をも通過せしめず、借漁税を納むるにあらざれば他領に屬する一隻の漁船をも入れしめず。漁業より得る諸種の海産物は世界を顧客として、歳入五億圓の高額に上る。漁業と戦争とに堪ゆべき大艦を有すること參百。民衆は蕃殖して貳萬五千に達しぬ。一代にしてかくの如き偉大なる成功の帝王は、獨り我王陛下にはじまりぬ。この間には幾多の戦闘もありき、幾多漁業と通商との齟齬もありき。もとより我等が國は陸上の者を害するの意なし、たゞ我等が領有たる海洋を犯して無斷に通過する陸上の船艦を

許さざりければ、通海税、借漁税の兩條約を定むるまでは、戦闘は實に止むを得ざるの擧なりき。されど斯かる戦闘のなかに、漁獵のなかに、我等はわが職室を出づることなかりき。王が玉座をはなれて、或は上甲板の號令塔より下りきて授け給ひ、又は遠き北海の漁場より送り給へる御筆の原稿によりて、妻がひたすら拾へる字をばわれはひたすら植ゑぬ。陛下が校合訂正數回にして終れば、妻はインクを練りルラを作り、われは紙を裁ちて徐ろに刷りぬ。いかなる劇戦、いかなる風濤、いかなる氷寒、いかなる暑熱のなかに、たゆむことなく樂しげなる舳第貳層の伶人舞姬が奏する音楽歌聲のどよみを遠く聞きつ。われらは斯くして公爵を賜りぬ。年貳萬金の國俸はわが國民の



戸主一般に等差なくひとしく賜る所なり。三人の男子は或は戦士、或は農博士、或は侍醫、おのゝ長ずる所の技藝によりてわが如く陛下に仕へぬ。

嗚呼慰安。愉悅。黄金。爵位、わが陸上を見すて、求めたる物みなすべてを得たり。われらは斯くして次第に老いぬ。妻は先づ去年の冬をもてこの生を去れり。われらが當時の同僚七百九人も残れるは稀になりぬ。老いては目もくもりがちに四肢いと弱くなりまさる。かゝる朽廢せる肉體はわれらが健闘の心靈を盛るに足らじ、我も今見すて、更に々々新たなる生に進み闘はむ。

この生のをはりにいとも嬉しきは、くもりがちなる目に、わななく手に、猶も妻がかたみの活字ひろひて、まげゆき宮掖の印

刷職室のなか、うらわかき同職の子らに打交りつゝ、やうやうにこの御製『海王百詩』の百の巻を、他の助けもからず刷りをへつることなり。一篇の成るごとに必ず加ふることを許し給ひしは、われと妻との印刷者が名よ。いま我王陛下は、このいやはての巻にも亡き妻が名をならべてしるすことを許し給へり。猶おほみなさけにあまへまつりて、あなかしこ、かゝる昔がたりをも巻のすゑに植ゑぬ。さなり、われは植ゑぬと云ふ。生れて文かくすべ習はぬわれなり、かゝる詞つゞくるも、陛下がこの大冊百巻の御製を植ゆるによりてこそ自から覺えつれ。詞のつづきに世に似ぬしらべあらば、颶風暴雨、あるは大怒濤のなかに足拍子とりなれたる感化とも思し給へ。人々の如くに筆とりて美しく書きしにはあらず、われは頭より手に、直ちに文字ひ

ろひて斯<sup>か</sup>くは植<sup>う</sup>ゑぬるなりけり。

(明治三十五年九月十九日稿)



### 長相思

百合ばなに君うれひてぞみだれ髪われ狂ひて  
ぞ長<sup>さ</sup>き酒<sup>さか</sup>歌<sup>うた</sup>

悔<sup>く</sup>いぬ子にしら髪は生ひよ老<sup>おい</sup>は往<sup>い</sup>け酔<sup>よ</sup>ひてま  
るびてこゝに寐<sup>い</sup>ぬ子に

わかき我はわれどわが音<sup>ね</sup>をおさへ難<sup>た</sup>し魂<sup>たま</sup>しゆ  
らげば戀<sup>こ</sup>の賦<sup>ふ</sup>は成<sup>な</sup>る

西にしてはわかきダンテがやさまみに一たび

泌しみしおもかげの君

君に往かであまたあめつちに門かどありや百合がを  
しへし道の一すぢ

笛じやうと和し琴とやはらぐあめつちのひびきの宮  
は君が胸にぞ

人戀ひては今まろらかにあたゝかに我をめぐ  
れるあめつちと見る

あをぶちにひと花うかぶさゆり花わづかに君

が頬をも説くべし

野には花そらにみちては虹と知る美しいし君か  
戀のためいき

眉まゆあげておどらざらめや酔はざらめやわかき  
二十はたちを歌はざらめや

君を追ひて二十萬年こゝに見るわびて瘦せて  
は稀にこゝに見る

思ひしみてふたりが胸かに醸みし酒ふたりが酔

ふに誰しとがめむ

君はしもなさけ燃えぬる火焰ほのほの宮みやわが魂たま封じ  
われぞ門守かどもる

星は空に戀はわれらにまばゆけれや、似しも  
の、地なる火の山

かならずよ詩はのちびとにおどるべし戀はむ  
かしを慕ひて死なむ

天地あめつちにあこがれやりしわがこゝろあつめてよ

りて戀の緒にする

のこされし戀のひかりのひと道に今しかへら  
め天あめのふる宮

呪そはれておそれ思はぬ戀の夢たゞ美しくしき呪じゆ  
咀その手と見る

夏 草

牛放うしはなてば木の芽めの風のやはらかに袂たもとに青あおき大

## 那須が原

この水の根岸へつゞく柳の戸つがひの鶯鳥暮  
れて歸らぬ

蝶いくつ黄なるが過ぎて鐘ぞ迷ふ螺鈿おち葉  
に光なき寺

詩集手に豆の葉ならず人ふたり紀伊の霞は和  
泉より濃き

春ばなになさけ染めたる歌の君を草の武藏の

戸にこもらする

人ぞおどる今宵快樂の夢のほひこき紫の虹  
のおもひ子

さびしみのあわたゞしさにこもらずや芥子紅  
うして散るを咎むな

遠き島へちさき我世へさは言へど長き戀路へ  
とばかり惑ふ

われどこそ歌の硯に下り立ちし蓴菜の水の手

## に寒き朝

百合の香にあま戸そとくる露の朝夢かのさま  
の蝶と人と見る

世は我にめかくしくはへ鞭くはへ火焰あらし  
も幸と往かしむ

おち椿こゝろ無くてや流るべき追ひて來にけ  
る君が野の水

おのづから愁はきたるいかゞ追はむ鶯なくも

## 懶うと聴く日

まゐらする袈裟の御肩の瘦せやうや老師を小  
さき御弟子に泣きぬ

はかなげのかごと言ひとくすべ知らず我やな  
さけの人に足らぬ秋

夕川を西へこえゆく輿のひと去年の一人にお  
もざし似るな

これや昔わかきマリヤとあらはれし靈のわか

れか白百合の花

秋花あきはなにはのくなるのれ嫉ねたみ雲野のの神かみゆふべ被かぎて往いにぬ

山吹やまぶきに膝かかかへたる春すがたわびておはすや  
雨あめの大原おほはら

柱脊はしらせに手毬てまりあやなくもつるよかごとの君が  
胸むねにひく絲

たばね髪がみにかざしは藤の木曾をとめ牝牛めうしちさ

うて山をいそがぬ

鍋洗なべふと君いたましや井いぞ遠き戸は山吹の黄き  
を流す雨

野のゆふべ鳥の行方になみだおちぬわが世も  
小さく低く遠き其れ

武藏野にとる手たよげの草月夜くさつきよかくてもつよ  
く京を出できや

朝あけの野邊のむらさき袖は四つ美しいか

な君と我と見る

帳とほりわけて牡丹が晝にくらべみぬ虹の被衣かつぎのわ  
が戀こひぢろも

草くさの筆ふでの優ゆうなるみだれわかき人や朝目あさめすし  
き桔梗きんぎょうの小椽こゑん

うなづきて秋の野かへる近江の人なさけこの  
世にうら若いかな

人病みて繪絹ゑぎぬに才さいの眉まゆはそし身に泌しみむ宿や夢たて

の香の水

菊の香に酒の甕うたひをめぐる朝機あしたなる人の歌に笑  
まるゝ

こゝにして稀まれなる笑みの二人ふたり見つ武藏むさしいづる  
に誇らしの河

水色の絲のもつれは誰たがどがぞあやなく人に  
恨み負むふ夜や

梅にふる東大門とうだいもんのうすみぞれ被衣かつぎの人を牛に



載せしか

犬つれてみづいろのきぬ人うつくし麥の穂末  
に遠き富士みる

御つかひのわらはの神の御手のたゆげ戀のか  
むりの七色瓔珞

夕ばえのいづこか人の信濃なる秋の脚胖に霜  
を知る山

なまじひに皆わたくしの憤り牡丹かへて鳴

門に笑まむ

蓼あかう千隈の河の北に長き船子われらも佐  
久にとまらむ

わすれても左たもとの詩の反古に今の博士の  
肩を撲つな人

なにとなき草の香のせてうかぶ風まてな行方  
は我もその西

妹がもとに扇わすれしあしたとは忘れてもま

たわが書くことか

金の間に晝のうまいの春のひと孔雀しづかに  
彩羽つくるへ

點乞はむ君はきまさず蓮の糸ひけば且つ斷ゆ  
こと足らぬかな

いかなればふと亡き親はしのばるゝゆらぎて  
行くよ野の名なし水

折れ節の秋の手ざはりつめたさのわびねの里

や鐘こもりがち

われ似ずや上羽みながら血に染みて春の入日  
に歸りこし鳩

森の秋に沈の樹朽ちて香を見たり嗚呼たゞ人  
は闇に倒るゝ

たすきしてひと馬盃にながれ汲ひ里の小百合  
の宵うすづき夜

江の月に霜に千鳥の夜もなれぬ笑ひたまふな

京に似ぬ髪

麥の幅にかざしは菊の紅き白き牛車がらから  
都に入らむ

舞の袖

(この春小島烏水および晶子と畿内に遊びて作れる。)

童女がわか水まゐる富士のふもと沼津に明け  
し年の朝月夜

吉備は遠し梅にと言はず詩のゑにし浪華のふ

た夜君と相見る (岡山の人本山萩舟に逢ふ)

天王寺伶人町の朝ありき梅に瘦せたる友の肩  
とる (友は烏水なり)

梅が香や名に慕ひよる蜷川劇詩のなかの小春  
に逢はぬ

かりずみの堂の夜寒のものぐるひ忘れて梅に  
達磨を焚くな (泣菫近く寓して谷町の某寺にあり)

春の宵を紋十郎は藝の神津太夫老いて浪速の

寒き

あわたししひと夜泊めての朝なで髪君が和泉  
の御母に泣かる

塔見ゆる菜たねの末は藤井寺と母がをしへし  
河内にや有らぬ

道明寺詩をいのりしは童髻すがた母が割籠に  
越えし河内か

しら梅に憶良たへし遠里小野十五の我の春

歸りこぬ

立田こえてわか紫の藤の奈良あやにく歌の在  
原ならぬ

雲ひとむら真榊いろのかなた畝傍三千年の大  
和に入りぬ

金の冠環の釵や土ならぬ古りし都の大和に泣  
かる

開眼の經は行基の東大寺聖武の御宇を遠しと

思へ

雲藍あゐに山紺青こんじやうの奈良ならびより歌うて倚りし梅の  
二月堂にげつどう

山に入りて清水しみづ、神杉かみすぎ、鹿しかに一里いちりわれらこの  
世よに春日かすが拜みぬ

梅うめの奈良なら古代こたゐ雲がたわかむらさき七重しちじゆうの袖の  
人見るものか

京みやこの宮みやの春はるの御使みつかひおくれつや春日かすがは梅うめに去年こぞ

の舞まひぎぬ

梅うめしろうしろう春日かすが古代こたゐの朝神樂あさかぐら摺裳すりもながきは藤原  
の子こか

夜よかぐらの鞆鼓かづこつめたき梅うめの奈良ならまじりて歌  
の紀氏きしが子こや無なき

そのひとり春日かすがは藤ふじの花はなちりがた京みやこへ詣まうで、  
京みやこを出いでこぬ

こまくらに采女うねめが魂たまの夜よのしら梅うめさぬかけ柳やなぎ

ぬるによろしき

ものゝあはれ歌に知る身や世にもろきわれ頼  
政の宇治を悲む

われひそかに山の墓なる親に耻ぢず悪しき名  
負ひて京をも過ぎる

京に入りて妻とさゝぐる墓のしきみ親讚する  
に歌なほ足らぬ

西加茂の尼は蓮月岡崎の歌はわが父その世と

ほざかる

溝にそひて紅梅おほきわが岡崎或は母の猶い  
ますべし

京の春に里ゆるされぬ姉見むと御門の築土梅  
に遠りし  
(以下二首浪華の水窓と再び京に逢ひて)

紅梅に姉が世泣きて姉に肖し眉の優男の京わ  
すれ難た

## 無眼秃奴

三月十六日午食後、凡心たま／＼冥助あり、雜誌明星の草を按排するの内、ひそかに見性の座に匍匐して一則を執持し、自ら苛責するこゝ數日、おなじく廿三日の朝に至て、劣根頓に挫折し、悲しむべし、熟果の地に委してまた枝に見がたきに似たり。

われまどふ我師わが祖師また多辯たべんいづこの關せきにわが額割らむ

盲しひし目は己が心をえぞ分かぬ鳥に吳くれても  
食はませはつべし

いづこよりいづこへ往くと大手おほてもて打たれば

しつれ往く國知らぬ

微笑ほゑみて念佛ねぶつしきりに果てましきあるひ或は母や知  
りておはせし

青柳はゑにしあればぞ撫でにける春かせ石も  
花のさかじか

膝くめば妻つまはかわゆし錢ぜにはしゝわざくれ今日けふ  
も我うしなを喪ふ

手さぐりに探りはしつれ聞きこなればあやにく是

も石かどぞ思ふ

われやはた己が鞭もて笞もて我逐ひ退け哭く  
にはあらぬか

たまたまに菩提うたがふ身となりつ先づ天地  
にわが掌あはさる

地に伏して道心いまだ頻りなる猛者の此子に  
魔障あらずな

口疾にも昨日か人を罵りしあなや己れが髪に

燃ゆる火

なにごとぞ男の子道には耻なきに大聲あげて  
哭くを憚る

思ひ屈して額に手あて、書くや歌うれし七日  
をわれいつはらぬ

里 唄

ゑにしありて十とせ御弟子の末にまじる詩は



つたなきも勉めざらめや

地ぞせばき片手に壓してほゝ笑まむ譏りに動  
く才の我世か

世の秋にわが師わが友つらからず歌には幼な  
道に笑む今

美しくしう悔知らぬ子の笑みを見よ我ぞ我名を  
踏みて墜ちにし

一たびは男の子の笑みに我を見て人小さいか

な戸にはぐれたり

聖の甕に神の封じの才ゆりて夕の歌の酒とあ  
ふるる

詩に悶えて今宵微妙の天の扉酒ぬすむ子に衣  
かづけませ

わが歌は御園に乾れし蝶の片羽彩ありと見ば  
天を讃へよ

桐くだけて五彩の鳥を山に見ず秋かぜ我を起

す子の無き

神の世にも我に似し子のひとり子の笑みて刻  
みし花ならし薊あざみ

なでしこの小瓶をがめそへたるかけ鏡まへに瘦せて  
は細き筆とる

太秦うづまさの祭をかしき竹の月鬼のひとりに袂ひか  
れし

かきさしの繪絹ゑぎぬのひとの袖に消えぬ宵の繪皿ゑざら

のはのじろき蛇へび

稻妻は金剛神こんがうじんの夕あらび金の兜かぶとのゆらぐに燃  
えぬ

賊たぐの火の紫竹しちくを焼きし夜のみだれ手綱たづなに泣け  
るあわただしの人

むらさきに東初日ひがしはつひのながるゝよ若水人わかみづと詩を  
驕りの春

ゆかしさを夜の木屋ちくせいに假りし人さかしと見つ

れ憎くしも無き

人しれず戀ひぬる我に人しれず人も戀せば見  
てなぐさめむ

露の戸を桔梗にわぶる人の小褙三月里居の朝  
の涼しき

雪瀧の水車が小屋の合歡花の晝十九の歌に肩  
かせし君

萩の神桔梗にとづく夏の野を載せて送らむ黄

金日車がねひぐるま

わびし庭に稀の御文の夕づかひ白き雄鹿に舞  
衣かけぬ

武藏野に片椽つけし竹びさし槐樹ふたもと秋  
の富士濃き

とき髪に眞晝の歌の神のむれ森の泉は百合の  
香と成る

いつの春かわかきけなげのひとり子をもてあ

ましたる國の小さき

瘦せてねぬ怨女が聞の小うちはに這ひも啼く  
べき夜のきりぎりす

夕雲の野わきに聞きぬしろがねの秋の轡の駒  
のいなゝき

百合の譜を君に許せし星のどがめ千とせ眞白  
き野川の石よ

松の繪に夜寒をわふる神樂堂舞衣ながらまろ

びていねし

わか葦に江を二十里のくだりぶね人平壤のな  
まり薦たき

業平がのちにきたれるこゝにひとり戀のはこ  
りの歌二萬年

春かせに百の錦の車たまへ載せて歸らむ子ら  
のまばゆき

## 扇頭蛾眉

(この五月、信濃、越後、佐渡の旅にて作れる)

浅間の神富士を招ずる巖榻と妙義千とせに天  
簞りたつ

巖裂きて若葉點する二十六碓水の夏ををかし  
と踰ゆる (碓水の洞道二十六門あり)

巖間巖間もとより名なきかくれ水あな寒闇黒  
へさびしう落つる

佐久に来て君が蠶飼の唄は聴け唄に入るべき  
越の子ならぬ

夕ばえの信濃に近う低き富士夏の畫枠や碧の  
千曲川

影と添ふ菩薩は母か善光寺暗の御廊に我掌あ  
はさる

白雪に薬師たふとし北越後米山人を去る貳千  
尺

里古りて木立趣ある藤井村碁の書、琴の譜、  
牛の背の歌 (柏崎の大矢正修が邸に宿りて)

君が劍、妻君が香、われの歌、賓客五百越後  
に酔ふ日 (おなじく)

なにごとかいくさ稱へて詩に及ばぬ馬に倚る

も才筆に倚るも才

(柏崎新聞の記者木村松溪と話す。松溪は亡友  
凌雲の兄なり。凌雲詩才あり、曾て交遊の間に知らる。日清戦争  
起るの初め東京に客死せり。)

舞をへて柳にひくき橋また橋竹枝たびにし令  
が御手とる (新潟縣知事柏田天颯また善詩の人)

信濃川彌彦さながら搖ぎ浮ぶ大夏水を枕なる  
夜や (新潟借樂館席上)

指かみてたやすからぬを思ひあへ詩は君むな  
し靈のあらずば (新潟みゆき會諸氏と語る)

千歳よし歌の帝のおまし所黄金垣ゆふ佐渡が  
島山

法華經に火焰もえたつ日蓮がこはき顔見し加  
茂の古湖

美しく相見し子らを詩に入れて藤の花つむ  
峠中山たうげなかやま

佐波によき牡丹の夏の歌の宿ふるさ帝を夢に

見まつらむ (相川にて柄澤いかづち翁の三宜聽處にさゞまる五日。佐波に牡丹裁養の家おほし。)

烏賊船に佐波路はなれて三とせ來ず妻が苞と

や蝦夷の戀唄 (佐波の漁民の子弟烏賊船の小さきに乗りにて北海に遊漁するもの多し。)

山よわか哀しからずや若うして病む身ことし

の盆をえ待たぬ (佐波鑛山の坑夫等概ね瘦軀蒼顔、一種の咳嗽あり。)

り、痰を吐く。稱して「山よわり」と云ふも、肺患にあらざる無し。渠等唯一の慰籍は相川の盆踊なりと云ふ。

藤ばなは老いても帯に捲くと知る山わけ衣の

子が海府村 (佐波の海府郷は古昔の風俗を存じて、宛ら別天地の感あり。)

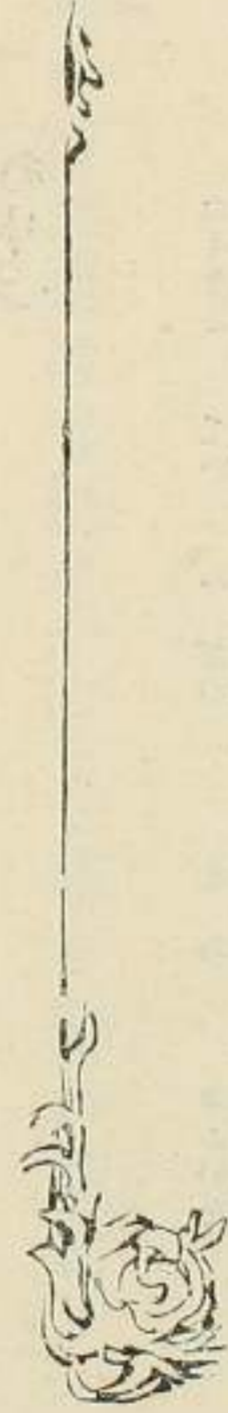
目に入るは謫居の帝が御題の海眞野の夕磯泣

きてぞ歸る (順徳院御製に、思ひきや雲の上をばよそに見て眞野の入江に朽ちはてむさは。)

小木の子は越あさびどの泊り船六里の海を二

十日わたさぬ (小木の湊に紅樓多し。相川を去る海上六里。)

濃むらさき我世いま見る佐渡すみれ摘みて家  
 なる君が詩問はむ  
(わが國の産にて丈たかく花の大きにして、こゝ  
 に色こきは、初めて佐渡にて見たる葦なり。)



掌 中 記

師 友

世の秋にわが師わが友つらからず歌には幼な

道に笑む今

男子生れて書を讀みぬ、聊か我を知り我を信ずる所無しと謂ふ  
 べからず。猜疑好矣、嘲罵可矣、われには改め難き志あり、易  
 へ難き樂みあり、移し難き勇氣あり。さるからに露霜の慣ひ身  
 には泌め、豫て期しつる憂き秋、寂しとも悲しとも云はず。況  
 してや十年を通じて變ること無き師の慈愛友の情愛、固より我  
 分に過ぎて、感謝せむに辭あるまじう覺ゆ。人よ我詩を問ふと  
 と勿れ、示して誇るべきかは、自ら誦せむも此釋なげなる調べ



に、何ばかりの慰藉か籠りたる。唯末なる世にも、是のみは古  
 人に愧ぢざる幸と打笑ましきは、又なき師友のなさけに、丈夫  
 の交りの温かさを、眼のあたり我れの受けぬる事なり。辱なし、  
 此道を今人に求めて得たる者、噫われを除いて幾人ぞ。

呪 咀

森の秋に沈の樹朽ちて香を見たり嗚呼たゞ人

は闇に倒るゝ

渠は直情の人なり、能く怒れり。渠は意氣の人なり、能く泣け  
 り。勤勉の人なるが故に、渠は十人の勞を一人にて爲し、勇邁  
 の人なるが故に、渠は百人の敵と單身にて戦へり。渠の進退や  
 龍の如し、竹頭木屑の末に拘々たる能はず、疾風迅雷に駕して

直ちに宇宙を呑まむとす。故に凡眼は渠が行動の細瑾を議して  
 渠が全身の『大』を窺ふ能はず。此に於て、渠を羨むで到り難き  
 者、渠を嫉むで敵し難き者、渠に敵して敗られたる者、鼠の如  
 く、梟の如く、蝙蝠の如く聚りて、陣を闇夜の荆棘が林に張り、  
 毒舌毒筆の弓に、排擠、虚偽、侮辱、中傷、讒誣の隠し矢番へ  
 て、四方より渠を亂射せり。渠は巨人なり勇者なり、豈戦ひを  
 知らざらむや。而も鼠の如き者、梟の如き者、蝙蝠の如きもの  
 は、之に勝つも渠を飾るの敵にあらず。冤を數へて小兒を罪せ  
 むよりは、寧ろ我を犠牲にして小兒の名を成さしめむには如か  
 ず。如此くにして渠は闇中に斃れたり、一言の辯ずるなく一矢  
 の酬ゆるなくして斃れたり。嘻々の祝聲は森を揺れり、闇中に  
 舞踏する醜類の如何に簇々として多きかを見よ。嗚呼渠の命の

窮れる乎、渠は空しく如此くにして永久に葬り去られたり。我曾て沈の樹の秋に朽つるを見き。朽つるも猶淨香の森林を薰蒸するを見き。渠の遽かに奇禍に斃るゝ何ぞその情の悲惨なる。

かごご

果敢なげの怨語言ひ解くすべ知らず我れや

情けの人に足らぬ秋

歌ならず、香ならず、慣れぬ里居の水仕わざに、この頃の秋瘦君いたましく、解き衣を誰が爲の薄綿入、針の手の細りも美しくと見るものから、此手とられて京は高尾、梅尾、母様に紅葉見せて頂きしも夢の十五、十六、西する雲の時雨めく窓の夕に其方ながめて思はず眉顰むも、若き習ひの、さすがに里戀しか

るべし。それ想ひ遣らぬ情ならねど、男は物事表面は大まかなれば、心には痛々しさを飽くまでも泣け、慰め賺さむ事の故意とらしさを避くるに、何やら此日頃、隔意出来しやうに女おもひて、絲卷の繾綣、鼠が棚嚙ちりし些細の事にも、低き溜息つきて、果は針箱すゑし三疊の隅に小さう俯臥して、くしくしと果敢なげの小泣、母様呼んで来てとは、京は百里の西、君よ無理かな無理な涙かな、我れ何と慰めむ、口不調法なる男の斯る時何とか爲む。思へば我情の未だ足らで、君を淋しがらせし口惜しきわが悪ろきなり、詫ふるに許してと、肩とりて起せば、あれ勿體なやと再び顔掩ふ優しの人、今まで泣きしとは虚言なるべし、袖から洩るゝ美しくしの片笑靨。

## 過渡期

わが歌を悪しと云ふ人世にあるに朝うれしき  
夕さびしき

こたび移りし澁谷の新居は、高さ土地の木立多く、この日頃朝  
毎に二合三合の落栗拾はれ候に、京の北山に栖みし幼な時代も  
追憶ばれ、後ろの蕎麦より、宮益の坂ゆく人、青山の街の家並  
なぞ望まれて、里居と云ふよりは山居の心地致し候。お手紙に  
先づ時候の障り無きやどのお尋ね、辱けなく候かな。此の春二  
月より、ふと酒と煙草が嫌ひに成り候うて以來、胃も脳病も際  
だちて良く成り候。毎度今の新詩風に對する御批評を寄せられ  
候ふこと、殊には我上にまで屢々過分の御厚情を賜り候ふと、

常に感激致し居り候。想ふに詩界の革新は纔に端緒を探り得た  
るのみ、後に來るべき高材逸足の人存つて、之が燦爛たる大成  
の偉業を示されむ事は我等平生の希望に候。それ迄は、我如き  
弱卒も、姑らく竹槍席旗の彌次馬として、舞臺の寂寥を破り居  
らねば成らぬ事と存じ候。日本人は兎角若隱居に成りたがり候  
癖あり、つまり小成に安んじ候也。されば畸形なる兒の見世物  
を喜び、縁日の鉢植の花木を嬉しがり候。今日の詩に『完作』の  
『中庸の作』のど需めらるゝは、頓て若隱居根性より國詩を畸形  
兒にして見むとする者に候。泰西文藝思潮の十が一にも觸れず、  
詩と散文との區別だも知らず、日本の文學が世界文學の如何な  
る劣等級に置かるゝ乎をも辨へざる時代に、三十年五十年、乃  
至百年後の他日を夢みる先見達識の人存つて、極端なる評論と

創作とを世に示すは、固々時弊を救ふ上より止むを得ぬ事に候はずや。加之も今人が見て極端とする所も、既に今日の泰西に於ては尋常の茶話にも上らざる凡俗の事とすれば、日本の現状や、文藝の開けたるを謂ふも、徒らに多く活字を弄んで白紙を汚す事の發達を意味する耳。されば在來の詩文繪畫美術等にのみ眼慣れし今人の多數の如きは、斷じて今日の文學美術を批議する資格無之候。例せば我等の短詩長詩を以て萬葉古今の詩系を引ける者と思ふが如き批評家は、我等輕蔑して齒すべからず候。人生百年、須臾なること電光石火也。我等偶々此轉換推移の過渡なる時代に遭逢せる事は、後代の詩家が甚しく垂涎して羨む所なるやも知る可からず。願ふらくは渠等虛榮家の黨争に交はらず、唯だ一藝の微を以て疎かにする事無く、大に精進

して、此千載一遇の文藝復興期に、聊かなりとも登場歌舞する一人たりし足跡を遺さず欲しき事に候。人、草木の如くなる可からず、千載を期し難くば、せめて百載の名をも樹つべきに候はずや。況してお互、詩を愛するは天與の性情、百の道學先生に叱斥せらるゝも、止め難き所に候ふものを。次の御便には近頃の御作お見せ被下たく候。此里の野菊封じ添へ候。猶々高山君の美的生活論、げに我等には十年來の快論と存せられ候。同君の病は悲むべし、されど病を得られしが爲に却て萬人に勝れし健全なる頭腦に復され、直ちに人生の眞を悟つて、如此き議論を爲し、初めて詩人らしき生涯に入られ候ふかと思へば、我等限なくも嬉しく候。草々拜復。

## 木 が ら し

わりなくも寒き厨の掛竈に落ちし鼠をうら

やむ思

十月十九日、木がらし高う荒ぶる夜なり。栗、櫨の木立を騒がせて、餘勢は強く雨戸を揺る。遽かなる夜寒に、小さき假庵もまた慄くに似たり。朝より詩集『行く春』に興得て、笑み溢れたりし人の、宵の程例の齟齬痛みて、熱など出でぬ程にと、我が云ふがまゝ、夜着の下に小さう成りて、今うとうとの安眠の夢は遠き戀しの母が上か、さらずば彼の集の詩の境、野路の棗赤らむ木かげ『君ゆく路のかたはら、草に點する花見ば、家に寄する女は無くも、手折らで去るな旅の子』打吟じて、くゝと呼ば

ふ鳩の如く、脚軽く草ふむ人か。机に肱せし我は漸く書に倦みたり。更に紙展ぶれと句の興湧かず。友の詩稿を刪らむとすれども、斯かる頭重き夜は、恐らくは批判の眼昏みて、貂に續ぐに狗尾を以てするの愚を爲さむ、止べき哉。火鉢に寄りて茶を得むとするに、湯冷えて火は灰と成れり。斯くと見て、夜寒一時に加はる心地して、堪ふべくもあらず、厨に消壺探りて火を吹くに、湯も沸き出でぬ、六疊の書室は次第に暖かに成りぬ。我、頬と手を火にかざして徐かに思ふ。去年の此頃は中國に旅して、歸途一人のうら若き女詩人の爲めに、其の理想を捨て、運命の犠牲となるべき不幸を泣き、人と三人、相携へて別れを西の京に惜みき。寒かりしよ、木枯今宵の如く吹きて、夜明くれば栗田山の木下道、朝霜苔に白う、三人が血にたぐへし山蓼

の莖紅う映えて、それ長く互に忘れ難き秋と成れり。一昨年の此頃は我おなじく友と中國に旅して、數日を嚴島の紅葉谷に酔ひしが、友は共に謀りし韓國の事業の敗れたるを怨みず、苦諫我に勸むるに、長く讀書の人として世に立たむことを以てし、歸途大阪に別れて渠は遠く江差に向つて去りき。我は當時再び文界の生涯に還りけるなり。我早う今の文界が、教師と戯作者と宗匠と墮落書生を以て満たさるゝを知れども、當時の我意、未だ文界の腐敗して陷擠中傷今日の如く甚だしきを想はむや。更にその前年の此頃は、父を亡ひて百日を経ぬ。然れども友と世の經營急に、東京、中國の往來忙しく、京を過ぎて西大谷の墓山、纔に半日の暇に、一枝の黃花を手向けて去りし耳。生前の奉養既に薄く、死後の報謝また此の如く慘なり。兄弟同族の

我を罵つて喪心の者と爲す、辯せむも難い哉。三十年の此頃を顧るに、二三の友を拉して韓の京畿道、高麗朝の舊都開城府に在り。空手萬金を贏得るの夢闌なれば、自ら人夫七十牛馬十七頭を率ゐて、金川の蔘畝に入りしこと兩度。私に蔘を外人に賣るは國法の禁ずる所、犯す者は死罪たり。畝主等の狡猾なる、官に伴りて日人妄に剽掠し去ると爲す、官ために兵を出して我を追ひ、所在の韓民も亦火を放ち銃を擬して我に逼る。我等七十人期しつる所なり、皆拔劔して蔘を駄せる牛馬を護し、踴躍して黃海道の海濱に逃る。日夜兼行、眠らざりしこと往還九日、嗚呼忘れ難し、夜深うして山路險惡、加ふるに天寒うして北地の霜厚さ三寸、鞋を没して浙瀝音あり。衆皆飢ゑぬ、足冷えて石の如し。漸く交々怨嗟の語をなして曰く、父母の國を

千里の異域に離て、何が故に此苦楚を嘗むるや、一晝夜五金を得るは高給なり、されども生命を賭して死地に入り、他人の爲めに萬金の利を爲さしむるを思へば、我等の勞役は愚劣なる哉と。偶々山上の人家十四五戸なるを認めて、戸を叩いて家毎に飯を炊がしめ、門頭に黍殻を焚いて暖を取る。星冴えて煌々、天地晝の如し。我一友と衆中に立つて高く喚んで云く、君等の余を怨む誠に理あり、君等を此に至らしめたるの罪、我甘んじて受けむ、君等平ならずば乞ふ余等二人を斬れ、斬つて寸斷にせよ、猶馬上に銀二千金を刺す、願くば各々頷つて持し去れ。然れども海外に在つて姑ばらくと雖も主従たり、此苦楚を共にして死地に往來す、奇縁と云はざる可けむや。君等本國に父母兄弟あらむ、親戚故舊あらむ、さらば孰れか錦衣にして榮を郷

閭に誇るを願はざらむ。固より君等の死地を余と共にするも、徒らに銃彈に死せむが爲ならず。如此きの勞役に服する故は、一に身を立て志を成すの資を作らむが爲のみ。余や元來商估に非ず、萬金を得て士を養ひ友に酬い、兼ては天下の書を購うて讀まむとす。死地に君等を困めて唯一身の利福を是事とするが如きは余の志願ならむや。今や日人の勢力日に衰へて、威鏡、江原兩道の如き、屢々暴民の日人の旅客を銃殺せるを聽く、余等も亦自ら期する所とは云へ今正しく虎狼の地を踏めり。如此くにして日人を侮蔑するの風を長せしめば、兩國の將來遂に如何ぞや。想ふに今日は同胞互に護りて自ら警しむ可きの秋、共に内に争て小事に憤りを發す可けむや。君等平ならずば乞ふ余を斬れ、然らずば相扶けて何ぞ當初の志に復らざるや。我斯く

云ひて即ち腰刀を脱して人夫頭某に授けぬ、如何に無學なる渠等の柔順なりしよ、衆皆腕を扼して而も頭は皆低たり。黙して語なきこと少時、唯頻りに嗚咽の聲を聴くのみ。人夫頭涙を揮つて突如衆に叫んで云く、旦那のお詞御尤なり、皆勇んで働いて呉れど。時に各戸小豆飯の熟せるを報ず、握せしめて食らふに大牢に向ふの感あり。厚く賃して去るとき、夜はのぼのど明けにき。すべて近き五年六年の我經し跡を憶ふに、誠に安く樂しき事こそ無かりけれ。幼なげなる書生の望に、抑へ難き青春の情に、我ど泣き人と泣き、數多の憂き秋を重ねて、今はた卅四年の秋の我や如何に。木枯高う屋を揺りて、火かげに火鉢抱く三十男の影細う、詫びたりな澁谷の客居。今鳴るは惠比壽麥酒の流笛。夜の明るるは程無からむ。

行 く 春

詩に瘦せて戀なき宿世さてても似たり年は  
我より四つ下の友

友の詩集新たに市に出でたり、集の名は『行く春』早う去年の暮春に出づ可かりしを、美しくしき二十女の解き髪、櫛に流るゝ一筋を惜む情ながら、一音一律の亂れ氣にする友の、用意疎かならず、書を飾る組緒の色にも憎き趣見せて、待つ人の耳目を驚かすこと今日に成りぬ。近く詩集として世に出でしが多き中にも、長詩には藤村の『落梅集』短詩には晶子の『みだれ髪』、共に我詩壇の珍として、世評の定れるもの有り。今又この『行く春』を添へ得たるを思へば、卅四年の我詩壇は誠に幸福なりと謂ふ



べし。この集の作者薄田泣菫の名は君の夙に知る所ならむ、泣菫が眉目清秀の青年詩人にして西歐詩聖の遺韻を渴仰し、情熱に富むの詩人なることも、亦、君の傳へ聞く所ならむ。然れども我は更に君に向つて告げむ。泣菫は銜學の徒に非ず、眞摯なる修養ある詩人也。泣菫は俸祿爵位の望ある人に非ず、「火かげの低唱眉をどちて、瘦せたる詩風に泣く」は、其改めがたき志なり。泣菫は情を矯めて道學先生の前に屈するの徒に非ず、「福田われ等の願ならず、腕の白きに恁らば足りぬ、罪をも厭はじ人もあらば、恁りて泣かむ」とする戀愛詩人也。泣菫は徒らに紅恨紫怨の文字を弄する薄志弱行の徒に非ず、侯爵伊藤を罵つて「亟相何とて無禮なるや」と歌ひ、南阿の義戦を憐んで「自由に壓さるゝ時し來るも、護るべき手あるを神に謝せよ」と讚する

の詩人也。嗚呼此の如きは又、わが單調なる詩壇の何人にか求め得べき。君、われは此あり難き友の詩集を抱いて、今新らしき歡喜の光明の中にあり。夕を訪ひ來らずや。君と此詩集に額あつめて、更に此うら若き詩人の家庭に就て、戀物語に就て、友情に就て、われ微笑みて語る所あらむ。我は世の毀譽に關せずして君に斷言す、「行く春」は今の詩壇に於て最も高く最も優れたる詩集なり。

歸 客

頷きて秋の野かへる近江の人なさけ此世に

うら若いかな

君とは湖水一つ西、京と云へば近き生れなから、歸るに家なく、

頼るに親なし、悪名漫りに一世に喧傳して、逋債頻に身を攻む。耻を都門の邊に忍んで、我の如くなるは甲斐なし。さるにても母上叔父君の、強ひても歸れの君を羨ましけれ。想はざらむや眉目俊秀の君、才筆縦横の君、若うして牛を郷田に追はむこと、慊からざるべし。さは云へ君が志の、中央政壇に雄を争はむには、學殖に閱歷に、猶幾多の修養を要せずや。若かず、姑らく郷人の志に従うて、老親を慰め、傍ら書を讀んで重來の計を爲さむには。我には四つの年下、甲斐なき兄振の我言ながら、柿むきて酒のみて、栗飯も後の思出、この里の萩は郷里で見られぬ紅さと打興じて、夜明くれば、更ば一年二年、殊によれば四五年は逢はれじ、明星は毎月送り給へど、雨上りの露滋き澁谷を朝立つ人、品川までは歩行きます、汽車には其處からと、

心定めては恨も云はず、輕き笑顔に點頭きて、線路づたひに彼方する從順さ。世なれぬ友の情わかきに、見送くる我や澁谷川の橋の袂、涙せきあへざりし哉。

### 淨光寺

しら梅の夕のしづく苔にしみてふと覺めま  
さむ母ならばとも

京の出町に淨光寺とて門徒宗の御寺、御亡くなり成されし母様が實家の檀那寺にて、今の御氣が狂うた御院主様は、未だ此方へ縁附て來ぬ前の御茶の稽古の御朋輩と、其丈は母様から聞かせて頂きしが、一昨年母様の一週忌に、今は東寺の門前で名の知れし大師餅屋が隠居、昔は御池二條上る紅屋宗兵衛様に十九

から三十六までの乳母奉公、あの御美しくしかりし御母様も、斯様に痘面だらけの獅子鼻、皺くちや婆の乳召上りてと、手傳ひに三晩泊つて様々の昔話に聞けば、母様が實家に其頃何故とも知らず早う切り髪に成り給ひし伯母様ありて、何時も被布の上かたぎぬに肩衣、手に珠數放し給はず、不斷に御稱名遊ばして、御佛壇の掃除、御佛飯の上下、御花の立替の外には、弟御の惣領の嬢様、貴方様の御母様を姉嬢々々と愛しがり給ひて、萬づの御教養を皆この伯母様が遊すに、發明な天稟の姉嬢様、あの様に讀み、書き、琴、三味、香、花、別しては御歌、御針に御器用な方様なりし丈有つて、四歳の春に最う正信偈と彌陀成佛の此方はの六首引宙で跡附け給へば、伯母様それを一つは御自慢、一つには行末禁裏様に召されて雲の上の月花挿し給ふ君と、人々

の嬢様の御容色賞め讃すが嬉しさに、御寺の尼講、永代經、御彼岸、年に一度の報恩講、有らゆる御法會に缺かさず伴れて参詣り給ふに、出町まで遠き幾つの町々、男衆の癖とて、夫れ今日も紅屋小町が御参詣、あれで佛いぢりは惜しいものと、眞實は四十女の、年よりは十五も御若き伯母様を口々に云ひて、店頭みせの日向に漆搔く手とめて見送るも有れど、娘持つ母親は、美事な御髪に小さき人の割勝山ふさひて紅い切まばゆく、矢結びやむすの帯自づから品ありて、地にも曳きぬべき袖だけは何寸、猩々しやうじやうの鼻緒の草履に草色の紐つけて、此の乳母が日傘の下に人形にんぎやうの様な姉嬢様の御姿羨やみ申さぬもの無く、娘の子は更なり男の子までが、紅屋の嬢様の歩き風は斯うと、辻々に少し伏目に成りて片手に小褌片手に扇の眞似してぞ遊びける。御寺の御新

發意に了然様として一粒種の御住持も檀家も大切がり給ふ君、姉嬢様とは同い年の、四歳五歳からの大仲好、須彌壇に足次して初枝様は觀音様、私は勢至菩薩、彼方は金絲の菊の襟映えて段々染の袖長う、此方は黒染の法衣に白衣透きて細き紫金欄の輪袈裟、美しくしき御兩脇出來給へるに、優しき住持様御小言ならで、却つて掌合せて御感の涙流し給ひし。貴方様その頃の事御存知でムリまするか。姉嬢様は伯母様御隠れ成された翌年十六の暮に、遽かに此岡崎の御宅に御縁附遊ばせしが、其は大變な御騒動、私の在所日野へお供申上げて御匿まひ致せしなれど其と知れて私は永の御暇、手を御合せ被成て阿菊あの後へ堂へ今一度連れて行て御呉れ、覺悟して御父様御母様の御心任せにする程に、逢うて御別れ云ひたしとの新發意様も、承はれば遽

かに番僧二人附けて肥後の學林とやらへ下され給ひしが、彼地へ御着き被成て程も無う御氣が狂れて、徑三寸の釣鐘を時ならぬ夜中に撞き割り給ひし由、御痛しき事と知る人誰も沙汰申しぬ。菊や最う聞かせて御呉れな、嗚呼悲しい御話、さては母様詳しうは仰せられざりしかど、十七の春から生れも附かぬ耳遠の不具に成つてと仰せられしも會得れり。唯我に未だ解し難きは、御亡くなり成される二三日まで母様に御不機嫌で御通し被成た御父様が何時に無い莞爾な御顔で母様が御顔を御目護り被成、初枝俺の罪亡した、御前は宅の檀那寺には遣らぬ、淨光寺の代々の御墓へ送り届けるぞと被仰つた下に、忝なう存じますると、蟲の息の母様が其は又例の無い嬉しさの満ちたりし御笑顔。淨光寺の御墓いつ御参りしても、氣狂の御院主掃除許りは

御行届被成て、美しくしきに、母様御臨終の御笑顔、今も此苔の下に御變り遊ばすまじ。

少年

一たびは男子の笑みに我を見て人小さいかな戸にはぐれたり

先人は徒歩して到れり、今の少年は車上より到る。渠等が學藝を説く、何ぞ實力なくして甚だしく高慢なるや。空涙と媚笑と巧言とを以て先輩に交る少年は有り、一人の心を以て許す可憐の獅子兒は無し。渠等は先輩に服事するに非ずして、先輩を賣らむが爲に門に集るなり。今の少年の或者は聖書を懐にし、大舉傳道の群に投じては數日の學課を廢するを辭せず。夫れ宗教

的道念火の如きもの有つて然る乎。何ぞ然らむ、黄口の少年、未だ世の奮闘に加はらず、人生の疑惑に觸れざる輩にして、切に救ひを神に禱るの大煩悶あるべきや。要するに牧師の假聲を學んで、小悟道家然、小厭世家然、小憂世家然、小哲學者然たるを誇らんとするにあるのみ。又今の少年の或者は競て文學書を購ひ、韻文を作り、美文小説を綴り、來つて先進の門を叩く。熱烈なる文藝の渴仰ありて然る乎。深奥なる思想の修養ありて然る乎。何ぞ然らむ、渠等の學問は口頭の學問なり渠等の趣味は耳聽の趣味也。渴仰の信念なく、鑑賞の學識なく、その腹笥に滿つる所は、先輩の製作を模擬襲踏して、自家の虚名を雑誌出版物の上に博せんとする俗情のみ。稚氣憐むべきが如きも、聊かの虚名を得れば、遽かに傲然大家を以て擬し、反つて先進

を詬罵し中傷し、排して己れ之れに代らむとす。忘恩背徳の心事は、少年の故を以て寛假し難きものある也。時に偶々慧心妙才の少年、道を愛して情に厚き諸子、わが戸を窺つて、我をして推奨激歎せしむる者あるも、渠等數多の誘惑に抗する能はずして、空しく引去るが如きは、嗤ふべし、何ぞ其器の小なるや。

父 母

如何なればふと亡き親は追憶ばるゝゆらぎ  
て往くよ野の名無し水  
在しける程よ、子と思せばこそその強意見も、あさましく慣れまつりては、有りのすさびに親憎しとさへ怨じ申しけむ。家道衰

ろへて、西四百里、薩摩、大隅、日向の端へ流離ひの憂旅にも父上の具し給ひしは末に生れし我と弟の二人なり。幼き者の悪戯ざかり喧嘩ざかりを、世の交らひ繁く御煩らひ多き中に御齡五十を越して、男手の慣れ給はぬわざや、寢起、食事、さては行水に抱いて入れるまでの世話賜はりける。我も弟も六歳より十歳へかけて、四書、五經、文選、史記、左傳、皆讀みあげて外史、十八史略は自身で讀めると二人が加治木の塾に誇りしも然る流離ひの中とて捨て給はぬ昔氣質の教育厳しく、荒木の机に冬も素足の行儀正させ、御聲朗かや、一日一度の句讀授け給ひて、物習ふ時は師弟の禮ぞと、始め終を一人一人に辭宜させ給ひし賜とや。小さき妹つれて京に残り給ひし母上よ、上京の富める町家の愛娘と生れて、上方者の常の如もあらず、人柄心

美しくしう、華美なる事を好み給ひて、人の上に情もろく、猶昔よかりし時の心ながらに萬づ振舞ひ給へば、父上とは次第に心違ふこと出でて、自から世を終り給ふまで睦むくこそ御在さざりけれ、京の便の九分までは、我上、弟の上案じ給ひて、こちらにては小學通ひに筒袖の着物着せ候こと流行り候、二人とも綿入は其に被遊度、修(弟の名)はもう何寸着るやうに相成り候や、などの其頃の御文、京へ歸りて後、後の後、弟も肩上とるやうに成りて、數多父上の反古の中よりぞ見出でし。げにあさましかりし哉我れ、十一の夏より御側はなれて、世に勞役して纔かに立つ身の、畿内、中國、東京、遠くは支那、朝鮮と彷徨ひぬれど、學は成らず事は破れて、徒らに放縱疎豪の狂名のみ多きぞ、高野川原の蓬の扉、さらでも露けき佗住の御袖に、

185 記 中 掌

幾度か此仲の子が後の秋をや歎かせ參らせけむ。せめては缺かさざりし年一度の歸省にも、ざりとて此いたづら者、何ばかりの御慰藉をか持て參りし。大江山の北の里なる代々大庄屋が家の次男に生れて、京へ學問修行の入費には、家の織子がわざの縮緬、馬に七駄十五駄積ませて上り給ひし人、本居宣長の學統ひき給ふものから、早う勤王の志ふかく、諸國の志士に交りて時に適へる畫策、世に顯れぬが多き中にも、正月二日伏見畷の戦ひ初りて、期しつとは云へ遽かの砲音なれば、薩州邸に軍用金の用意無し、小松帶刀、内田政風、西郷吉之助等が顔色如何にか動きし。知れる中の三氏が囁みを、引受けたりとのみに、當時の金にて十萬兩の箱堆かう、美事六日の朝までに揃へ給ひし人、征討鎮撫使の隨行仰せつかりて、加賀、越前、越後北と

へ北へ、勅使よりは五六日前に、拔身の鎗に早駕籠護らせて、勤王、佐幕、形勢不測の敵地に進み入り給ひし人、療病院の創立に、東山鑛泉の開業に、洋酒、洋薬、石油、西洋雜貨賣る會社に、逸早くも西洋の事情に通じて、急劇なる新事業の數々、公益を思し給ふ心と見識とは然る事ながら、時機にあらねば却つて物好よし山師よの譏り受けて、敗れては家邸も亡くし、田畑山林も亡くし、果は十萬に上る負債持給ひし人、わが心ばかりの手土産、好ませ給ふ品なれど、お氣に入るやと差出すに、氣の利いた土産かな、お前いつ喫み習うて此國分の舌加減が解かる、是が又わしらの口に合ふで有らうの鑑定かえらい、賞めて遣れど、耳少し聾ひ給ひし母上に大きな聲遊して、二人が老ひ衰へ給へる中の一日の笑顔、勿體なかりし、寂しかりし、御痛まし

く悲しかりし。此處は武藏野、沿ひ行く小川の何やら京の里行く心地するに、ふと今は世におはさぬ父上母上戀しく、我が奉養の道薄かりしに泣かれて、覺えず廣尾、目黒も過ぎぬ。音さらさら草野に長う、さるにても心無の水。

孔 德 里

韓山に秋かせ立つや太刀なでてわれおもふ  
こと無きにしもあらず

九月二十九日、わすれがたき日なり。雲低う武藏野に斷れ飛びて、肌寒き秋雨、朝より風を帯びたり。廂高き漢陽の客舎に、南山の松の葉ながめて、友と幾日を詫びけるにも似たる哉。總じて武藏野の秋の、風や、雨や、雲や、霧や、變幻の慌だしさ



に大陸の風あり、そゝる北漢の秋あらし、京畿七州を吹いて黄なる朝を忍ばしむ。九月二十九日、われには、思出長き日なり。

明治二十八年、いまだ三四年が程と思へるも、指をり數ふれば早七年の昔がたりに成りぬ。大院君幽閉せられ、朴泳孝逐はる。井上公使日本に去つて、王妃專制の時代は挽回せられたり。この時に當り、ウエーバー公使夫妻は、巧妙なる操縦の手に、東洋史上十九世紀末の女傑を簸弄して、半島の運命一に露國の勢力に依つて決せられむとす。危からずや。

日清戦争は何が爲に開かれしや。朝鮮の獨立扶植は美名なりき。而も馬關條約に由りて遼東を棄てたる日本は、今また朝鮮の保護者たる榮冠を棄て、半島の事、清國よりも更に憚惡なる第

二の毒手に委せむとす。男子生れて此轉移の世に際し、孤國衰殘の末路を目睹して、深く東亞の未來を憂ふる者、誰か刻下の形勢に憤らざる。曰く斷なる哉、斷なるかな、今日の處置、唯だ再び劍あるのみ。これ何人も期せずして同じく默契せる當時の感想なりき。

余や時に友槐園を助けて教育の職にあり、日本語をもて韓民の子弟を教へむことは我等が主張なり。此に至りて日本勢力の大頓挫は、朝鮮政府をして日語を侮蔑して露語を重視せしめたり。學部の保護金遽かに減少せられて、わが城内六箇所學堂を閉鎖し、わが五十餘員の教官を解職するに至りぬ。この目前の大打撃を受けたる我等、今は何の躊躇かある。決すらく、劍を以て抗せむと。

新來の公使は誰、觀樹將軍。將軍は東洋豪傑流の資、好矣、大事擧ぐべき也。

嗚呼忘れ難し、その年の九月二十九日、名を散策に假りて一人は馬、一人は輿、朝に領事館を出で、南大門を西南に去りしは誰々。この日閔黨の巡檢に由りて、警固さびしき孔德里の別墅に、大院君の長子親王李載冕の介書を持して、石坡先生が半日の詩話を聴かむことを申し入れたる二個のうら若き日本紳士あり。奥まりたる殿上の一室、酒酣にして侍童皆座を避く。對するは金冠道服の老親王、齡七十を超えて眉鬚銀よりも白きに、雙頬の紅、却つて美女の面に似たり。洋装の紳士は漢文に妙、紋附羽織の紳士は稍韓話に熟せり。筆話、口話、二人親王の膝に逼つて、低聲説く所は何ぞ。親王手を拱いて默聽するこ

と二時。覺えず長煙管を取り席を打つて云く、諾、諾。二人云ふ、再び訪ひまつらむは難し、再び訪ひまつらむ日は雲蒸龍變の日なり、深夜と云へども必ず起ち給はむや。親王破顔して云く、二公念を勞する勿れ、我れ難に處する七十餘度、人を殺すこと八百餘人、機に臨んで疑懼せむや。唯少しく慮かる所は、貴國の來使大抵小膽にして、當眼の事局に惑ひ、能く百年の計を爲す者なし、觀樹將軍果して二公の奇策を納るゝの器なるや否や。

閉居半載、忘るべからざる怨恨を抑へて、詩卷藥爐の間に懊惱せし此老雄は、此に端なくも眉わかき二説客の爲に真情を吐盡して、一言にして千金の諾を與へたり。更に侍童を呼んで三鞭酒を勧めしめ、愛妾某妙齡十八なるを出して、羞づるを強ひ

て二客に揖せしむ。辭し去るに臨み、階に送つて二客の手を握り、莞爾として警語を放つて云く、二公重ねて來らむ日、此老漢、必や李杜を凌ぐの佳作あらむ。

(以上明治三十四年作)

### 興來の時

聖の甕に神の封じの才ゆりて夕の歌の酒と

溢る、

友の如何にして詩を作ると云ふに、我は答へぬ。如何にしてども定め難し、六とせ八とせの前は即興に出來しこと多し。香を焚き刻を限りて友と共に作るに、わが詩拙けれども必ず先づ成りぬ。一夜百首などの戯れせしも其頃なり。近き四とせが程は、路のゆむ時、車のうへ、印刷所にありて校正する傍ら、器械の音

の騒しき中などに成るもの多し。靜なる夜を手焙かたへに置き、机に整座し、紙のべて作るは、わが昔より得せぬわざなり。幼きより頭痛みて寐られぬ質なれば、蒲團かづきて吟哦の中に夜の明けし例毎夜の如くなりしかど、然る癖いつの頃よりか無くなりけむ。近き頃は眞夜中よりも宵、宵よりも眞晝、眞晝よりも朝のかた、われに興來の時なり。題を課せられて作ること、久しく爲ねば厭はし。稠座の中に人々の我を酔ひ潰れしめて、さて意地悪く絹のべて、之に書けど、大きな筆握らせたれば、われ然る時にぞ人耻かしからぬ詩は需に應じて必ず成らむところ信ずれ。こは昔より今もなり。筆は悪きもよし、細き太き、禿びし、皆よし、紙は美しくしからでは頭痛む心地す。美しくしき紙、白きも五色なるも、其よき糸に綴ちて懐にして路を

行くに、早く其紙染めよと促す者春のかたに有りて、我は何時  
も心躍るやうに成りぬ。思はずあまたの詩は斯る時に成れど、  
家に歸りつきて、將た知る人の家に視かりて、懐の紙に書きつ  
くるに、早わすれたるもの過半なり。われは他人の書を讀むに、  
人に劣らず記憶よけれど、わが作りたる詩は、五分と經たぬ間  
に忘るゝが常なり。必ず作らむと思ひ構へて作れるに、詩の成  
れる例こそ知らぬ。さる時、詩らしきもの或は成るべし。詩ら  
しきものは終に詩に非ず、わが意を満たさむやうあるべきや、  
況して他人を喜ばしめむをや。詩は一に一を加へて二を得る數  
理の如きにあらねば、神來の興なくて作らむこと覺束なし。さ  
れば我れに斯かる事すら屢あり。偶ま歌はむとする面白き題目、  
さながら美しくしき卵の如く我が頭に宿れど、それを孵化すべき我

が空想の翼の熱もゆるやうなる能はざる時は、この天與の卵は  
私すべきにわらず、畏み謹みて守り立てなば、必ず大きな  
美しくしき鳥となりて翔らむに、今わが翼の準備足らずして、孵  
化せむ熱のちから脆薄なり、斯ては誤ちて不具の鳥を作りて、  
詩神の御旨に罪得るわざなり、如かず、此卵は再び神に取返さ  
れむとも、我は知らぬ振して、何時かは大きな空想の熱の準  
備出來たらむ時に、更に縁ありて然る卵の宿ること有らむを待  
たむには。斯くて後より思へば、惜しき詩題を看す看す逸し去  
りて、永久に永久に歸り來らぬぞ多き。されど我は強ひて感興  
の溢るゝ如きに觸れずして詩つくるは、詩人の大きな罪惡ぞ  
と思へり。我は詩の神に従はむ、詩の神に狎れまつらむことは  
怖ろし。友よ、あやしく我が仕へまつる詩の神は、人のいつく

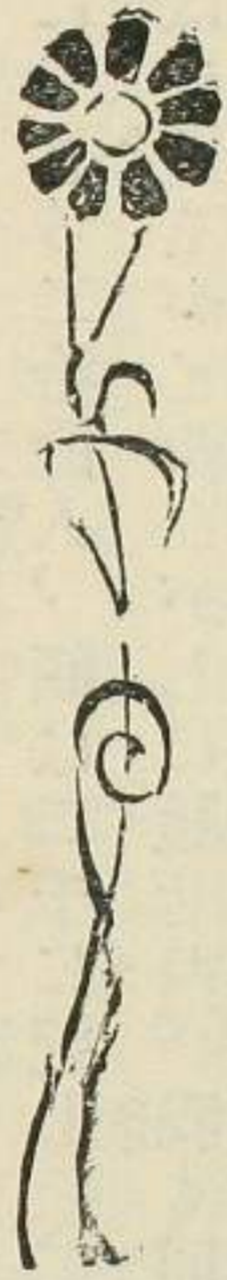
なるミューズと云ふらむ端嚴微妙の女體にあらず。人はまた翼  
 ある天童の群を説けど、我が詩の神は一人の荒男神なり。我は  
 今影のどとく其の神の御姿を思ひ泛べつ。おんたけ幾程かおは  
 すらむ、過ぎ給ふ時この人の國みな暗う成れば、召し給ふ鎧の  
 片袖にて、此處なる目の影は遮へ給ふと思し。おん顔もとより  
 高うて拜み難し。たい目を閉ちて想ふに、美しく優しきおん  
 容態ながら、敵なす神ありて、そを逐ひ退けむと激し給ふに、  
 憤怒のおん相に成り給へり。右手には金剛杖の如きを引提げ給  
 ふと覺ゆ。敵する神々を逐ひては、息一つが程に能く五萬里を  
 や馳せ給ふらむ。偶ま此國の上を過ぎ給ふに、必ずわれ一人の  
 名を呼び出で、是れ汝に遣らむ、わが道にて獲たるなれど、  
 わが持物には輕し、汝にこそと、左のおん手の贈り物われに投

げては、やがて風の如くに彼方に消え給ふ。忝けなしと受くる  
 に、その神の贈り物一様にあらず、或は手提の小さき籃に錦の  
 きぬしきて花もりたるあり、或は生血したゝりて半眼を見開き  
 たる異形の人の頭なることあり、或は名を知らぬ雪の如く白き  
 眞玉に刻みし、小さく美はしき伊太利ぶりの少女の裸像なるこ  
 とあり。われは是等さまざまの贈り物を、念ずとも無く念ずる  
 瞬間に、わが詩は成りぬるや、成らずや、さだかには語り難し。  
 友よ、譬へばこの帝釋天、毘沙門天の如き我が詩の神のおん上  
 も、今ふと君に向ひて初めて想ひ泛べたる御姿なり、されど又  
 早う十とせの前より、我が想ひ泛べぬし神のやうにも有り。斯  
 く語る内にもその御姿は早や幾十萬里をか過ぎ給ひけむ、くち  
 をし、追ひすがりて思ひわきまへむやう無きぞ詩の興なる。友

はまた問ひぬ、詩を作るは樂しきかど。甚だ荒涼なる問なり。されど試みに答へむ。興來の時、功利の念なし、彼我の見なし、既に如上の執着を絶しつ、いかで何の證悟かあらむ。人この境に至りて大きな怡樂ありと云ふも、自ら至らざれば思議し難し。但だ姑らく譬へて萬一を模索せしめむには、或は美酒に酔へるが如しと云はむ。醒めて後、索然として甚ださびしきを覺えぬ。斯かる時に、我はわが才の終りを疑ひて、涙の落ちぬるをさへ禁じ難かり。友よ、いかにいま此に空耗けたる此の我れを救ひ給へ。さるにてもをかしき事こそ多けれ、われに興來の時なり。ふと一詩を持念してあるに、人中を過ぎて雜沓を知らず、京橋より萬世橋へ、神田より駒込へ、顧みれば、何時が程となく師の門に到りつきぬ。我をわすれし身の、車に人に、行きあ

たらざりしも奇なり。玄海灘、長直路、仁川へ四日の船路を、人は冬の風濤の荒かりしを云へど、我の船暈は拙き四行五節一篇の詩に酔ひけるなり。京城にありける二十九年の師走、債鬼の我等が寓居にせまる二拾餘人、額は二千に近し。二人の友は我ために其償はむ道もがと西ひがしに馳せぬ。我も同じく馳すべきに、二十九日の朝より偶ま温突に打俯して筆とり初めぬ。ふた夜を徹して睡らざりき。二人の友のわが名よびて、君安んせよと肩叩くに、頭もたぐれば、鬼は皆閔氏のおくりものにて今ぞやらひ果てつる。君は猶筆をついけよ。我等は餘れる二百金もて年祝の用意をせむ。かく云ひて出で行くに、われは輕くうなづきたるまゝ、猶筆を噛みぬ。手づゝに長き詩の漸く成りぬと思ふ時、めしつかへる朝鮮の童子の、口すゝぎ給へ、ふたり

の君きみの料理れうりたまへる雑煮ざふにも出来ぬできと云ふ、いつがほとにか元旦ぐわんたんを迎へぬるなり。外房サランの室まを見れば、あなのみじくも爲しけるよ、  
 大きな牛うしの半身かたみを垂木たるきよりくるがねの鐵鎖くさりもて釣つるしたり。友  
 は早おほきなるさかづきさしつけて、鐵幹てつかんが壽じゆをぞよばはりけ  
 る。



埋 木

一 金絲雀の窓

移り住み候は山茶花さやんか多おほき御邸おやしきの御門内ごもんない、左へ敷石しきいしづたひに厩うまやの前まへを通りて、大きな赤犬あかいぬの能くねてゐる門もんより見通みとおしの玄關げんくわんは、家扶かふなる人の住すまひ、その隣となりの塀へいに沿そひし車井戸くるまのひ一つ隔へだてにて、南天なんてん幾いくかぶか蘇鐵そてつを圍かこみし植込うゑこみを前まへに、御寺おてらのやうなる建て方かたの玄關げんくわんは私の宅たくに候。本郷まへ、牛込うしご、前まへの區くも今度こんどの所ところも坂多さかおほく候に、弟自轉車てんしやは夏なつより嫌きらひに成なりて、叔父おぢが土産みやげの支那馬計しなばかりいぢめ申候。雪ゆきが降ふるやうに成ならば澁谷しぶやの先生せんせいを勸すすめて鴻こうの臺たいへ遠乗とほのりせむ、今から私わたしに御約束おやくそくをして頂たまいてと、こ  
 れは彼國かのくににて馬うまに召めしては漢江かんかうとやらを氷こほりに御渡おわたりなれし御話おはなし

を致せし、それを覚えて居り候こと、をかしく候。先生は御前のやうな駄々兒には、一所に御遊びをこるか、物一つ云うては下さらぬと申し候へば、あの眼を餘計に角だて、なにを姉さん、先生も百人すぐれたやんちやだ相だ、四年級の者なんか皆が先生を悪く申す由など、淺ましきこと幼き心に何とも知らず申し候に、私あわて、叱りつけて怖い目をして見せ候へば、先生は姉さんの御言ひの通りの方なれど、四年級の者がさう云ふからとて泣き出で候に、私も思はず弟の膝へ涙おとし申し候。

團子坂にてすれちがひ見まゐらせし御二人様、かの日は無聲會への其御歸り掛におはしける由、國元より上りしみよりの醫師夫婦ともなひ居り候て、東京には久しき私、はじめて菊細工に

眉をひそめなぞ致す日に候ひしかば、あのやうに能くは御挨拶も申上げざりし事お赦し被遊たく候。歸りて母に申し候へば、『母の文』の御作者、お前など御そばへも寄られぬおやさしき方なるべし、見まつりたかりしと悔み給ひ候ゆゑ、御ぐしのさまきぬの御好みなど、さんざんにおなつかしきこと物語り候て、されば日本の婦人の早く老込み給ふは御悪ろし、少しの風が立たばとて上野と淺草がほど、今朝あれ程お勧め致せしものをとまた例の母に嫌らはれ候ことを申し候。

いづぞや申上げし佛文を能く讀み候學士、ブラジルより和蘭陀へ轉任せし由申しまゐり候。リオンの織物の見本かずかず彼人より父まで送り呉れ候なかに、御話の詩集の表紙にと思ひより候よききぬ、近き内に御手許へ持たせまゐらすべく候。外に何



と申す織物にや、草色の目覺むるやうなるに、白き白き浮摸様は、美しくしき少女はらからが牛の乳しぼり居る圖にて、その和らぎたる牛のまなざし何とも申されず氣に入り候。これには妹の参り候學校の教師の君に、そのよき御手にて、あなた様の『紫』のなかの御歌いくつか染めて頂かばやと思ひをり候。今すこし前、土曜日とてよそのも参り居り候書生部屋に、今日は珍しく俳句論もち上り候て、宅の二人何れも高等學校へ参り候は碧梧桐様びいき、赤坂よりの大學生は虚子様びいき、神田の法學生は私よくは存せぬ竹冷様がたと分れて、果ては私に仲裁せよとは怖ろしかりし事に候。母が代りて出で、あの子はふだん鳴雪様がすきと申候へば、それは大變な仲裁と皆々どつと大笑ひ致し候に、省よりの父あまりの噪ぎと玄關にて車より

小言申され候。

俳句と申し候へば何時ぞやの御話、あのやうのものを詩だと思ひをる内は此國の韻文は振はずと、其時は突飛の御議論と承り候こと、此頃よく分り候て、思へば日本派とて二十五六年度の頃のめざましき御意氣込は夢にも見がたし、今は一流と申さるゝ君達が『夕顔の實をふくべ』とは昔かなに力なき眉よせ合ひて時つひやし給ふ程に候へば、革新とは纔に天明の句を明治に披露遊ばされしとのみの意味におはすべく、小説、新体詩、短歌などが、彼國の進み居り候藝術の心、おもかげを傳へて、土臺から新しき世紀の創造に生れ出で候とは事ははり申し候。子規様明治に御生れ遊ばせしゆゑにと申上ぐべく、明治が子規様を生み申し候ゆゑにとは申しがたくや。このこと楓の君へ文し

て申上げ候なかに、今の最も進みたる人様の小説、新体詩、短歌の上に、俳句にて今も縮、ところてん、ふるふき、抽味噌の題を嬉しがり候と似たるやうの事おはし候やと申し候へば、御人のわろき彼君、さればさる御馳走頂き候うへに何新聞の懸賞までと申すやうの結構なる御饗應は流石に俳諧の席なればこそと、御返しに文に書き流し給ひ候。猶いつぞやの其節、短歌とても唯だ姑らくを斯ばかりの即興、これを詩ぞとは東の東の小き小人島にてまだ夜が明けぬ程に云ふ寢言、何派など、大人氣なき事威張る人のあるも今二三年が内なり、顔を洗ひて見かはさば可笑しかるべしと仰せられしこと、餘りの御放言に私おそろしと耳おさへて打慄き候ひしが、それも此頃何やら抑へし手すこしづゝゆるめて、その大きな御聲のはしばし聽いて見ば

やと思ひ成り候。まこと然におはすべし。おはし候べし。今のところ、此國の作者の君達とても、そのおん力もて纔にこの短歌に入れ候だけの思想を得るか得ぬかに窮し給ひ、讀者も漸う臃氣なる擦り眼に新しき短歌の趣を味はれ候か候はぬにまどひ候はどのしばらくに候へば、あなた様のその御考も、まだ人まよはせを御氣づかひ成被候て公には遊ばさぬに候べけれど、つまりは新体詩、新体詩、長きかたちの詩ならではと、愚かに片意地なりし私、すこしづゝ分りだし申し候。うれしく存じ候。お取寄せ被下候朝鮮服、女服改良の沙汰多かりし頃、それにかふれ候やうに云ひはやさされ候はんも厭はしく、久しく仕舞はせおき候を、時にあへる冬服とりださせて見候に、とき色の被衣紅梅の襲、草色の上衣、白の裳、銀に龍のかたちへ孔雀石いれ

し釵、珊瑚の房長く蒲色の高麗緞子に鳳凰の繡ある冠、女羊の毛皮に藤紫の支那綸子の表つけたる腕袋、かやうにまばゆき品いかにして私などの身に添ひ候べき。半古様の改良服つけ給ひし「讀賣」の美き君は、亡き薄氷の君の妹君におはしける由、あのやうの雪の中の紅梅のやうなるさにはおはしてこそ、此きぬ召して薄月の廊などに小童に燭先きにさせて行きあひ給ひ候はば、すきびとならでも羞しげの被衣のなか、覗かぬは男君の思出飽き給はぬ事に候べし。私ただく床に飾りて眺めて喜び居り候。染井より持てまゐりし支那水仙の鉢、此きぬのもとに据ゑさせ候に善き配合におはし候。

行く春、この春より車夫を乳母をお松を本郷の田中屋、神田の東京堂へ遣し候こと、百度と申すも大相とお聞き遊すべく候へ

ども、まことは百五六十度にも上り候べくや、泣菫様私の心を千々に御させ被成候彼の集、あなた様より三日おくれて手に致し候こと何やら心願の報い無きやうにて口惜しく存じ候。御評は次の「明星」にお載せ被下候よし、其も待ちかねをり候。藤村様の御集が分らずと申せば御叱り被成、泣菫様の御作が六かしと申せば御叱り被成、私この三年を新体詩に就て如何程修業致せしと思召し被成候や、嫌ひなりし八雲にも私これ程の氣は遣はず候ひし。楓の君への御文に「行く春」の詩に笑み開く人の多くなれるは心より嬉しと仰せ給ひ候よし、あなた様お友達におはし候へば御嬉しさ推し計り参らせ候。なにとぞ其人數のはしへ此處の賤のをとめ一人をも御加へ被下候は、一冊の此集紫の襟ふかく秘め候て、我世はさらば埋れ木の、長く花開き花ち

る人の榮華にまなこ閉ぢ申すべく候。  
 又の松の内は京、大坂のおん旅に、毬の手、羽子の袂、謠も古  
 代なるを聞こしめし給はむとや。私は父が好みの箱根は毎年  
 同じやうなる嬉しからぬ事に候。御歸りにはまさ子様やす子様  
 はな子様、新しく御名承り候みつ子様、かたがたの御寫眞是  
 非にと勝手なる御願ひ御許し遊ばされたく候。私の寫眼帖に珍  
 しく一人の男君はさむことを自分から許し申し候。これは  
 御驚き遊ばし候なるべし。それを如何なる君と思し給ひ候や。  
 伯林の従弟より先月の便に數多のメルヘンと共に送りくれ候ニ  
 イチエの君の肖像におはし候。師走の七日午後二つの金絲雀の  
 籠ひなたの窓に出しやり候てのち、その窓のもとにて長々と例  
 の心のまゝ筆のまゝ、おん眼こちたく御覽すべく候かな。

申しわすれ候、先月の『半面』と申す雑誌に見え候止水先生の銀  
 杏の樹の色刷の御畫、秋の物とは覺えず光蒸すやうに候。私わ  
 のやうの繪を御堂のやうなる大きな壁一面に書き候部屋に居た  
 くと思ひ候。

### (二) 木村鷹太郎様

たい埋木と申し候名なし市女、いづこの者とも御問ひ遊ばすな  
 どは、さて勝手におはし候へど、木村鷹太郎様、あなた様の御  
 人柄も御としも、御脊のヌラリとして肩の揚れるに、何時もの  
 御羽織御袴すがたの能く御似合なされ候ことも、又御すまひの  
 御間取も、奥様ふだん誰人の小説を御好き被成候かと申す事ま  
 でも心得をり候女一人、遠らぬ都の内に在りと御聞き被成候

はい、昔ならば譬持の君御用心と申す所、あなた様御著しの日  
 本主義、東洋倫理學史、鳴潮餘沫、みな名ばかりにて手に致せ  
 し事なき私、この私が如何なれば天下の穩密の様にあなた様の  
 上を心得をり候こと、いささか御氣味の悪ろき御不審おはす  
 べし。その御不審は私三年の内に清盛このかたの大熱煩ひ候て  
 芝浦に出養生いたし、ポンプにて東京灣の潮水を引きあげ、近  
 き十町が程を浸して退熱させむと致し候節、あなた様の濱町も  
 御迷惑ながら御立退被下候町筋に候へば、その節あなた様何も  
 私の身の上に御合點まゐり、頻りに私の爲めに神名帳に有る限  
 の日本の神様の御名を呼上げて御禱り下され候事と、實は窃に  
 頼みに思ひまゐらせ居り候。禱ると申すは神様を自由、勝手、  
 我儘に使ふことに候へば、あなた様御好きの積極的とやらにお

はし候。男らしくもなき死にぎはの無神無靈魂論など、つまり  
 は戦ひに疲れ候弱蟲の負け惜みのよまい言、よく申せば芝居で  
 致す「見え」にて、新聞の劇通様には褒められ候へども、一篇の  
 脚本の骨子には此「見え」何の關係も無し、幕が落ち候まへ唯だ  
 斯様な眼つき手つきを致し候て未練らしう引込み候ものと存じ  
 候。それに其「見え」が當節大當りと申すこと情けなくはおはさ  
 ず候や。思へば久しき間、哲學、倫理學、教育學、言語學、公  
 徳問題、國語改良、歴史編纂、教員養成、筋書ばかり事々しく  
 候て、舞臺の所作の何一つ振はぬに飽き々々致し居り候折柄に  
 候へば、一つは幕仕舞を歡び候心より、愚かしき「見え」に大向  
 ばかりか見物總立にヤンヤと申し候わけにても候べし。さて  
 博士の大家のと名題役者が此始末に候へば、私ども母が情

けに三井仕立、遠くは巴里にて仕立て候ものに數々の綺羅は盡し居ながら、馬車ゆたかに何れの芝居へか若き人の春を競ひ候はむ、もう此國に生れ候が不運の初と眼を閉ぢ候やうの折に候へど、劇は何も巴里と限らむこと口惜しく、男ならば大學座、文部座が程の二つや三つ如何やうにも建て直して、鈍帳者にあしらはれ居り候今の詩人、美術家を、方はしから千兩取に御させ申さむものをなど涙にくれ申し候。大切の事打忘れて思はず筆の走りに、まだ朝ゆふ鏡に向ひ候身の、人はづかしきはしたなき齒の根お見せ申し候かな、淺ましく存じ參らせ候。さてあなた様この度「新天地」と申す荒地を御開き被可成よし、これもまだ内務省へ御届遊ばさぬ以前に電話が齎し申し候。男の中の男と申す者今は掃く程亞米利加よりカラー高うして歸り參り、

此國に留まり候者は神代杉に繻珍の鼻緒ゆるく大道をウロツキ歩るき候世に、男の外の男と申す君は私失禮ながらあなた様御一人と、此四年が間、母にも申さず、心に秘めて御慕ひ申し候程に候へば、あなた様の此度の御仕事は私、たい人様の上どのみは存せられず、かたへの君嫉み給はずば慣れぬ襷掛の御世話も申上度くとも、胸躍り心躍り、思ひつめ思ひつめ參らせ候。及ばぬ事とあきらめよとは今の山なす翻譯の御本に御戒め有之候へども、私いつも伯林の甥より取寄せ候あちらの詞そのまゝの御本を信じ候身の、この思の切なさ何としてあなただ様に申さで在られ候べき。あなた様は英文を御讀み被成候へども、ゲイテとパイロンとによりて味ひ候「なさけ」には獨逸、英吉利士の相違おはすまじく、それを其儘あなた様日本語に御譯し相成候

はい、少し遠き世の業平の『涙』乃至は今の世に木村鷹太郎と申す方の『なすけ』も、さらしく變る所おはすまじく、お變り被成まじくと存じ候。私ふしつけながら斯様に思ひ候。『新天地』には定めて詩の門、美術の門、政治の門、教育の門、哲學の門、この五つの門を御建て被成候べし。併しながら階を登り廊を廻り候はどに、百千の花の香、酒の香、奇しき光まばゆく蒸すやうなる廣き々々殿堂は必ずあなた様『なすけ』の殿堂と御名づけ被成候なるべく、『新天地』の又の名を世に稱へて『戀の御園』と申し候時節有之候は、あなた様年來の御宿願御遂げ被成候日に候べし。私が清盛このかたの大熱、三年が後に煩ひ候と申すも、あなた様さやうの殿堂に御引取下され保養御許し被成候はば、東京灣の潮水にも及ばぬ事におはし候。これは翻譯の御手

數入らぬ日本語、あなた様すぐおうなづき可被遊候。色々と申上たく候を生憎の齧齒に候かな。師走の四日朝、筆にはかに止め申し候。

### (三) 春待つ人

これが春待つ私の部屋どの今、何やらあなた様に御見せ申したきやう、御見せ申さば何と仰せらるべき。この癖を能く知ろしめすあなた様、をさなげなる人やと唯お笑ひもなさらで、直し給へ、直さねばと尾張の叔父のやうなる御顔遊ばすべきか。この三日が内にお松に調へさせ候は、床の上に羽子、羽子板、手毬の大き小さき幾どほりも、久月ものにおはし候。今柳の餅花身じろきもならぬ程部屋一ぱいなるは、大坂生れのお器用に

こしらへ申し候。京人形、私七つの年より傍へはなさぬ目のくつきりせし可愛の君の春着には、元祿の大奥の姫君が召しける由の形に習ひ候て、藤紫の緞子の三枚がさね、帯も古金襴の細きを誂らへてこしらへ候に、朱の高き小さき下駄、日和のど雨のど、それに柄は青貝ずりの小ひさな朱傘、梨地の蒔繪に白銀の定紋うたせし輿乗物など、これは夏より誂へ置き候ひし。その君を違ひ棚に居させて、私は緑の絨氈の上、今しきりとお松相手に梅の鉢、水仙の鉢、寒菊の瓶ならべ替へて、額の繪、明星畫譜の中より三つほど、何れをと擇びわづらひ居候處へ、御手紙頂きまゐらせ候。この部屋の上、まこと御見せ申さば、あなた様の事におはせば、御嬉しげの御笑顔に、必ずその餅花ひと枝かたげて往なむと興がり給ふべしと、お松先づ申し候。

『片袖』の第貳集拜しまゐらせ候。北を望むの一篇、十年まへならば國賊よばはりして、白星様、學生多き本郷の御夜あるき、御あぶなき事に候べし。そのやうの氣ちがひはおはさず成り候へども、この膽大なる御作を、まだ露骨の何のと開けぬ人は少からず候よな。『日本國歌』に人が氣附かずと思して、『ん』と撥ね候韻を三句目毎に踏んで、句の中にも力めて此ひきを數多用ゐて、一篇の諧調ひそかに御巧み被成し御仕打、にくい事におはし候。

『行く春』の評いかに見しぞどの御手紙、私お答いたすに近頃威勢よきことにおはし候。今の世その人おはさねば、韻文の評には一せつ眼をつむりぬ候私、昧者みな顔のらに、は、けて目ざめ候こゝの一人の嬉し心地、とび立つやうとは時の心地に候ひ



き。たゞ私の御恨みに存じ候は、如何なれば上田先生の御評を御洩し被遊候ひしや。紙面の御都合ならば外にせむやうもおはし給ひけむを、私くちをしく候。慎重なるべき用意のなかに猫は虎の小姓かなど、筆いさゝかすべり給ひしも氣に成り申し候。他日にとは心もどなきあなた様の御筆の内に、私必ず斯やうなることを御書き洩しはし給はぬ事と思ひ居りしに候。それ少し御耳に入れ候、當りをり候はば御褒美には傍の君の御寫眞たまはりたく候。『遣憤』九首、『あゝ杜國』十篇の二つは句をばなし見候處に捨てがたきものおはせど、全体はわざとらしく作者の君の適役にてはおはさぬやう。形を七五に遊ばせしが故にの氣魄の乏しさは『牧笛』に『巖頭沈吟』、『石彫獅子の賦』の三つにてはおはさず候や。『夕暮海邊に立ちて』の二節目『楫をと

り』より『音を聞きつつ』まで詩の調子ふと亂れて、散文など、の口わるきこと申す人おはすべし。林外様仰せのやう、この集の二つの傑作の一つ『夕の歌』に、前の行に『小姓』とありて直ぐ『繼子』とつゞき候ては、一つの星の上に矛盾いたし候二つの喩へと惑はれ申し候。『低唱』の君のため息長きを、何なれば『色くれなるど成るまでも』と遽かに筆さしおき給ひけむ。『さまよひ』のあまき口づけも『堪へずば』と申す詞に二つのころおはせば味ふ人の心さだまりかね候。結びの『さましぞ』の『ぞ』は『そ』とありし活版の誤りにおはし候べし。『沙彌が歌』の『香爐の灰ひえしまゝ』の句に、ふと露伴様の韻文『僧の戀』の『花にきのふの水かれて、香爐の灰も冷えしまゝ』がしのばれ、結びの『春戀ふ石』に同じく露伴様の『新浦島』の結末が思ひ出されて

候。『君も見よとうすもの』は、春のきぬとしていかかはしく『破甕の賦』の御しまひは矢張もとの『暮る、日をも忘じたり』を私うれしと思ひ候。集の中にて第一の手づゝの句、泣菫様に悲しく候は、——はしたなく候かな、さ云へ善きことは人様みな仰せられ候、私ひそかにあなた様まで御尋ね致し候は——『野に立ちて』の『思出がたりするばかり、胸なぐさむはあらじかし』また『夏珍しき朝かげに、働かむかな弱からぬ身ぞ』とおはすと、『石彫獅子の賦』の『石工いみじき心得よ』の一句にては候はずや。

これは晶子様へ申あげ候、そのおぐしに御結びかへ遊ばせしよし、とく見まゐらせたく候かな。うしろになり前になり、御笑み掩ひ給はぬ母君の、西二百里、遠くおはすがくちをしく候。

冬がれの澁谷川、けふが日はみぞれもさそひ候べきに、櫛そぎて御撫で遊ばさむには、十日が後の三本樹の御宿、前垂青きおちよば鬚の子がまるる京の若水、夢いくつ見ると御待遠に入らせらるべく候。私さう承り候とき、遠きやうのやがては來む桃柳時、成る事に候は、おなじおぐしの山川様と御ふたりの御供私が致して、この世いささか興ある三人女、誰は、いからぬ氣さんじの旅に、嵯峨にひと夜、宇治にひと夜、奈良、長谷にも宿りて、水のおばしま、里の御堂、御出來になる御ふたりの御口ずさみ、皆はしから私が反古には御させ申さず、十日の御暇をつ、二十日、ひと月、熊野の湯にひまどりて、歸りて御叱り遊ばさば、科はすべて私、おわびには私一世一代の秘藏の歌ひと巻、かねてはあなた様にも見せじの歌ひと巻、観念して

明星に載せて頂くべくなど、何かにつけて斯かる事おもひつゝ  
けられ申し候。

明星の拾六號を讀み候て涙おもはずわき候は、孤蝶様の御筆の  
なか、箱根は塔の澤の四とせ五とせ、人は皆花を逐ひて歸り候  
に、山は唯青く雲は唯靜かなるを眺め暮す一人、孤蝶様、まこ  
と世の底のにがき味よく知るしめし候君と、私お筆のなさけに  
泣き申し候。

あなた様の御聲を野火の遠火と、たしかに晶子様うけたまはり  
申し候。但だ興作が附けしとは千古のあやまり、私たゞさでは  
ならず、ひと年の夏、名は知らず、和泉の人とのみ、にくらし  
うも附けしに候。

十二月二十日、弟の馬風ひき候とて、臺所の騒ぎ大變に候ふ日

姉は取みだし候部屋にて。

(四) みじか夜

この間まゐらせし使の書生を何と思召し候や。三月の初新瀉の  
税關の者添書して、父をたよりて上りこし人、佐渡の赤泊と申  
す地の生れの由、法律修業の志と申し候へど、一向さやうの書  
物は手にもつけず、又しては私の部屋より色々のもの持ち出で  
候て、玄關の二人が試験前の邪魔を致し、鏡花が女仙後記の種  
本など、六つかしき上海版のものまで高らかに讀みあげ候。父  
はその漢書の才を讀め讀め致し候へど、まゐりし時持參の四季  
の衣類の三行李、いつの程にか半を飲み明けて、もとより性質  
はぬすみ酒、いさゝか色にも出でぬに心づかれず候。圖書館へ

まゐるとは父への手前ばかり、たまさか参り候日の土産は穂積様江木様の御名には候はで、藝文の初號に鷗外先生お譯しの『山びこ』、わかき學士の君達にも勝りて熱情の筆と目を圓く致し、その外の日は、本郷牛込の下宿に同じやうの友達も多く候にや、蕎麥屋の徳利いく本か倒して、文士の人物評、新刊評、プレラフエライトが何なぞ怪しき美術評まで、言ひたきことの様々互に言ひて、果ては空さし蒸籠なげて物争ひに別れ候ことさへおはすよし。年は二十七と申し候に、彼の色ぐるき醜男の太りやう、大きな聲に田舎辯の遠慮知らず、十八九の少年相手に物争ひの柄にもおはすまじきを、一廉の功名のやうに歸りて私にまで話して聴かせ候。かゝる締り無き男のゆくすゑ如何やうに成る事かと、私うはべには強く冷かに致せ、いく度か

心に案じ遣り居り候て、それと無く父にも申し候へば、例の氣象の父、男は三十の年こえて必ず自ら目の覺むるもの、何事も其後なり、況して國には繼母と伯父が後見に田畑も有る身、歸らば一生の糊口に屈托も無し、捨て、置けど大やうに申され候。私いまは其氣になり候て、彼の男の爲たい方題のことさせて眺め居り候に、日々の話に面白きことも、また眉ひそむることも數多おはし候。先の月二十九日の日曜にも、私が弟と阿松相手に大塚夫人の愛でたきゴルキイの御譯讀み聞かせ居り候部屋へ何時に無く藍色の新しい脊廣きて、落ち着きて行儀よく辭儀致し候に、椅子あたへて、太相今日は眞面目なこと、申し候へば折入つて御願ひが有ると申し候。それも聞きまじよなれど、お前内を二日も出て、無斷で何處への寐とまり、其の脊廣は何時の

間に拵へてと、疊みかけて問ひ詰め仔細を聞き候へば、近頃おもしろき事の行はれ候かな、女學生の君達の中に、異性交際とは誰が云ひ初めけむ口惜しく風情殺ぐ名を附けて、赤門、早稲田さては、神田の法學生にまで、聊かのゆかり求めて交り給へば、彼方からも之を女友と名づけて、女友の七八人も持ち候へば、運動部の撰手よりも幅が利き候ことの由、學生の君達ばかりならで、若き小説家の中にも、某の君の宅などには、皇月の夜の雨夜語に思はず時を更かし、二人三人蚊帳なき次の間に袴ながら轉び寢して、朝おそく其處より校に上る清紫の君々もおはす由、さては此無骨男も何處の君の則光ぞと可笑しく、脊廣の出來し動機も何も分りしと申し候へば、何を怪しからぬこと、御願ひは其處なり、我等は固より覺悟のひとり兒、自らの着類

を自らの袖たゝみ、わが附けた皺を何か苦にせむ、この世に人の手借らむ望みなけれど、年輩と云ふに撰ばれては少き者の世話方、女友交渉委員とは似つかぬ名と思さすや。一昨日より昨日今朝へ鶴巻町の下宿に少き友相手の激論、諸君は女子大學などの其れを女と思ふか、紡績の工女とて彼の様なる粗末なる衣は耻ぢむ、それに眼鏡かけし眼つきの怖く、唇の厚く鄙しきは人見ずば道に立ち喰ひもすべき柄なり、肩いからして横柄なる歩みふり、壯士節の讀賣か、救世軍の士官か、腕まくりせぬをまだしもと見るに、すれ違ひざまの香水は、黄いろき野百合に斯かる香のものありて、人の胸を悪くどすなる、第一美しくとならずも満足に女の相をなへたる者の有りや、あの様なる際を女友の何のど、讀書せし男の耻を思へど、甚く言ひ劣せしど

申すに、私そのはなしついで其話きが氣に入りて、お前まへいしくも言いひたれ、其れから如何どうしてと、話はなしに合あひの手投てなげて調子てうしづけ候へば、私の顔かほを氣味きみわるく凝然じつと眺ながめ候て、一寸御嬢様ちよつとおじやうさまお尋ね致たづしまするが、従前じゆうぜんから男女交際かうさいについて、御嬢様おじやうさまの御意見ごいけんは如何どうあらせられと申し候。これは六つかしきこと、わたしふせいに何なんの意見いけんなどの有あるべきや、さ云へ男女交際なんによかうさいは大だいの好きすき、その異性交際いせいかうさいとやらを唱へ給ひて、ひそかに美貌術びぼうじゆつなどの書しよひもとき給ふ方々かたの上は知らねど、わたしは願ねがひは公侯伯くわうはくの爵しやくもつ家いへ、さては其れにふさふ程ほどの由緒ゆいしよある富家ふかの姫達ひめたち、必ず月つきに一度は主人あるじとなりて、拜借はいしやくの何れかの離宮りきゆうに、衣きぬの好みこのみ、かざしの花はなの撰えらみ、さまざまに美よさを打飾うちかざり、當時ごときの詩人しじん、畫師えし、博士はくし、學士がくし、伶人れいじん、女優じゆうの粹すいを招せうじ集つひへて、堂どうに餘あまるは花はなの香か、衣きぬの香か、よき煙たば

草こあまき酒さけのにはひ、樂がくの音ね、舞踏ぶたふのぞめき、拍手はくしゆのおと。よき集しういだ出だせし詩人しじん、發明はつめいある博士はくしには、このうたげのなかの女王ぢやうわうと仰おほがる、姫ひめの手てづから、こがねしるがねの花環はなわかづくるを世よに一いちの譽ほまれとせむ。なにがし伯はくの二にの姫ひめに、若わかき學士がくしの思おもひ染そみしも、何時いつの月つきの會くわいよりなほ噂うはさせむをかしからじや。思おもはず斯かかる出ですぎしこと聞きかせ候へば、この男をとこ大おほきなる手に、瓶かめの白百合しろゆりの蕊すめこぼし候までに卓しよくた叩たたきて嬉うれしがり、そのやうなる姫達ひめたちの今いまの貴族きしやくにおはすにやと申し候ゆゑ、お前まへそれは口くちが過すぎやうと例れいのむか腹はらたて、申ませしが、すぐきに氣きが附つき、こゝにわたしがあるとも申し兼ね、さればなり、女ぢよしは女子大學だいがくに限かぎらぬことお前まへも知しりぬ、學校がくかうは麴町ながたてうの永田町ながたてうにも有あり、きぬ着きるすべ琴こととるすべ知しる女めの、なほか百人ひゃくにん二百人にひゃくにん今の華族くわしやくと紳商しんしやうの

家に養はれざるべき。たゞわたしがかうござりせしは、今の詩人  
 畫師、博士、學士の君達なり。若うして君達、なになれば然し  
 も賢うは生れ給へる。内には鬚まろく結はせて、婢女のすると  
 尺たがはぬ前掛させ、臺所に座らすべきひとりの人持ち給ひ、  
 自から外に出で給へば、帳場の車はさびしき教授服きたる主人  
 の君を本郷牛込の二區に運びぬ。聲ちさうして露骨に云へば、  
 今のわかき君達には、必ずおはすべき青春の戀の血持ち給はず  
 そはさる高き姫君の門ならで、わがこの邸にすら轅とゞめ給ふ  
 君今日が日までおはさぬにても知るべくや、賢さは及ぶべから  
 ずと笑ひ聞かせ候に、男、頭かゝへて玄關に退き候。次の日お  
 松より聞き候へば、私への願とは、私を鳩山夫人の格にて起し  
 妹のまゐる校に女友をひきあはせ呉れど、鶴巻町のその日の議

決を、若き人達に代りて頼みたかりしも、嬢様の彼の見暮に怖  
 ぢて申さで止みしと申し候由、皆まで聞かず私耳をふさぎて候。  
 その日よりこの書生、ふと顔見るも厭に相成り候を、只今あな  
 た様の御手紙のはし、この間お遣しの山木と云ふ男、第一肥え  
 太りし不恰好が氣に入り候、夏の盛りに今一度お寄越し下され  
 たく、腹ばひに長う成らせて西瓜くはせて眺めて見たしどの仰  
 せは、然も御覽じけむと頷かれ候へど、この男の座談のうち、  
 女は心に進まぬゑにしなぞ、涙もこぼし母にもむづかれど、父  
 がこはき顔の前に無理は通らず、べそかきし顔ふり袖に掩ひて  
 厭々行けば、厭々もひと夜のこと、かぶり振りて島田惜みし子  
 が、もう三日目には丸髻の形えらぶやうに成りて、世の中それ  
 なりけりに子孫繁昌と申し候は、物知りし人の詞のやうに耳に

こは千駄ヶ谷なる椎野陸軍中佐が邸の春のひと日ぞかし。  
 大きな母屋は二階だてなり。松・樅・楓・櫻の木立てもれる築  
 山のしたは、池にやあらむ水の音して、地は一段あなたに低う  
 なれる末に、青き芝生の庭あらはれて、遠く其の母屋の座敷は  
 見透かし眺めらる。こなたの離亭は段音の茶室づくり、六疊と  
 四疊半のふた座敷日あたりよく、後ろは水屋になりて、母屋よ  
 り石敷かれし道づたひの入口はそこに隣りぬ。外は麥あをく  
 ど浪うちて、盆石のやうなる富士を上に見望む枳殻垣と座敷との  
 あひだ十坪がほどの庭は、物古りし紅梅十株ばかり目もあやに  
 咲き亂れたり。

## 蝶ものがたり

残り候とは、あなた様、さやうのこと彼の不骨物の口よりまこと  
 とに申上げ候や、おほかた國にて伯父などよりの請賣に候べし。  
 交渉委員とは此兩三日馬部屋の喜助までが申す緋名、ますく  
 虫のすかぬ男に相成り候。





六疊の間には、母屋の娘の九つなる、前髪ふさ〜とつやゝかに、お下に結ひて、淡紅色のリボンむすびし、ふくら頬の白く、まろき目の黒眼がちなるをどめをあるじに、近きとなりのをどめ達五人、衣や帯や、なかにはませたる桃割のかけものや、とり〜ゝゝならび寄りたるまばゆさ、家々の厨子なる雛君は、彌生の時まちあぐみて早出で給ひぬとおぼし。

ちやアね、あたしがお話してよ。——伯母さんから爲て頂

いたお話を。

美しくしき小さき皇后の宮の前に、更に小さき王女達は半圓形をなしてぬざりぬ。をどめは皆のわが面みつめたるきは〜しさに、今更羞みて、戀するおとなのするやうなる伏目にしばしためらひしが、やがてあどなくも語りつぎぬ。

『その時分にな。』笑つては厭。これは伯母さんの口癖よ。伯母さんはあのやうにお氣がちがつて被入るけどね、今日のやうに御おとなしう御縫物なんか遊ばす時には、いろんなお話を爲て下さるのよ。

伯母さんがこどもの時分に御覽に成つたんですつて。

あたしの祖父さんの國よ、大隅つて。そこになんとか、さう〜帖佐と云ふ村があるの。

士族の家に美しい娘さんが有つたんですて、兄さんもあつたけれど、その御母さんの可愛者は娘さんの方なの。

娘さんの五つの時に、繪を書いて人の家に泊つてあるく遠方の人が、娘さんを見てね、『あなたのやうな美しい眼を持つて被入る方は、屹度五色の綺麗な翅をした大きな蝶々』

が、その眼を奪りに来る。あなたは其時に、兩方の袖でその蝶々を捉まへて、あなたの御髪の毛で縛つて、篋の中へ保存つてお置き成されさへすれば、あなたは日本一の富限者にお成りなさる』つて云つたの。だけどね又、『その蝶々をつかまへ損ねると、あなたは一生貧乏で、病人に成つてお暮しに成る。』と言つて聞かして、その繪かきは娘さんの頭を撫で、歸つたのよ。

さうするとね、それから娘さんは毎日々々蝶々が来るかと思つて氣を附けて居ただけれど、菜たねが咲いても、桃が咲いても、そんな大きな五色の蝶々は來ないの。

娘さんは仕方ことなしに、毎日千代紙やら金銀の紙やら色々の紙で、澤山の〜可愛い小さな蝶々を拵へて、それを

篋のなかに入れて、そしてね、大きな蝶々の來るのを待つて居たんです。

娘さんが十二に成つた時に、御本山の出張、——御本山はあたし知つて、よ、宅の御宗旨ですつて。築地の門跡さま

の本家よ。——御本山の出張のね御寺に、——新發意で伯母さんは被仰つたの。聞いたらね、御小僧さんの事です。

——御小僧さんの十三に成るのが京から下つて來てよ。娘さんの御母さんは信心でね、いつも娘さんを伴れてお寺へ參るの。娘さんが御寺へ參つて見ると、ね、なによ、美しいんですつて、その御小僧さんが。

御色が白うて、眉毛が女のやうに優さしい眉毛よ。白いお襦袢、白いお衣、白いお足袋、黒い紗と云ふ帛のお法衣を

ば着て、紫のはいつた金欄と云ふ袈裟を召して、お法衣の下からは赤い錦の帯が見えてるの。

あたし六つかしいわ、名が覚えられんもの。何とか云ふ壇の横を、後ろから出てきてね、如來さん、——佛さんのほんどの名よ。——如來さんの方へ斜に向いてね、碧い水晶や白い水晶や、紅や紫の水晶の珠数を手にかけて、——細りした可愛い手なんです。——手を合せて、立つたまゝ拜んで。

あたし、よつばと六つかしいわ、何とか云ふ臺よ、高い臺へ上つて。——あら間違ひよ、御輪燈と云ふもの、火やら立派な御華足と云ふお菓子やら、花やら、光明のさした難有い如來さんやらを後にして、それからその臺へ上るのよ。

上つてね、鈴のやうな美しく可愛い聲で、御消息つて、難有い門跡様の手紙の巻物をばね、御納戸の上品な伏紗から出してね、頂いてね、お讀みに成つたの。——伯母さんは讀むことを御披露と被仰つてよ。

そしたらお参りの同行が泣いたの。娘さんも泣いたのと伯母さんに聞いたら、娘さんはちやんと御母さんのお側に坐つてゐながら、御小僧さんを見上げるのが羞かしくつて、涙も出る間が無かつたんです。

歸りに御母さんが被仰るのには、「雖有い御小僧さんね、講座をお下りなされて、——思ひ出してよ、さつきの臺は講座よ、——なされてから、お前、また内陣で如來さんを拜んでおはいりに成つた時のお姿は、あれは極樂の五色の蝶

々が、こんな田舎へお使ひにお下りに成つたのよ』つて御母さんが話したの。

さうするとね、娘さんの其晩の夢に、その御小僧さんが来てね、娘さんの目元をじつと見て、嬉しさうに笑ふたの。娘さんが羞しがつてる内に、見てゐる内に、妙ね、ほんとに妙ね、御小僧さんが大きな五色の美しい美しい蝶々に成つてよ。

娘さんは、それが繪かきの云つた蝶々だと思つて、羞しいけれどね、一心に捉まへやうと爲たのよ。するとあべこべに蝶々の方がね、大きな翅を擴げて娘さんを抱いたんです。

それから娘さんは御母さんに伴れられて、一日おき位にお

寺へ參つて、御小僧さんと遊び朋輩に成つたの。遊んで見ると、その御小僧さんはね、如何しても極樂の五色の大きな蝶々に違ひ無かつたんだけれど、三月程してから京へ學問に歸つてしまつて、又來ると云ふ約束は虚偽でしたと。

このあとは伯母さん話して下さらないの。無理に聞いたらね、その娘さんは大きな五色の蝶々を捉まへ損ねたんで、一生陰氣な病人で暮して、まだ日本に居る筈だと被仰つてよ。

この奇しき物語のやうやう果てぬる時は、春の八つ時、早くより催し顔なりし五つ許の子の、先づうつぶしに眠りぬるに、いつものめをどのやうに寝ばやとて、皆罪なげにも美しくしき春の熟睡に成りぬ。この時四疊半の間に物縫ひてありし伯母は、そ

とこなた覗きて立ちぬ。棚なる梨地に金巻繪せる厨子のなかよ  
り、しろがねの手筥取うで、ひと足ふた足、徐かにこの間に  
歩み入ると見しが、蓋とりて握れるを、をとめ達が寐姿の上に  
颯とまさちらしつ。あなこは金銀の蝶よ、紅白の蝶よ、紫の蝶  
よ。折から吹き入る氣まぐれの春風は、うつろひがたの紅梅と  
伯母君がまさし亂蝶とを更に翻へして室に満たしぬ。中に鳩羽  
ねづみの被布きて、手のさきを徐かに胸のあたりに組みおはせ  
つ、微笑み立てる三十すがたの伯母君がけだかさ。をとめ達は  
何をか夢みるらむ。

## わがなげき

うまれは比叡の山ふもと  
もとより母は京びどの  
氏よき家の一の姫  
うぶげ撫でてはいたいけに  
美しくところ笑みにしか

(詩人ぞかひなき世にし生る  
わが歌たゞに我を説かめ)

衣冠くはへて堂上に

誰<sup>た</sup>ぞや仰<sup>た</sup>ぎて拜<sup>た</sup>せずや  
 隠<sup>ひ</sup>すとすれどあらはるゝ  
 おのづからなる面<sup>ま</sup>ざしに  
 王者<sup>さう</sup>の相<sup>さう</sup>もそなへむを

(かくて空<sup>り</sup>しく今日<sup>けふ</sup>も過<sup>す</sup>ぐ  
 この世<sup>よ</sup>かひなや我<sup>われ</sup>ために)

北<sup>きた</sup>斗<sup>と</sup>のひかりさすみなみ  
 ひどりが得<sup>え</sup>たる奇<sup>く</sup>し御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>  
 精<sup>せい</sup>力<sup>りよく</sup>人にすぐれては  
 萬<sup>まん</sup>卷<sup>ぐわん</sup>の書<sup>しよ</sup>も讀<sup>よ</sup>み破<sup>やぶ</sup>り

能<sup>よ</sup>く百<sup>ひゃく</sup>藝<sup>ぎ</sup>もきはめむに

(詩<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>ぞかひなき世<sup>よ</sup>にし生<sup>な</sup>る  
 わが歌<sup>うた</sup>われを歎<sup>なげ</sup>かでや)

黄<sup>こ</sup>金<sup>がね</sup>よ(さなりいつはらず  
 我<sup>わ</sup>は黄<sup>こ</sup>金<sup>がね</sup>と此<sup>こゝ</sup>に云<sup>い</sup>ふ)  
 黄<sup>こ</sup>金<sup>がね</sup>そなへて伸<sup>の</sup>さしめよ  
 この子<sup>こ</sup>が才<sup>さい</sup>をわたらこの  
 稀<sup>け</sup>有<sup>う</sup>なる才<sup>さい</sup>を伸<sup>の</sup>さしめよ

(無<sup>む</sup>情<sup>じやう</sup>ぞ天<sup>てん</sup>は驥<sup>き</sup>を生<sup>な</sup>みて)

なごか翼つばさをわすれたる

われを詩人と生おひしめよ

三十一字島さんじふいちじまうたの

たい短みづかかきに傲おごらむや

帝ていが賜たまびます手てぶからの

榮冠えいくわんもとより人にやらじ

(あゝいたづらに我わぞ今

七歩しちほの才さいを兒こらに誇こほる)

われを國使こくしと往ゆかしめよ

量りょうの廓大くわくだい、手ての竦絶らつぞつ

權變けんべん百の奇策きさくいだき

七列強しちれつきやうを連衡つなぎては

舌端ぜつたん天子てんしを安んせむ

(曾そうては空くうしく高麗かうらいに

一説客いちせいかくの嗤わらひとぞむ)

一家離散いつかりさんの形見兒かたみこに

くらゐあたへず黄金こがね附せず

詩聖しせい、帝王ていわう、將軍しやうぐんと

扮はんせむ衣きぬのそなへ無くて

名優端役の列に泣く

(かくて空しくしら髪生ひ  
落ちむは黒き死のとばり)

こゝに武藏の草のかど  
わびぬればこそ瘦せにけれ  
花のうたげに裳をひかせ  
手とらむ妻はかなしくも  
灯かけにいそぐ秋裕

(すねては大雅と赤裸々に

金粉塗りても踊らましに)

註、池大雅かつて京師の盆踊にあたり、裸身寸布を着けず、  
金粉値數百兩なるを塗抹し、黄金羅漢を現じて浴中を舞踏し  
去る。時人豪奢を競ふの輩驚かざるなし。各街の浴房之に由  
て利せむとし、温言大雅を招じて浴を乞ふ者頻なり。大雅願  
みず、鴨厓の清流に浴して悉く洗ひ去り、毫も意に介するの  
態なし。看る者更に皆色を失ひきと云ふ。拙詩の末句故に  
及ぶ。

木 かげ

朝は朝かせ枝に鳴り  
夕は夕じも陰におく



もとより名なき里ながら  
 小川に沿へる檜ばやし  
 踏めば母すむふるさとの  
 小百合の園のおもひあり  
 えやは忘るゝ武藏野に  
 君を待ち得し陰なれば

鳥 瓜

ありのすさびにまつはりて  
 夏は花もつ鳥うり  
 木がらし吹けば破垣に  
 酔ひてのこれる鳥うり

うらぶれぬれば老いぬれば  
 鳥も食まず鳥うり

悪 源 太

喚びならはして候へば  
 名はそのまゝの悪源太  
 一生のうらみ清盛を  
 安倍野に討たて生かせる  
 いざ六波羅の弱法師  
 わが矢おもてに立つて見よ  
 待賢門のこがらしに  
 阿修羅の如き十七騎

返せ重盛みにくきぞ  
 源氏の嫡子汝こそ  
 平家の嫡子義平が  
 刺しちがへむも耻は無し  
 御階のさくら盧橋や  
 七たびめぐる亂れ蝶  
 わかき武者振うつくしき  
 いくさも遺す悪源太

兔

羞ぢては含む口紅に  
 寢姿おもふ大人ぶり

いづこの姫か宵淺く  
 蓋して眠るを忘れけむ

賢しき人はおしなべて  
 光明にそむき走る世に  
 詩人の窓の小燈を  
 幸あるものと汝や見し

苦吟今宵を身も瘦せむ  
 冥助よ有れと念ずるに  
 忽然として圓き物  
 あな靈のごと近づける

少時しづかに眼もかれず  
 訝しみさては疑はる  
 机上の花の水仙に  
 こは幻影と消えむもの

抱けば膝にやはらかう  
 曾識ありげの白うさぎ  
 おそれず我になつくもの  
 あゝ今ひとり汝を見る

小雪とならむ風のおと  
 寒くば寄りて我と寝よ

わびぬる戀の歌の巻  
 戯れて汝が囁まむとも可矣

枕上花瓶賦

明治三十五年の秋、大坂に詩友泣菫と飲みけるに、旗亭出す  
 ところの小磁瓶、その形いたく我が好事の癖に投じぬ。別る  
 ゝに臨み、泣菫之を購ひて我に贈り、携へ歸らしめき。

ゆくりなく相見れば  
 うれしきは友が情  
 西びとの集買はむ  
 ふところの銀錢に  
 我をしも酔はしむる

浪華女が酌の手に  
おもしろの酒瓶や  
たけ五寸しろき磁の  
まるらかにふくよかに  
尻肥えてひろどりぬ

劍菱の銘なくも  
酒はよし灘伊丹  
わが友の詩と共に  
この瓶を溢れては  
あたゝかう又あまう

あたらしき派の作者  
典據ある文字とりて  
朦朧を忌まぬごと  
われ愛すこの瓶の  
新意にして古色ある

あゝ今ぞ遠き世の  
賢聖をうらやまぶ  
友に頼り瓶に頼り  
おほいなるこの慰藉を  
瘦せし身に覚えぬる

感<sup>かん</sup>じては沈<sup>ちん</sup>吟<sup>ぎん</sup>し  
 興<sup>きよう</sup>じてはうち笑<sup>わら</sup>ひ  
 天<sup>てん</sup>上<sup>じやう</sup>の千<sup>せん</sup>年<sup>ねん</sup>に  
 をしげなく換<sup>か</sup>へつべき  
 一<sup>いつ</sup>夕<sup>せき</sup>の歡<sup>くわん</sup>會<sup>くわい</sup>や

おもひでに贈<sup>おく</sup>らむと  
 美<sup>うつ</sup>くしき友<sup>とも</sup>が眉<sup>まゆ</sup>  
 のこる錢<sup>ぜに</sup>かたぶけて  
 わがなひし此<sup>この</sup>小<sup>を</sup>瓶<sup>がめ</sup>  
 詩<sup>し</sup>の反<sup>はん</sup>古<sup>こ</sup>につゝみしか

SEBVS9

萬<sup>まん</sup>金<sup>きん</sup>の鑑<sup>かん</sup>賞<sup>じやう</sup>に  
 王<sup>わう</sup>侯<sup>こう</sup>の座<sup>ざ</sup>を戀<sup>こ</sup>ひず  
 おもしろの酒<sup>さか</sup>瓶<sup>がめ</sup>や  
 主<sup>ある</sup>人<sup>じ</sup>ぞとわれに寄<sup>よ</sup>る  
 遭<sup>そう</sup>逢<sup>ほう</sup>の縁<sup>えん</sup>奇<sup>き</sup>なり

わびぬれば病<sup>や</sup>みぬれば  
 別<sup>わか</sup>れては酒<sup>さけ</sup>ならず  
 酒<sup>さか</sup>瓶<sup>がめ</sup>は花<sup>はな</sup>瓶<sup>がめ</sup>と  
 梅<sup>うめ</sup>いけて水<sup>みづ</sup>さして  
 枕<sup>ちん</sup>上<sup>じやう</sup>に在<sup>あ</sup>らしむる

○  
めしろにてもものも言ふなとすゑられし  
石ならなくに地に黙し居る

われとわが縊れて死なむおもひのみ  
善き友のごと訪ひも來るかな

しら玉の零碎をひろふところし  
てわがおもひでの昨日ききませ

うもれ木 完

明治三十五年十二月廿七日印刷  
明治三十五年十二月三十日發行

定價金貳拾五錢



著 者 與 謝 野 寛

發 行 者 大 橋 新 太 郎

印 刷 者 水 谷 景 長

印 刷 所 合 資 社 博 進 社 工 場

東京市小石川區久堅町百〇八番地  
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發 兌 元

東京日本橋區本町

博

文

館

蒙公爵 近衛篤磨公題字  
 文學博士 伊藤博文公題詞  
 尾崎紅葉 井上巽軒君序文  
 幸田露伴 葉君序文  
 橋本雅邦 君口繪文  
 武内 桂舟君插畫  
 大橋乙羽君著

全一冊 正一價  
 洋裝郵 圓一價  
 本美稅 錢廿

**花鳥集** 再版

題して花鳥集といふ花笑ひ鳥啼き風薫り  
 月輝く著者が半生の全集にして小説あり  
 雜著あり紀行文あり紀傳逸話あり風俗社  
 會觀あり噱笑怒罵幽憤の適一に茲に具備  
 し著者の面貌心性亦髣髴として茲に露呈  
 す以て著者の寫眞として見るべく以て著  
 者の一切經さなして讀むべし著者を知る  
 者は其れ唯花鳥集乎著者を罪する者も亦  
 唯花鳥集乎花鳥集萬歳！讀者諸君萬歳！

大和田建樹君著  
**散文深山櫻**  
 其文は清楚婉麗趣味掬すべく其歌は優雅  
 流滑奇想天外より來りて句々風を生じ言  
 々花を降らすものは大和田先生の筆さ爲  
 す此編收むるころ近作二百篇蓋し落寔  
 振はざる今日文學界中の旗鼓たるものは  
 此書を措きて他に又た何かある

全一冊 正一價  
 郵稅 卅五錢

大和田建樹君著  
**散文雪月花**  
 著者大和田先生の文學に深く措辭に妙な  
 るは世既に定評あり今此書は先生の散文  
 韻文二百拾餘篇を輯めたる者一たび繙か  
 ば櫻の山に分入るが如く手を放つ能はざ  
 るの妙ある可し

全一冊 正一價  
 郵稅 卅五錢

文學士鹽井雨江君著  
**美文暗香疎影**  
 雨江先生の美文や韻文や温籍にして流麗  
 情熱溢れ氣韻自から高く恰もこれ寒梅一  
 樹影清淺の水に落ち暗香黄昏の月に浮動  
 する如きは實に方今詩壇獨得の長技也天  
 下の讀書家願くは一本を備へて優美なる  
 詞藻を味はれよ

全一冊 正一價  
 郵稅 卅五錢

中邨秋香先生著 (再版)  
**新體詩歌自在**

正價金壹圓 郵稅十二錢  
 著者の歌文に深き既に江湖の熟知する所  
 而して新詩に於て特得の文藻を以て御  
 意見を有せらるるは其の詩學を以て御  
 歌所に奉仕せらるるを以て知らるべし  
 本書は我國歌詩の沿革より以て新體詩の  
 發達に及し廣く類題を設けて作例を示  
 し殊に多くの新事物を題として如きは  
 他に其比を見ざる所眞に書名に負かざる  
 良典といふべし

全一冊 洋裝本  
 美本

大和田建樹君著 (第四版)  
**新體詩學**  
 正價十五錢 郵稅四錢

大和田建樹君著  
**歐米名家詩集**  
 正價三十錢 郵稅四錢

大和田建樹君著 (第四版)  
**作文寶典**  
 正價六圓卅錢 小包送四圓

大和田建樹君著 (第五版)  
**實用作文寶典**  
 正價六十五錢 郵稅金六錢

雨江君 羽衣君 桂月君合著 (十五版)  
**美文花紅葉**  
 春花秋葉は天の文人間亦文辭なかるべ  
 んや鹽井雨江武島羽衣大町桂月三文學士  
 の文名夙に江湖に騒ぐ其の錦心繡腸吐  
 て美文となり發して韻文なるもの  
 そ數十篇集つて此冊子に在り才華爛發紙  
 上珠を聯れ地に擲たば金石の音を發せ  
 さす洵に花紅葉を一時に看るの心地すべ  
 く明治文壇の奇觀たる一言を俟たず天下  
 文を好むの士願くは一本を備へて讀誦に  
 資せられんを

全一冊 正一價  
 郵稅 卅五錢

文學士土井晚翠君著 (四版)  
**天地有情**  
 娥々の山洋々の水以て晚翠君の詩を評す  
 べし此集君が今日迄の吟哦を録してこゝ  
 に美麗の冊子を成す新詩中別に一旗幟  
 を樹立するもの詞華爛熳誠に明治詩壇の  
 新光輝たるに背かず請ふ愛讀を賜へ

全一冊 正一價  
 郵稅 卅五錢

野崎左文君著

# 日本名勝地誌

全部十二冊 洋裝總紙數 五千六百卅二頁

正價

一冊金三十錢 六冊金壹圓七十五錢 全部十二冊金三圓四十錢 郵稅一冊八錢

本書は全國を五畿八道及び臺灣の九大部に區別し更に國に分ち郡に分ちて各其部邑名勝蹟を詳説せるものにして名社巨刹の緣起沿革に至るまで講述して漏さず只に地理書として好參書なるのみならず又旅行案内書として絶好の好冊なり今や全部十二冊完成を告ぐ請ふ取纏め御注文を希望す

- 第一編 畿内 全一冊 第七編 北陸山陰 全一冊
- 第二編 東海道 上卷 第八編 南海道 全一冊
- 第三編 東海道 下卷 第九編 西海道 全一冊
- 第四編 東山道 上卷 第十編 北海道 全一冊
- 第五編 東山道 下卷 第十一編 琉球 全一冊
- 第六編 山陽道 全一冊 第十二編 臺灣 全一冊

發兌元 東京日本橋 博文館

故大橋乙羽君著 (色刷寫真版口繪廿八頁)  
**千山萬水** 洋裝上製美本 正價金五十錢 郵稅金十錢  
 本書は辱くも九重の御覽を賜ふの榮を得發售以來既に十三版を累刊するに至るの盛運に會す總紙數六百五十餘頁各地の名山大川古蹟勝景等優美なる寫真版を挿入して一々懇切に評述したれば實に一面完全なる旅行案内なると同時に婉麗なる大文章なり

田山花袋君著 (全一冊洋裝袖珍美本)  
**南船北馬** 正價四十錢 郵稅六錢  
 隨處に感興を作り到る處に詩想を着するは花袋子の紀行なり、ここに氏は語勝の見に富みて殘山剩水處として至らざるなく、處として探らざるなれば、その紀文には珍談奇話百出して或は溪村の夕或は深山の夜、或は怒濤岸を嚙むの邊、或は山中の湖畔など、他の紀文には見るべからざるの妙あり

故大橋乙羽君著 (色刷寫真版口繪二十頁)  
**續千山萬水** 洋裝上製美本 正價金五十錢 郵稅金十錢  
 東洋古來第一の美本として、其の内外の喝采を博したる千山萬水は、烟霞の癖は更に著地東北に止まりしを、東海畿内中國西南の州を跋渉せしめぬ。是に於てか續編あり之を初編に比するに、絶景亦頗る多し。裝幀の美麗亦優ることも劣ることなし

田山花袋君著 (全一冊洋裝袖珍美本)  
**續南船北馬** 正價四十錢 郵稅六錢  
 雪の函箱 淺間横斷記 草津嶺を踰るの記 狐島 南洋の遺跡 並木づたひ 陸羽の一匝 瀬戸内海 播磨名所 鎮西の諸勝 一歩一景 箱根撮影記 雪中の木曾 華嚴寺霧降と裏見 戰場々原 栗山郷 老僧降三の松 冬の日光 多摩の水源地 富士川を下るの記



日本鐵道株式會社編纂 全一冊洋裝

### 日本鐵道線路案内記

四六判五百頁正價四十五錢郵稅十四錢  
名勝舊蹟寫真銅版 百餘頁挿入

- 一區線 自上野至高崎 山手線 自品川至赤羽
- 二區線 自大宮至白河 海岸線 自田端至岩沼
- 三區線 自白河至盛岡 日光線 自宇都宮至日光
- 四區線 自盛岡至青森 兩毛線 自小山前橋ヲ
- 五區線 經由シテ一區線ニ接續ス

尙本書は前掲の外前付に本社各課所在地、及び諸般の統計、旅客の注意、入場切符の發賣、定期乘車券、回数乘車券、學生の乘車賃金割引、多人数乘車券、列車仕給、旅客列車の別立、客車貸切、旅客の手荷物并に小荷物其他の賃金表、大貨物運賃及手数料、日本鐵道貨物取扱人名簿等、あらゆる旅行に必要な事項は秋毫も漏らさず明細に列記して遺憾なく實に從來坊間において上る人は常に旅鞆中本書を収めたり故に旅途にの慰藉となるのみならず精細に地理人情物産等をも知悉するを得べし

(六)

野崎左文君著 (各地名勝寫真挿入)

### 改正漫遊案内

全一冊洋裝正價四十錢郵稅八錢

本書綱目

- 東海道鐵道線路の部
  - 關西及參宮鐵道線路の部
  - 大坂及奈良鐵道線路の部
  - 山陽鐵道線路の部
  - 甲武及青梅鐵道線路の部
  - 總武及成田鐵道線路の部
  - 東京灣汽船航路の部
  - 日本鐵道線路の部
  - 信越鐵道線路の部
  - 外追加附錄數項
- 博文館發兌

故大橋乙羽君著 (全一冊寫真版五十景入)

### 耶馬溪

洋裝上製袖珍美本  
正價金四十錢 郵稅金四錢

嶺山陽をして耶馬の溪山天下に無しとて絶叫せしめたる豐の耶馬溪、亦著者の周遊する所となり其明瞭の紀文、靈妙の寫眞は本書となり、從來斯勝を髣髴する者は、獨り山陽の紀文ありしに著者は山陽の未だ到らざりし所迄到り、其未だ寫さざりし奇勝を寫したれば、斯を一讀する者、遊意勃興、好嚮導を得たるを謝せざる可からず

岸上質軒君校訂 (續帝國文庫廿四編)

### 續紀行文集

全壹冊洋裝菊判背皮クローズ  
正價金六十錢 郵稅金十六錢

本書收むる所の紀行文長短四十七編年代を以て之を次序す變遷沿革の跡を考ふるに便せんが爲なり貫之朝臣の土佐日記は紀行文の祖と稱せらるるも單行の文も少からずはた文詞古晦にして解し難きふしもあるれば之を省き嚴島御幸記を以て巻首に掲げぬ

故大橋乙羽君著 (續帝國文庫第二十編)

### 紀行文集

全一冊洋裝菊判背皮クローズ  
正價金六十錢 郵稅十六錢

目次

- 東遊記後編
- 西遊記後編
- 日本行脚文集
- 諸國軍人談
- 東遊記後編
- 西遊記後編
- 筑紫紀行
- 奥の細道

岸上質軒君校訂 (續帝國文庫卅五編)

### 續々紀行文集

全壹冊洋裝菊判背皮總クローズ  
正價金六十錢 郵稅金十六錢

遠くは鎌倉時代より、近くは徳川時代の末に至るまで、學者の紀行文中、最も趣味あるもの數十篇を集む、艱難を極めたる冒険談あり、風流なる遊記あり、一篇自ら一篇の妙味を具へ、而も通解すれば、時世に伴ひ、風俗志尙の轉變を見れば、娛神臥遊の絶好伴侶なり

(七)

主筆與謝野鐵幹



文學美術の兩面より東西の新趣味を供給して、誠心學實の學風鼓吹するものは「明星」なり壹冊代價金拾七錢郵稅壹錢拾二冊分前金代價郵稅共金貳圓〇發行所東京府中澁谷三百八十二番地 東京新詩社

月刊繪入文學雜誌

